

Z32-B88

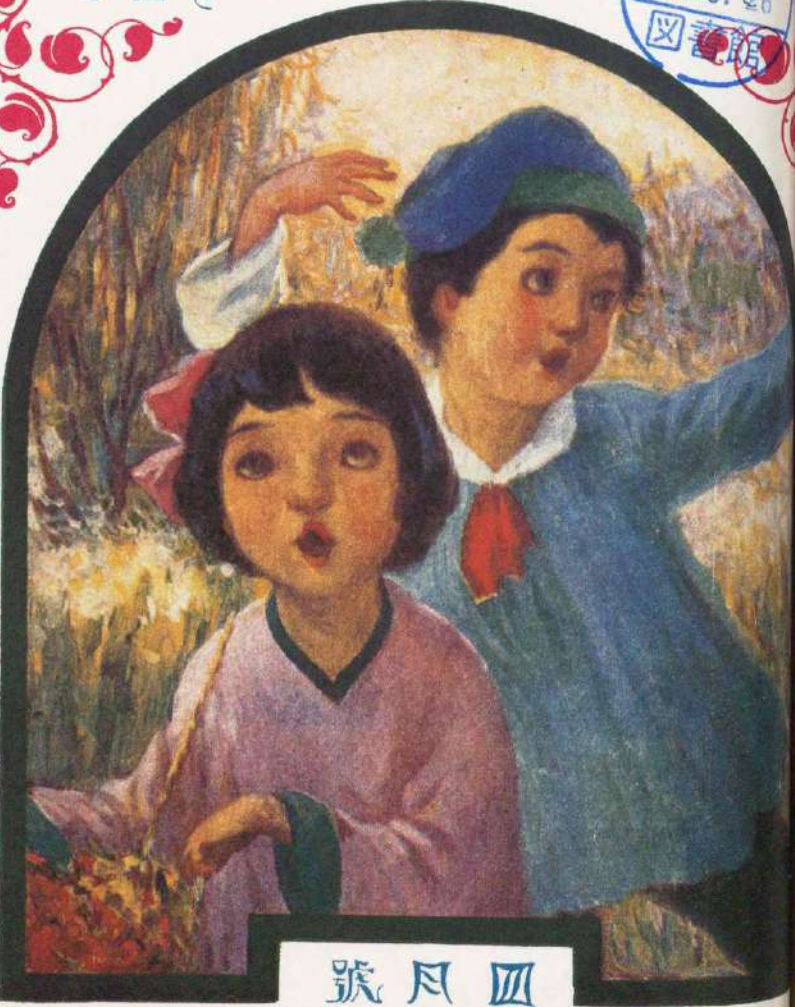
島崎藤村・有島生馬監修

# 金の船

特別増大號

巻四第

大正十一年三月五日印刷  
大正十一年四月一日發行



巻四第

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

## Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



## Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

（左）藤村 有島生馬



# 集 謠 童 の ス ル ア

# ニ ツ ボ ノ ホ ン

## 三月の鶯印レコード

俚 謠	同	小 唄	歌 太 夫	狂 言 前	義 太 夫	ハ ー モ ニ カ 合 奏	清 元	長 唄	俚 謠
伊 豫 節	お ぎ ん た 節	お 能 春 の 遊 忘 れ た 花 見 節	梅 にも 春	本 能 寺	酒 律	各 國 ヲ 歌 各 大 學 校 歌 應 援 歌	か さ ね ( 累 ) ( 五 夜 ツキ )	筑 屋 川 ( 秋 ツキ )	伊 豫 中 川 本 節 伊 豫 節
伊 豫 中 川 本 節	同 ( 笛 )	巴 家 寅 子	同	江 馬 旭 子	三 味 線 竹 水 津 太 夫 論 澤 友 治 郎	大 明 寺 上 原 誠 地	三 味 線 吉 吉 太 太 地 郎 大	三 味 線 吉 吉 太 太 地 郎 大	伊 豫 中 川 本 節 伊 豫 節

▼信用ある蓄音器店は何れも當社の特約店なり。

どれもこれも面白いものばかり  
特に本月は宮城道雄先生が作曲して吹込まれた  
琴曲「紅薔薇、若水、秋調」  
春の風、おうむ、紙風船、おさる、お  
童 曲 んどりめんどり、白兎、七面鳥、春の  
雨、文福茶釜、あひる。  
を賣出しました是非共一度お聞下さい。  
——(目録月報御申越次第送呈)——

株式 日本蓄音器商會  
販賣部  
東京橋區銀座一丁目  
大阪東區南久寶寺町四丁目

北原白秋氏譯◇恩地孝氏裝幀◇原綴挿畫六葉◇四六判箱入

英國童謡 ままごいめぐらうす

錢拾八圓貳價定  
錢七拾料送留書

まざあ、ぐらうすは英米の子供達に昔から愛されてゐる世界的童謡集です。この童謡の中にはお月様を飛び越える牝牛のダンスや、パンにお煎餅というなるロンドンのお寺の鐘、等に乘つて青天井の煤掃ひにお月様より高くのぼるお婆さんや、梅指よりも小さな豆つぶの旦那さま、さうしたそれは不思議で美しい面白くてまららない童謡ばかりを日本民謡調に譯された本です。

三木露風氏著◇初山滋氏裝幀◇山田耕作氏作曲◇四六判箱入

繪入童謡 眞珠島

錢拾八圓貳價定  
錢七拾料送留書

私は今も決して忘れることの出来ない幼年時代の想像や感覚やをさながらの言葉にしてうたつたものもあり、又は子供の心持の経験から現在の自然照を童謡にしたものもあり、童謡は乃ち天真のみづいしい感覚と想像とを易しい言葉でうたふ時、易しい子供の言葉で、それをらはほんたうの詩と異ならないものを易しい子供の言葉でといふ意味です。童謡は詩です(著者)

北原白秋氏著 とんぼの眼玉  
北原白秋氏著 兎の電報

定價 九拾五錢  
定額 九拾五錢  
書留送料 九拾五錢

ス ル ア 電話九段二一八八番 東京東區南久寶寺町四丁目 五十町



目次

野のかへり(表紙・原色版)……………岡本歸一  
 お留守居(口繪・三色版)……………  
 金魚と鶏(童話)……………一 野口雨情  
 二つの鳥(童話)……………二 野口雨情  
 タメになる話(童話)……………四 沖野岩三郎  
 海の勇者(童話)……………三 楠山正雄  
 餅の取りあひ(繪ばなし)……………三 岡本歸一  
 佛様と泥棒(童話)……………三 植松壽樹  
 鞍馬寺の牛若(史劇)……………五 窪田空穂  
 櫻(童話)……………三 若山牧水  
 かまど姫(童話劇)……………四 中島孤島  
 澄子さんかした話(童話)……………三 前田晃



蹴鞠の神(傳説)……………五 藤澤衛彦  
 みそさざい(幕集童話)……………三 野口雨情選  
 悪い易者(童話)……………三 宮島資夫  
 梅若丸物語(童話)……………三 齋藤佐次郎  
 孝ちやんのお祈り(童話)……………三 石井香夢  
 夢の國(童話)……………三 霜田史光  
 家なき兒(名作童話)……………七 三宅房子  
 赤い帆の船(童話)……………七 多田不二  
 自轉車二臺(自由畫)……………七 山本鼎選  
 チヤホ(幼年時)……………六 若山牧水選  
 馬の足が折れた(藝方)……………六 編輯部選  
 通信……………一四

(附 録)  
 淋しい便り……………沖野岩三郎







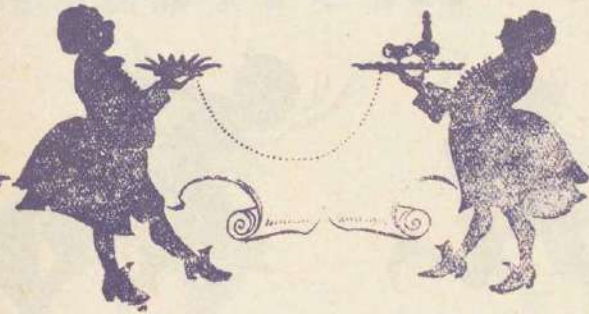
お留守居

岡本綺一畫

「あゝ、もう寝ようかしら！ みんなはもう王様の御殿へ行つて、踊つたりなんかしてゐるのに、あたしばかり本當につまらないわ。」

「お母様がゐらしたら、さつと一しよに連れてつて下さつたらうに！ あゝお母様！ あなたはなぜ死んだんです。他の人にはみんなお母さまがあるのに、あたしにはばかりはないなんて、あんまりだわ！」

（「かまど能」の四七頁を御覽下さい）





★一 歸本岡★  
畫繪の念入が生先

大よろこびです。

(郵便切手は  
二割増です)



この繪はがきを見て皆が

きはる

輯一第  
(馬の様王)

の繪はがきと御喜びました。出来上りしました。期待以上

輯一第  
(鳥い青)

空前とも云ふ可き繪はがきです。是非一度御らん下さい。

お伽繪はがき

著生先情兩口野  
れ切賣版三版再  
たしま來出が版四第

童謡作法問答

◎本書は童謡について宛も親が子に、ものを教ふるが如くに親切丁寧に説き明してありますから、どなたが讀んでもほんたうによく解ります。本文約三百頁に近い全部が童謡の初一步から詳しく説明して作り方が書いてあります。▽定價金一圓、送料金十錢▽

賣發社蘭交

六十町保神南區田神市京東  
九七二〇四京東替振

(一の付前)金



白眉社 編輯部 纂編

# 音樂講話叢書

一冊 五十錢づつ 送料四錢  
(但し倍大特價のもの  
 は此の限りにあらず)

西洋音樂の發展につれて音樂上の諸科目の知識を保持せしめんとする江湖の要求を醫さんが爲めに生れたる叢書で煩に互らさず、簡單に要領を得るよう書いてあるのが本書の特色です。内容種類は音樂に關するあらゆるものを網羅してありますから、本書を座右に備へて置けば音樂の事一として分らぬものはないのです。

[刊新]

- (1) 樂譜の知識 (本譜早) 送料四錢
- (2) オペラの話 送料四錢
- (3) 聲樂研究法 送料四錢
- (4) ピアノの習ひ方 送料四錢
- (5) オーケストラの話 送料四錢
- (6) 音樂解説辭典 (倍大) 送料六錢

- ◎音樂人名辭典
- ◎小説作曲法
- ◎ヴァイオリンの習ひ方
- ◎音階の話
- ◎マンドリンギターの習ひ方
- ◎日本音樂の話
- ◎ハーモニカの習ひ方
- ◎和聲學初歩
- ◎音樂の聴き方
- ◎簡易音響學
- ◎ダンスの話

中山氏作曲 **ポチの學校** (新童話) 三十錢 本居氏作曲 **新童話** 第八、三十錢 宛 春柳 編 宛 二錢  
 野口氏作曲 **故郷の唄** (附 旅人の唄) 二十錢 佐々木氏作曲 **新童話** 第六、二十錢 宛 百眉 編 宛 二錢  
 野口氏作曲 **童話唱歌** (編選) 二十錢 宛 百眉 編 宛 二錢  
 土屋氏作曲 **童話樂譜** やまばと 三十錢 山本氏作曲 **創作曲譜** (編選) 二十錢 宛 百眉 編 宛 二錢  
 中山氏作曲 **マンドリン曲粹** (二編) 五十錢 宛 百眉 編 宛 二錢  
 野口氏作曲 **マンドリン曲粹** (一編) 五十錢 宛 百眉 編 宛 二錢

白眉出版社 東京市外目黒四八六 振替東京市下目黒四八八

(二の付前)金

# 現代童話選集

現代童話の粹を集め 精を凝せる 一卷

秋田 田村俊彦 白鳥省吾 豊島雨星 野口正廣 福田幸次 百福田大 山田宗次 吉田康一 井上康二 佐藤太郎 久米正雄 小川未太郎 菊地正太郎 小江寛明 江崎浩二 宇野浩二 芥川龍之介 芥川浩二 小川未太郎 久米正雄 佐藤太郎

現文壇に於いて童話に筆を執る小説家、詩人二十三人の作、收むる所二十六篇、悉く寶玉にも比すべき名作真に藝術的童話の精髓をなす。兒童讀書界に一大曙光を與ふるものなり。地上樂園としての童話時代に住む美しき反映、又懐しき搖籃の追慕として、この集は人生に與へられたる永遠の光である。愛しくも又美しきわが子の唯一の友として如何なる家庭にも必須なものであると共に、勉學の餘暇に兒童の楽しむ絶好の書である。

大六四 刷色五 刷口武井 大六四 刷色五 刷口武井 大六四 刷色五 刷口武井

# 星の子供

百田宗治先生著 童話・童話集

美しい表紙・口繪原色刷・挿畫數葉・可愛い本です。 乙部孝・武井武雄兩先生の畫 定價壹圓廿錢・郵稅八錢

振替東京市外目黒四八六 電話東京市下目黒四八八 電話東京市下目黒四八八



英國 早大教授 **チャルズ・キングスレイ** 原著 織田一磨先生裝畫  
 横山有策先生 胡桃正樹先生共譯 (四六判布裝) (上裝美本)

新刊 **(童話)** **水の赤ん坊**

定價 壹圓八拾錢  
 送料 普通 八錢  
 書留 十五錢

子供には一番よい物を與へねばなりません。子供によしあしが何で判るものか」といふ誤つた考を捨てねばならぬ。よい童話が澤山出ますが、陰氣な暗いお化話しや、嘘つきや泥棒ばなし、子供に判り難い用語の多いことなどは、また、今日の童話の大缺陷です。此點に氣付いた譯者が英國文豪の名作を日本の子供に讀ませたいと言はれます。煙突掃除の小僧を主人公とし、透き通るやうな美しい感じのする愉快な讀物です。子供を愛さるゝ世の親達にお薦めします。  
**賀川豊彦先生**曰く。……主人公に煙突掃除の子供が描かれ其話の進展するに伴れて可なり涙ぐましい場面もあるがそれでも尙凡て愉快な氣持を兒童に與へつゝ讀ませる。また其末路が「死」であるにしても、それが少しも「死」を悼むといふ悲哀に捉はれないのは感心だと思ひます。(九月二十五日讀賣新聞所載)

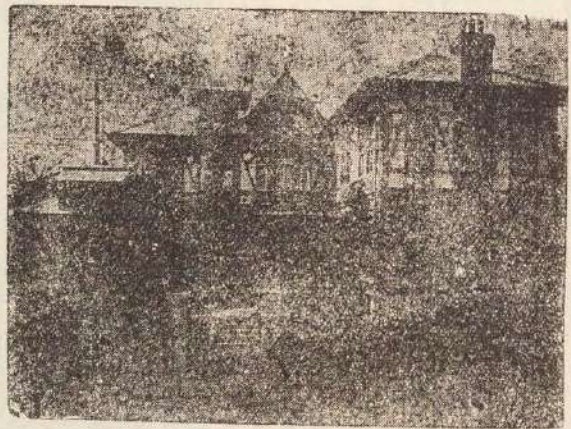
東京 神田 町 紅梅 同 社 振替 東京 二七〇六 電話 二九五四

(前の付四)

天下の青年は何故に争ふて **大日本國民中學會に入會する乎**

- 講義が新しいから
- 會費が廉いから
- 指導が良いから
- 學制が正しいから
- 基礎が固いから
- 講師が善いから
- 卒業が早いから
- 成功が慥だから

會長 **尾崎行雄**  
 學監 文學博士 遠藤隆吉  
 顧問 新井上博士 三宅博士  
 井上博士 浮田博士  
 岡田前文部大臣



一人前の男となるには、どうしても中等教育を受けなければいけない。中等教育の學力のない者は、どうしても生存競争の勝利者たることは六ヶしい。併し家庭の事情で中學に入れぬ者も決して失望するに及ばない、中學校に行かずに中學卒業同様の學問をする方法がチャンネルと出來てゐる。それは創立以來二十年の古い経験のある講義録で有名な大日本國民中學會の通信教授法である。

東京駿河臺(お茶の水電車通り)  
**大日本國民中學會**  
 振替東京四二〇〇 電話 神田三〇〇二  
 神田三〇〇三 神田三〇〇四

◎ 創立以來二十一年 記念大特典提供 **入會の絶好機**

講義録見本つき  
 規則書無料進呈





金魚と鶏

作曲 藤平 作詞 橋本 情平 雨山 山口 野中

5 5 3 2 1 1 3 3 | 2 2 5 5 0 1  
つん つん とん てる あか とん ぼ  
ツン ツン トン デル アカ ドン ホ

6 6 6 5 6 6 1 1 | 2 2 1 1 2 0 1  
さん さん や の さん び は な に して か  
トット ヤノ トッ トハ ナロ シテダ

3 6 6 3 | 5. 5. 6 1 |  
み ん な て な ら 4 ヤ  
4 ン カ テ ナ ョ ン ズ

5. 5 3 2 | 1 - - 0  
み つ の ん て た  
6 ン 末 シ ア

児童の爲に  
なる讀もの

懸賞  
大募集

▼ 珍しい科學の話 送料八錢  
▼ 東京遊學案内と學校の評判 送料八錢

▼ 科學趣味世界の奇蹟 送料八錢  
▼ 奇絶幽靈の話 送料八錢

童謡(創作たるべきこと)翻譯や燒直しはいけない長さは隨意  
賞一等二十圓一名 二等十圓一名 三等五圓三名 四等三圓五名  
綴方、童謡、和歌、俳句、自由畫 應募者は満十七歳までの少年少女に  
毎月十日毎切 宛名 東京市外集町宮下六三  
限る 兒童の心編輯部 送料八錢

綴方の上手になりたいと思ふものは「兒童の心」をおよみなさい。  
童謡を作つて見たいと思ふものは「兒童の心」をおよみなさい。  
童話の作り方を知りたいものは「兒童の心」をおよみなさい。  
兒童の心は綴方、童話、童謡、和歌、俳句の先生でありお友達であり  
本書には諸先生の綴方や童話童話のお話しや全國兒童の作りしすぐれた綴方、童謡、童話が澤山のせ  
てある。

神田區宮本町  
兒童の心社

發行 日一月毎

兒童の心

小學兒童の綴方や童話が上手になる爲の面白い雑誌

定價

三圓 一圓 六錢 九錢 三錢 一圓 四錢 一圓 一錢 一圓 一錢 一圓 一錢

店書堂松二 六十の一町錦區田神市京東 番九〇四三第東京東座口替振 所賣發

(大の付前)金



二つの小鳥

野口雨情

畑で 米磨ぐ  
なんの鳥

あれは 畑の  
みそさざい

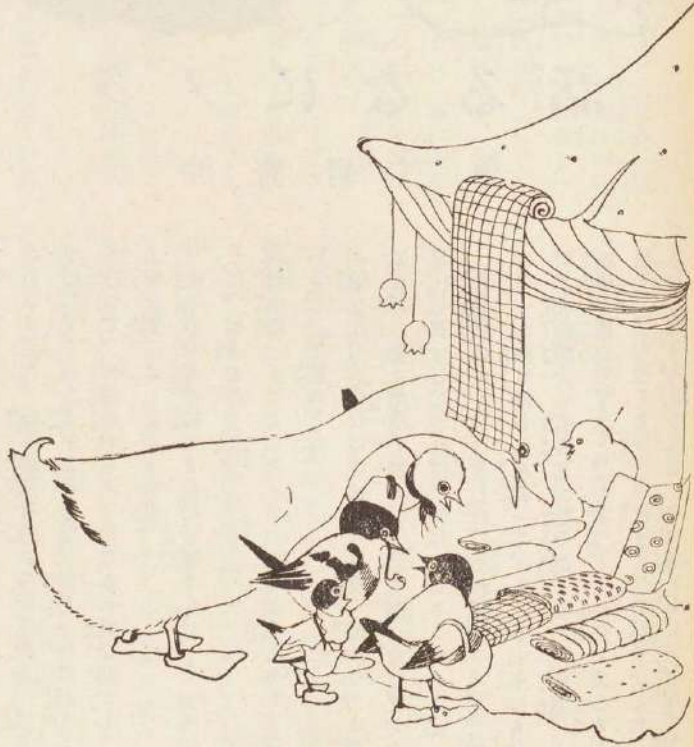
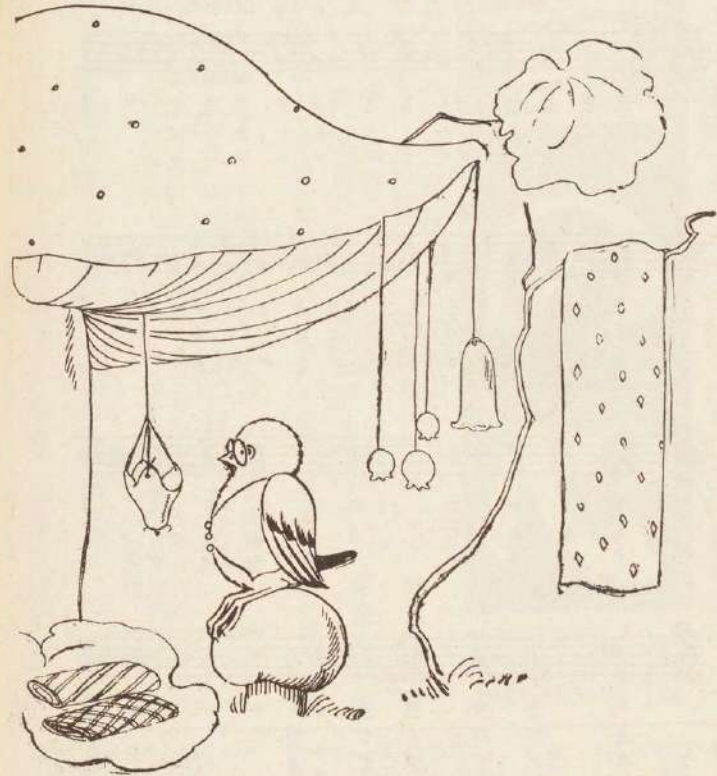
跳足で 米五合

磨いだとサ

河原で 機織る  
なんの鳥

あれは 河原の  
河原雛

河原さ 呉服屋  
出すだとサ







# 話るなにメタ

郎三岩野沖

昔、紀州の山奥に、余所次といふ吝嗇漢な爺さん  
がありました。餘り強慾な爺さんですから、誰れも相  
手にしてくれる人がないので、毎月一度は必ずお寺  
へ行つて、和尚様からタメになるお話を聴かして貰  
ふ事を樂みにしてゐました。  
或年の四月の初めでした。爺さんは、いつものや  
うに、お寺に行つて、

「和尚様、またどうぞタメになるお話しをして下さ  
いまし。」と頼みました。

「爺さん、あなたはタメになる話を聴かせろと言つ  
て、毎月々々此所へ来るが、話は聴いたばツかりで  
それを實行しなければ、何にもなりませんよ。」

和尚様はかう言ひました。それは爺さんが、此の  
お寺へお話を聴きに來初めて、もう十七年にもなる  
が、和尚様から有益なお話を聴く度に、「成程、へー  
成程、感心ですなア、」と言つて、口先で感心するば  
かりで、ちつとも行ひが改まらないからでした。叱  
られた余所次爺さんは、和尚様の前に、何度も何度

か。」と申しました。

「實行の出来ない話ですか、それは有難うございま  
す。是非お聴かせ下さいませうやう。」

余所次爺さんは、またべこ〜と三つ四つ頭を下  
げました。

和尚様は机の上にあつた「顔氏家訓」といふ書物  
を開いて、その中にある、

窮鳥、懐に入る。仁人の懐れむ所……

といふ文句を説明しました。

「小鳥が鷹に追はれて逃げて來た時、何所にも隠れ  
場所がなくて、あなたの懐に飛び込んで來たなら、  
その時あなたはこの文句を想ひ出して、その小鳥を  
助けてあげるんですよ。決して、さアしめた！  
などと言つて、その小鳥を殺したり、それを捕へて  
鳥屋に賣つたりしてはいけません。」

和尚様がかう言つた時、余所次爺さんは、餘程嬉  
しかったと見え、額へ五つも六つも、横に深い皺を  
見せて笑ひました。そして、

も米精齋翁のやうに頭を下げて、  
「和尚様、あなたのお話は、本當にタメになるお話  
で、毎度々々面白く拜聴いたしますが、和尚様の仰  
しやるやうに、やれ慈悲の、やれ情のと云ふ事を一  
一實行してゐた日には、私の財産を何百倍にしても  
皆なくなつてしまひます。だから私は最う、世の  
中の貧乏人だの、不仕合せな人だのといふ者は相手  
には致しません。だから、今日は一つ、人間を憐れ  
めとか、人に親切をしろとかいふお話でなく、鳥や  
獸を大事にしろといふ、タメになるお話をして下さ  
いませんでせうか。それなら實行出來さうに思はれ  
ますが、如何なものでござりませう？」と言ひまし  
た。

和尚様も、あまりの事に呆れて物が言へませんで  
した。しかし大變に賢い、そして氣の長い和尚様で  
したから、

「さうか、それぢやア、鳥や獸を大事にしろといふ  
話で、實行の出來さうにもない話をしてあげませう



「成程それは實行出來さうにもありませんですなあ  
小鳥は鷹が恐ろしいでせう。しかし鷹よりも人間の  
方が、もつと／＼恐ろしい生物ですから、人間の懐  
へ逃げ込んで来るなんて、そんな事は、まあ／＼あ  
りませんからなア。」と言ひました。和尚様も馬鹿ら  
しいから、

「さうだ／＼、殊にあなたのやうな、強慾爺さんの  
懐なんかへ、飛込んで来るやうな、そんな馬鹿な  
小鳥はありませんよ。」と云ひました。

和尚様は、こんな失禮な事を言つたなら、爺さん  
屹度真紅になつて怒つて来るだらうと思ひましたが  
爺さん一向平氣な顔で、

「しかし萬々一、そんな事があつて、私が其鳥を助  
けてあげたなら、鳥は私に、どんなお禮をくれるで  
せうか。」とたづねました。

何所まで慾張つた爺さんだらう？ と、和尚様は  
呆れてしまひました。けれども生れて一度も、腹を  
立てた事のない和尚様ですから

多分小判でも銜へて来てくれるでせう。」  
と言つて笑ひました。

強慾な余所次爺さんの事ですから、小判をお禮に  
くれると聞いたので、もう堪らなくなりましたので、  
早速お寺を飛んで出て、裏の松林へ駆け込みました。  
そして着物の襟を広く披いて、鷹に逐はれた鳥が懐  
へ飛込んで来るのを待つてゐました。

其日は大變温かな日で、空には一片の雪もありま  
せんでした。

余所次爺さん、善い氣持になつて、襟を披いたま  
ま、こくり／＼と坐睡を初めました。俄かにチ  
チ、チ、と鏡どく鳴く鳥の聲が聞きましたので吃驚  
して眼を覺すと、頭の上に黒い翳が、さつと落ちて  
来たと思ふと、何だか知らないが、小さい物が爺さん  
の披いてゐた懐の中へ飛び込んで来て、お臍の所  
へ隠れてしまひました。

「さアしめた。翳鳥だ、翳鳥だ。」と云つて頭を上げ  
ますと、一羽の大きな鷹が、松の枝の上に来て宿り

ました。  
余所次爺さんは起上りざま、大きな聲で、  
『ほうーい！』と呼びますと、鷹は、吃驚したやう  
に、ばた／＼と羽／＼鳴らしながら向ふの方へ逃  
げてしまひました。多分鷹は爺さんを石地藏だと思  
つてゐたのでせう。





そこで余所次爺さんは、懐を廣く披いて、  
「さア、俺はお前を助けてやるぞ。顔氏家訓といふ  
書物に窮鳥懐に入る、仁人の憫れむ所といふ文句  
がある。助けてやるぞ、さア助けてやるぞ。」と云ひ  
ました。

すると、懐の中から小さい可愛鳥が一羽飛び出  
して来て、爺さんの肩のところに着いて、チ、チ、  
チ、と三聲鳴いて嶺の方へ飛んで行きました。爺さ  
んはその飛んで行く小鳥を見送りながら、  
「おうーい、窮鳥さん、窮鳥さん、お禮を忘れては  
いけませんよ。」と呼びました。

「小判だぞ、今に小判を持つて来てくれるぞ。」  
爺さんは獨り語を言ひながら、待つてゐますと、  
間もなくさっきの小鳥が、松の枝の所へ飛んで来て  
頻りに下の方を覗いてゐました。それを見た余所次  
爺さんは、

「おい／＼窮鳥さん、早く小判を此所へ落すんだよ」  
と云つて、襟をありつたけ廣く披いて懐を見せま  
せました。その時和尚様は、大變感心したやうに、  
はたと膝を打いて、

「余所次さん、あなたは偉い。大抵の人なら、こん  
な蟲食栗をお禮に貰つた時、(何だこんなものを!)  
と言つて、投げ捨てるにきまつてゐる。所が、あな  
たは、こんなものでも大事に大事に持つて歸つたと  
いふのは實に感心だ。御覽なさい、この栗の實は、  
乾度普通の栗ではありませんよ。」と言つて、蟲食栗  
を法衣の袖に載せて、つく／＼と眺めてゐましたが、  
不圖思ひついたやうに、その蟲の食つた小さい穴の所  
に唇を當てがつて、ひゆうと吹いてみますと、何  
といふ不思議な事ぞう。蟲食栗は、

ちん、ちよッびん、小鷹の大鷹の、ちんちろ兵  
衛の、ちよん、ちよん。  
と、鳴るぢやありませんか。  
和尚様も余所次爺さんも、吃驚仰天してしまひま  
した。

した。  
それを見た小鳥は、何だか小さいものをほとりと爺  
さんの懐へ落とし込みました。

「おや、小判のやうでもないぞ！」と云ひながら、  
落ち込んだものを取出して見ると、何の事です。そ  
れは小さい／＼栗の實で、しかも、二つまで蟲食ひの穴  
があるぢやありませんか。

爺さんは大變失望しましたけれども、元から強慾  
な爺さんですから、その蟲食ひ栗を捨てることも出  
来ませんので、そのまゝ、袂へ入れて持つて歸りま  
した。

五月の初めに余所次爺さんはまた、お寺へタメに  
なるお話を聞かして貰ひに行きました。そして窮鳥  
が懐に入つた話を致しました。

「ふん、さうか。それは感心だ。定めし小鳥は、大  
判か小判を衝へて来たぞう。」和尚様は笑ひなが  
ら言ひました。

「否エ、こんな小さい蟲食ひ栗ですよ。」と言つて余所

下殿の時、この村へ御代官様が来て、庄屋の家  
に宿つてゐました。で、和尚様と、余所次爺さんは  
その蟲食栗を白い絹の布片に包んで、桐の箱へ容れ  
て、御代官様に御目にかける爲めに、庄屋の家へ持  
つて行きました。

お代官様は和尚様から詳しい話を聴いて、その栗  
の實の蟲食穴を吹いて見ますと、本當に、

ちん、ちよッびん、小鷹の、大鷹の、ちんち  
ろ兵衛の、ちよんちよん。

と鳴りますので、御代官様は、  
「これは珍しい品ぢや、私にこれをくれませんか。」  
と申しました。すると余所次爺さんは、にこに  
こ笑ひながら、

「差上げます、差上げます。どうぞお持ち下さいま  
し。」と申しました。

和尚様は思はず手を拍つて、  
「これは不思議ぢや。この強慾な余所次爺さんが、  
惜し氣もなく、他人に物を與げたのは、恐らく、此



男が生れて初めての事でせう。」と言ひました。  
庄屋の伍六兵衛さんは、扇子をさつと開いて、  
「不思議ぢや、不思議ぢや。余所次が借氣もなく、

他人に物を與げたのは、蟲食栗の實が歌を歌ふより  
もつと／＼不思議ぢや。」と言ひました。  
御代官様は黙つて考へてゐたが、暫くして、

「不思議でも何でも無い、十七年の間  
毎月々々々々になるお話を聴きに行つ  
たその忍耐力に對して、お天道様がこ  
の御褒美を下されたに相違ない。私は  
この栗を殿様に献上します。」と申しま  
した。

御代官様はその栗の實を殿様に献上  
致しました。

殿様は餘りに珍らしい品だと言つて  
それを都の天子様に獻納いたしました  
天子様は、これは不思議な笛だと、  
御仰せになつて、わざ／＼使を遣つて  
その蟲食栗を支那の天子様に御贈りに  
なりました。



これは世界の寶だと仰しやつて、大きな倉を建て、  
その中へ納つて置きました。或日一人の泥棒がそ  
の藏の中へ忍び込んで、不思議の栗の實を盗んで逃  
げました。

泥棒はその栗を植ゑて、澤山々々、そんな不思議  
な實を結ばせて大儲けをしようと思つたのでした。  
泥棒の植ゑた栗の實は野原の真中に生えました。  
二葉は段々大きくなつて三年目には七つの實がなり  
ました。

けれども其時、泥棒は監獄の中に繋がれてゐたの

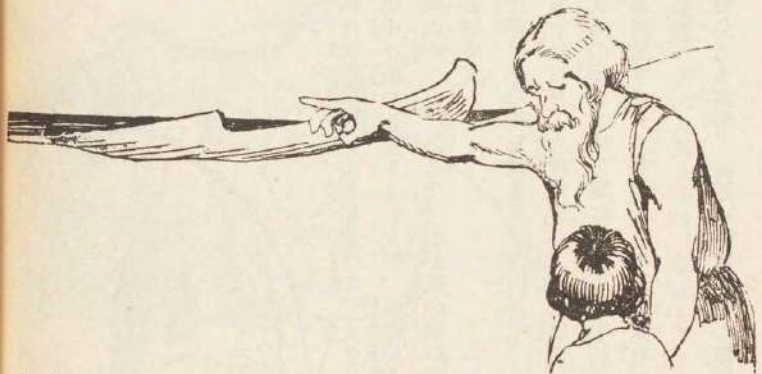
でした。

その時泥棒は、自分の悪心から世界に唯つた一つ  
しかない寶を灰にしてしまつたと云つて、大聲を擧  
げておい／＼と泣きました。

そんな事は夢にも知らない余所次爺さんは、自分  
の倉に貯へてあつた五百俵のお米を、村の貧しい人  
達に皆な分けました。

それを見た和尚様は、十七年の間絶えずタメにな  
る話をした結果が、今現はれて來たのだと言つて、  
ほろ／＼と涙を流しながら喜びました。(をばり)





# 海の勇者

楠山正雄

今からざつと二千何百年も前の、とは

い／＼昔のお話です。

今のヨーロッパの東のはづれに、ギリシヤといふ強い國があつて、立派な文明と豊かな富を持つて、ヨーロッパの國々で一ばんの威勢をふるつてゐました。ちやうどその時分、ギリシヤに一番近いアジアの西のはづれにベルシヤといふ國があつて、これもギリシヤにまけない立派な文明と、それに何よりも強い、澤山の兵隊を使つて、近所の國々を切り従へてゐました。

ギリシヤとベルシヤがだん／＼近所の國々を切り従へて、兩方の國境が近くなればなるほどいつかお互ひがぶつかりあつて、二つの強い國同志がほんたうに力だめしをする時節が來なければならぬ筈でした。

ギリシヤとベルシヤは、いつか一度戦争をしなくてはならない、とかうお互ひの國の人たちは思つてゐました。

ある日のことでした。ギリシヤの國のうちで一は

ん婆えてゐたアテネの町で一人の年を取つたギリシヤ人が小さい男の子をつれて海ばたの道を散歩しながら、おちいさん

の子をつれて海ばたの道を散歩しながら、おちいさんは息子にこんな話をしました。

「お前ごらん、あのとほりあそこ古い軍艦が一艘上がつてゐるだらう。あれも昔一度は強い兵隊を乗せて、廣い海の上を渡つて歩いた立派な軍艦であつたのだ。それがあのとほりもう半分腐れかけて、砂の中に入れてある。昔のことを思へば、軍艦はどんなに寂しいことだらう。けれど誰もそれを何とも思つてやるものはないのだ。だがそれは船だけのことではない。このアテネの町のために永い間随分盡したえらい人たちでも、そのしごとがすめばやがて忘れられて、やはりあの軍艦と同じ身の上になるかも知れない。」

かういつておちいさんは、うるんだ目をしました。おちいさんがなせそんなことをいふのか子供にはよくわかりませんでした。でもだまつておちいさんの指さした古い船の方をながめてゐました。そしてそれはどんなに人から忘れられて、この古い船のやうに捨てられようとも、自分もやはり大きくなつたら自分の生れたアテネの町のために、立派なしごとをする人にならうと思つてゐました。

この子供は、テミストクレースといひました。そして後には、ほんたうに、この時の考へどほりアテネのためにりつばなしごとをしたのです。

## 二

それは紀元前四百八十一年のことでした。ベルシヤの王さまはいよ／＼ギリシヤを撃つことにきめてその夥しい軍隊を船にのせて送り込みました。それは夥しいといつて、大きな川が二つまでベルシヤの軍隊で埋まつて、川の水が干上がつつてしまつた





といふ位でした。ベルシヤ人に討ち従へられた方々の國々の人民が、何でも五十以上の國々から集つて来て侵入軍に加はりました。そのうちには鐵の鱗のついた鎧をきて槍と弓と短刀を抱へた兵士もありました。兜を被つて鐵棒を持った兵士もありました。さうかと思ふと、木綿の着物を着た兵士もありました。象や豹の皮を着て、體を薄く繪具でぬつた兵士もありました。狐の皮を着た兵士もありました。なめし革の上着を着た兵士もありました。

ベルシヤの陸軍はギリシヤの本土に上陸して、すん／＼アテネの町に迫つて來ました。海軍は何千艘といふ軍艦で海上を埋めつくすやうな勢ひで漕ぎよせて來ました。かうなると町の人民の騒ぎといつたらありません。もうどうしていゝのか人間の智慧ではこの難儀を切りぬけることは出來ないといふのでギリシヤ人の護り神として崇めてゐるアポロ神のお宮に使をたてて、一たいどうしたらよろしいか、神さまの思召を伺はせることにしました。するとお宮

に仕へてゐる巫女に神さまがのり移つて、かういふ託宣をなさいました。

「ベルシヤ人の禍を逃れるには、木の城にかくれるがよい。」

## 三

いよ／＼慌て迷つたのはアテネの人民でした。

「一體木の城といふのは何だらう。そんな物はありませんし、よしあつてもどうして木の城なんぞで敵が防げるだらう。」

かういつてみんなわい／＼騒いで許りゐました。するとその時口を開いたのは、そのじぶん、もう大きくなつてアテネの町の海軍士官であつたテミス・クレウスでした。

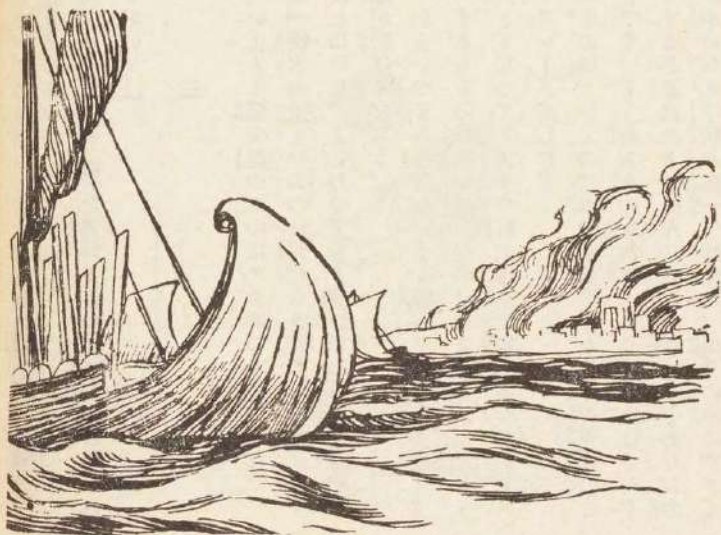
「木の城といふのは木で出來てゐる我々の軍艦のことです。もう神さまのお言葉のあつた以上はぐづぐづする必要はありません。さあ、さつそくあなた方の中の女と子供を海一つ越えた、向うの岸のサラム

ス島へやつて、我々がいよ／＼残らずのベルシヤ人を海からも、陸からも追ひ出してしまふまで、辛抱して待たせてお置きなさい。そのあとで、この町の若者たちは、残らず船に乗つて、潔よくアテネの町のために戦はなければなりません。」

かういつたのでみんなは成程とうなづいて、さつそくその支度にかゝりました。何しろもう敵は間近に迫つて、つい二里か三里の鼻の先ですん／＼途中の村や町を焼きたてながら進んで來る火の手が見えるのですから、全く氣が氣ではありません。足手まといになる女や子供たちは、片つ端から船に乗せて向う岸へ送りつけてしまひました。

その中でかういふ可愛がらな話がありました。或アテネ人の娘に大そう可愛がられてゐた犬が、主人が船に乗せられるのを見ると、自分一人残されることを厭がつて、すぐそのあとからいきなりさんぶり水の中にとび込みました。そしてどこまでも船のわきに引つ添うて歩きながら、たうとう向う岸のサ





ラミス島の海邊うみべについた時ときには、さすがにもうへとへとに疲れきつて、陸かきに上あがると一しよに死しにました。犬いぬの主人しゅじんは涙なみだを流ながしながらねんごろに死骸しかいを埋うめてやつて、それから永ながい間あひだそのへんの海邊うみべは「犬いぬの墓はかの濱はま」と呼ばよばれることになりました。

さていよ／＼ベルシャの軍艦ぐんかんをまちうけて戦たたかふことになつて、若い士官しやくわんのテミストクレーヌがみんなに推おされて總司令官そうしやうめい官になることになりました。そこでテミストクレーヌは士官しやくわんたちを集あつめて戦いくさをするに ついて自分じぶんの考かんがへを話はなしました。すると年を取とつた士官しやくわんで、今までテミストクレーヌを部下ぶかのやうに思おもつてゐた仲間なかつの一人ひとりが、テミストクレーヌの考かんがへと自分の考かんがへとは違ちがふといつて、さん／＼争あつた上うへ、くやしがつて、棒ぼうでテミストクレーヌに打うつてかゝらうとしました。するとテミストクレーヌはまづすぐに立たつたまゝ、ちつと相手あいてを見みつめて、やさしく、

「打ちたければお打ちなさい。しかしわたしの命令めいれいは聞いてもらはなければなりません。」といひました。

これでおこつてゐた士官しやくわんは勢いきほひがぬけて、だまつてしまひました。そこで一切いっけつテミストクレーヌが考かんがへたはかりごとに従したがひ、ベルシャの軍艦ぐんかんを本土ほんどとサラミス島しまとの間の狭せまい海峡かいけつに待まちち受うけて、一つ／＼討うち沈しづめることにしました。それはちやうど、日露にろ戦争せんそうの時ときに日本にほんの東郷艦隊とうきやうかんたいが、遠とほい海うみをはる／＼渡わたつて来る露西亞ろしやの軍艦ぐんかんを、日本にほんの本土ほんどと對馬たいまの島しまの間の狭せまい海峡かいけつで待まちち受うけて、片かたつ端はたから討うち沈しづめたと同様どうようでした。

さうかうするうちに陸かきの方かたからさん／＼攻め込こんで来たベルシャの陸軍りくぐんは、いよ／＼アテネの町まちに乗り込こんで来て、めちやくちやに火ひをつけて焼やきたてました。アテネの人民じんみんは一人残ひとりらず船ふねに乗のつて、海うみへと逃げ出でして行いきました。もう狭せまいサラミスの海峡かいけつを最後さいごの足あしだまりにして、こゝで厭いとななしにベルシャの海軍かいぐんを追おひ退ひけて出て行いくほかに、もう行く





ところはなくりました。振り返ると、今し方まで自分たちの住んでゐる町は、西も東も分らないほどの凄じい焰の中に埋まつてしまつて、あと半日とたないうちに灰になりかけてゐるのです。

もう間もなく長い橋と高い船べりを持つたベルシャの艦隊は一刻々々集つて来て、ギリシャの艦隊をまあるく取りまきました。見上げるやうなベルシャの大船に比べて、ギリシャの船のみすばらしさといつたらありません。船べりの低い、小さな船にそれでも五十人づつの漕手に漕がせて、十八人づつの兵士が弓と槍を持つて乗り込んでゐました。

紀元前四百八十年の四月の朝が明けかゝりました。もう敵身方の船は船ばたと船ばたがぶつかり合ふほどになりました。ちやうど海の上に上がった太陽が何千とない敵身方の帆の上に輝いて、それから兩方の兵士たちのきら／＼光る槍や楯の上に輝きました。陸では海を一目に見下す高い岩の上に敵方の大元帥であるベルシャ王は純金の玉座の上にいるい

からは元氣な歡聲の叫び聲が起りました。だん／＼夕方に近くなつて、ギリシャ人がふと振り返ると、もう焼け落ちてゐる陸の上の空に、幾つとなく不思議な光り物がして、神さまの身方を勵ます聲が聞えたやうに思ひました。

たうとう日が沈みかけました。サラミスの戦もいよ／＼おしまひになりました。戦はベルシャ方の負にきまつて、王さまもインキ壺を抱へた書記役も鎧物具のいかめしい王子たちもいつか陸から姿をかくして、あとにはあわてゝ残して行つた純金の玉座が寂しくころがつてゐました。それから間もなくベルシャ王はヨーロッパとアジアの一番狭い海の上に橋のやうに並べた船を傳はつて、本國へ逃げて歸りました。僅かに残つたベルシャの軍勢はブラテーエーの戦で残らず討ち亡されてしまひました。一旦灰になつたアテネの町は見違へるほど立派になつて再建されました。

かうしてテミストクレスは子供の時考へたやう

うと坐つて、戦の様子をながめてゐました。その傍には鎧物具に身を堅めた王子たちが並んでゐました。ペンとインクを控へた書記役がすぐわきにゐて、これから始まらうとする海戦で、誰が一番手柄をたてるか、一々書き止めようと待ちかまへてゐました。

ベルシャの艦隊の司令官の乗つた船は、大そう高くつて、水の上に浮いたお城のやうに見えました。そのお城から司令官はやかましく指圖をして、敵方の船に向つて矢だの投槍だのをどん／＼射かけさせました。ベルシャの船は全く夥しい數でしたが、でもそれだけにあんまり多すぎて狭い海峡の中で身方同志がぶつかり合つて船をいためるものもありました。かうしてまる一日いくさはつゞきました。何しろ船が大きすぎると、數が多すぎるので、ベルシャ方の艦隊はとかく働きが鈍くつて、一艘々だん／＼に、ぶつかつてこはれたり、まご／＼して捕獲されたり、隙を覗つておなかに穴を開けられて、ぶ／＼沈んだりしました。そのたんにギリシャ方

にりつばなしごとをして、アテネの町の救ひ主と仰がれるやうになつたのでした。

四

そこで、もう一度初めにいつた古い軍艦のたとへ話か思ひ出される時が來ました。アテネの町のためこれほどの立派なしごとをしたテミストクレスも、幾年かの後には忘れつばいアテネの人民から、その盡した功勞の方は忘れられて、僅かの過ちばかりがその代りに人の目につくやうになりました。そして、たうとう生れた國から追ひ出されて、一人寂しくよその國に流れて行かなければならないやうになりました。

テミストクレスは方々の國々をさすらひ歩いてたうとう自分が前にひどい目にあはせた敵の本國にまで入つて行きました。サラミスの戦のテミストクレスが來たといふことが知れると、ベルシャの方の町で、テミストクレスは度々あぶない目にあ



ひました。ある町では人民が大勢集つて来て、テミストクレスを殺さうとしました。テミストクレスは女の車に乗つてやつとのがれました。

たうとうそれでも見つかつて、テミストクレスはベルシャ王のお宮へつれて行かれました。でも王さまはこの憎んでゐる敵の命を取るやうなことはいないで、却つてそれを手なづけて、身方の大將にして、逆にもう一度ギリシャに攻め込もうと思ひました。そして、ギリシャに攻め込むにはどういふ手段を用ひたらいゝか。」とたづねました。

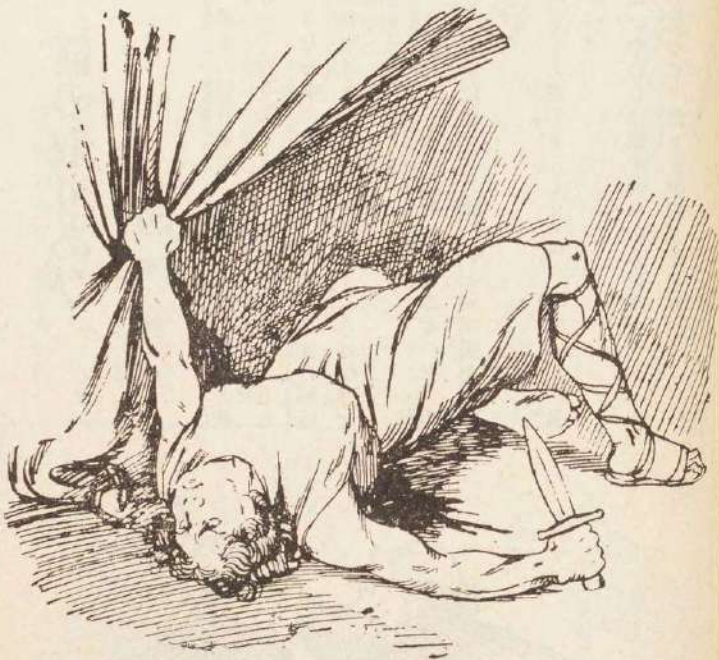
するとテミストクレスは暫く考へてゐましたが「陛下、あそこの玉座のうしろに立派な壁掛がかゝつてをります。美しい畫が一ぱい描がいてございませす。しかしあの壁掛も巻いて倉にしまはれてしまへば、美しい畫も一しよにかくれてしまひます。私の心の中にも、相應に美しい畫や立派な考が畫がかれてないではございませぬが、たゞ今は久しく巻かれてたまになつてをります。そして今のところそれを

取り出して開いてみる心持にはなれませぬ。恐れながら陛下、しばらくわたくしにさういふ心持になれますまでの暇をお與へ下さいまし。」といひました。

王さまはしかたなしに笑ひながら、「よし、一年の間考へる暇を與へよう。」といひました。それから一年の間、テミストクレスはベルシャの王さまからも、人民からも、大切なもてなしを受けました。毎日パンを持つて来てくれるものもありました。お酒を持つて來たり、肉を持つて來たりするものもありました。

でもその間、一日だつてテミストクレスがなつかしい故郷のことを思ひ出さない日はありませんでした。どうかしてもう一度故郷の人たちの中に歸りたいと思はない日はありませんでした。

かうしてこのサラミスの勇者が、いつまでも忘れることの出来ない故郷の夢に每晚悩まされてゐる間に、ベルシャ人はどん／＼陸には大軍を集め、海には澤山の軍艦を浮べました。いよいよ一切の用意が



あつた時、王さまはテミストクレスのところへ使をやつて、さあ約束のとほり、こんどこそギリシャ征伐の大將になつてもらひたいといひました。

ちやうどあれからまる一年たつてゐました。この申込を受けた時、テミストクレスはすぐには何とも答をせず、だまつて溜息をついてゐました。それから三日めに、誰もゐない部屋に入つてテミストクレスは立派に自殺して死んでゐました。

この悲しい知らせは、今更のやうにアテネの人たちの心を動かししました。ベルシャ王もあてがはずれてがっかりはしましたが、テミストクレスの正直な心持を可哀さうに思つて涙を流しました。(なほり)

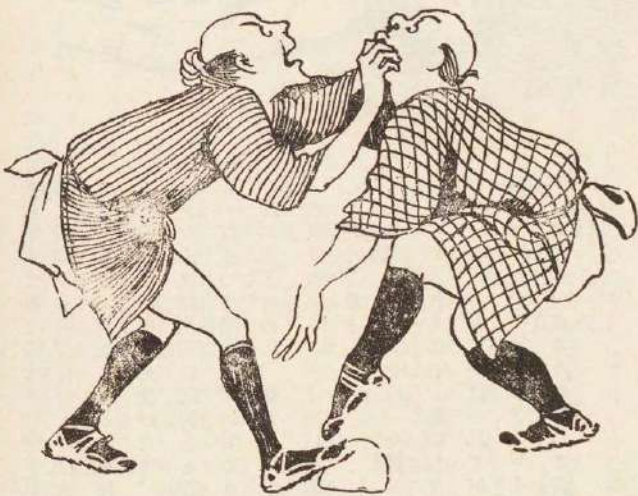


# 餅の取りあひ

岡本 歸一

或夏の朝峠道で、彼方から来る旅人と此方から行く旅人とが、街道の真中にお甘いさうなお餅が一つ落ちて居るのを両方同時に見附けまして、其わけ前で二人は喧嘩を初めました。

生憎二人ともお腹がすいてゐるので、半分はいやだまるごと欲しいと云ひ張り、片方が、「ぢやあ鬮引きにしよう」と、云ふと、片方が、「いやわしは鬮が弱いからいやだ」と云つて、仲々片がつきません。



とうとうしまひに睨めつこして、どちらかが笑つたり、歯を出したり、舌を出したりしたら其方が負けと云ふ事にきめ、とりつこをする事になりました。そこで二人ともお餅を真中へ置き、往來へ坐つて睨めつこを初めました。

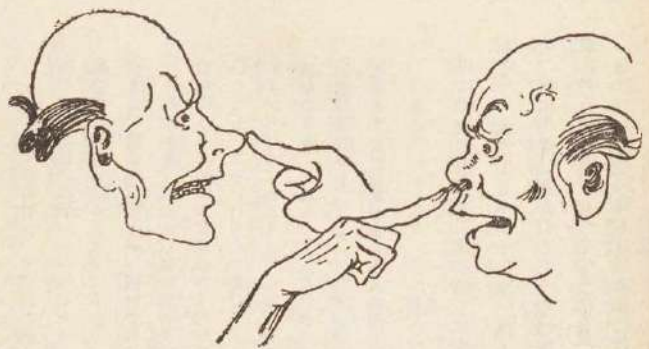
ところがだん／＼空が曇り出し、やがてざあ／＼とひどい雨が降り出しましたが、二人ともすぶ濡れになつても、なかく／＼やめずに、一生懸命百面相の藝當をいたして居ます。



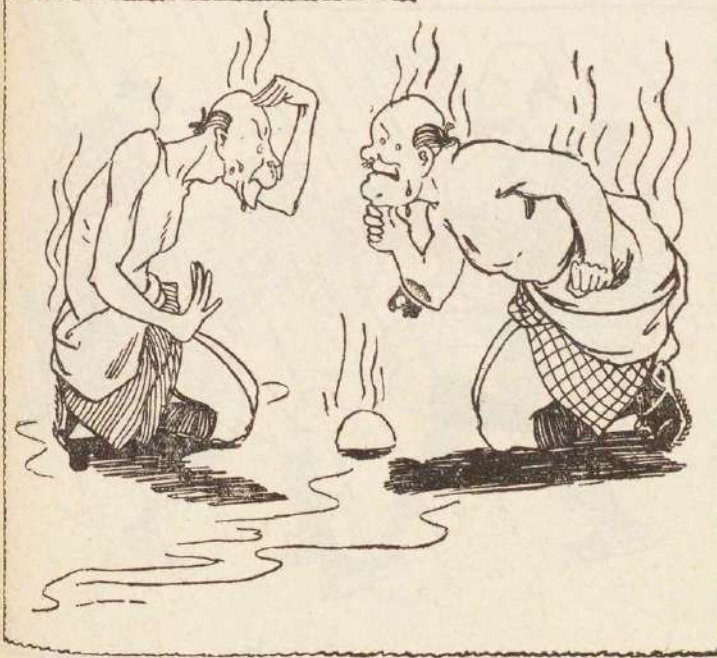




そのうちだん／＼時間はたつて、御膳は  
 すぐ上に、暑いので目がくらみ相になつて  
 しまひましたが、此處で負けてはと、二人  
 とも力みかへつて、我慢して居ますと、丁  
 度上を飛んでゐた鷹が其お餅を見つけて、  
 これは御馳走様と一寸くはへて、びひよ  
 ろひよろ／＼といつてしまひました。さすが  
 の二人ともびつくりして思はず、あアと聲  
 を出してしまひました。肝心のお餅は無く  
 なつてしまひましたが、でも可笑しいぢや  
 ありませんか、二人はまだ先へ聲を出した  
 のはお前さんだよ、いやお前だいと喧嘩し  
 てゐましたさうです。



幸と雨はちきやみましたが、二人と  
 もお臍へ水のたまるほど濡れてしまひまし  
 たけれど、餘程負けすぎらひと見えて、  
 どちらにも負けずに睨めつこして居ます。  
 雨がやんで夏の陽はかん／＼teriつけて  
 來ました。此度は二人とも炎天に照らされ  
 て、程なく兩方の身體から湯氣が出だし、  
 暑苦しさに、とう／＼まる裸體になつてし  
 まひましたが、まだ御互にやめません。







# 佛様と泥棒

植松壽樹

窪田空穂先生より――

友人の植松壽樹君は、すぐれた歌人として私たちの知るところである。植松君は歌ばかりではなく、文章にもすぐれてゐます。植松君の文章を讀みますと、ちやうど秋の小川の流れを見てゐるやうに、澄んだ、明るい、軽い心持にされます。

そればかりではなく、植松君の文章には、上品さと、誰にも眞似のできないやうな滑稽味をも持つてゐます。植松君が童話を書いたならば、さぞいいものが書けるだらうといふことは、私たちの前からいつてゐたことでした。その植松君が今號から本誌へ童話を載せることになりました。何うぞこの新しい童話作家の新しい童話を愛讀して下さい。諸君が愛讀して下さいたら、植松君はますますいい童話を書くやうにならうと思ひますから。

村はづれの森の中に荒れ果てたお寺がありました。貧乏なお寺で、本堂でさへ何十年來一度も手入をしたこともないで、屋根の瓦は剝かれるし、壁は落ちるし、扉もいつかの大風に外れたきりになつて、とんと見る影もなくなつてゐます。それでも流石に御本尊の佛様だけはお厨子に納めて、粗末のないやうに嚴重に錠前をかけておきますが、お堂の中と來りさうな金具もついて居りません。

「チエツ」と舌打をして

「何といふ貧乏くさいお寺だらう、己も永年泥棒をしてゐるが、こんな處は初めてだよ。お厨子のあるのが不思議な位だ。」

とつづやきながら、指の先でお厨子の扉をコツ／＼と、叩いてゐました。すると、この扉を開けて見よう、といふ氣が不圖起つて來ました。で用意の道具を取り出して、音のしないやうに錠前を叩きこはし蝶番の錆び付いた扉を軋まないやうに用心しながら、漸くのことゝ開けて見ました。

思ひの外大きな佛様が、靜かに立つて居るので泥棒は二度びつくりしました。

「これが金無垢なら大したものだがなあ。」

と思ひながら蠟燭を近く寄せて、擦つて見たり、叩いて見たりして暫くの間調べて居ましたが、どう見ても天張り唯の錆物で、金無垢などと云ふ大したものではありません。泥棒はがっかりしてしまひました。すつかり氣を腐して、今夜はもう止めにして歸らうかと思ひましたが、

たら不意目なものです。そのお厨子が唯一つ扉中に掛ゑてあるだけで、晝間は村の子供達の遊び場になつて、床の上には泥だらけな足跡が一面についてゐます。參詣人などは勿論一人もありませんから、賽錢箱はいつも空つぽで、お堂の縁の下に抛りこんでありました。

或る晩、何う戸惑ひしたものが、一人の泥棒がこのお寺にはひり込みました。はじめは和尚さんのゐる庫裡の方へはひつて用意の蠟燭の火で見列しましたが何にも盗るものがありません。腐れかゝつた畳の上を、抜き足差し足で本堂の方へ來て見ると、こゝは又からんとして、何一つ目につくものもありません。

「おやく、ひどいお寺だ。今夜はまあ飛んでもない處へはひつたものだなあ。」

と一人で苦笑ひしながら、それでも、ひよつとしたら、お賽錢が落ちてゐないものでもないと思つて、床の上を隅から隅まで探して見ましたが、そこには子供の足跡ばかりで、無論金目になるものなどは樂にしたくも落ちて居ません。今度はお厨子を念入に調べて見ましたが、これにも別段値打のあ



「いや待てよ、何かありさうなものだ。何ほ何でも手ぶらで踊るのは業腹だからな。」と獨語を言ひながら、もう一度佛様を見直して見ると、この佛様は冠をかぶつて居るのが目につきました。

「おや、佛様相應のお粗末な冠だ。でも手ぶらよりはましだらう。どれ、佛様、それちや遠慮なしに頂戴いたしますよ、南無阿彌陀佛々々々々」

と冗談を云ひながら冠に手をかけて、その時ふと佛様の顔を見たのですが、すると佛様の眼がキラリと光りました。ぎよつとして思はず手を引込めて、もう一度見直すと佛様の眼には別段變りはありません。静かな顔をして立つてゐるのです。氣の所爲で怖く見えたのだらうと思ひ返して、又冠に手をかけました。すると佛様の眼がキラリと光ります。びつくりして手を引込ますと別に何のこともありません。

「矢つ張り氣の所爲かなあ、それにしても變に氣味の悪い眼だ。」と少し怖氣がついて、ほんやり考へこんで居ましたが、急に背中がぞうと寒くなつて、何だか薄氣味悪くてたまらなくなりました。さうなると蠟燭の灯がふら／＼と點つて、あ

お籠をろくに覺えて居ない位ですから、口ではぶつ／＼云つても別段困りもしなかつたのです。

「それにしても、お目にかゝるのは久しぶりですね、南無阿彌陀佛々々々」と和尚さんは、本當に久しぶりで拜んだ佛様を珍らしさうに眺めて居ました。



たが薄明るく見えるだけに、何にもない、がらんとしたお堂の中が化物屋敷のやうに物凄く見えます。こんな時に後を振り向くと、大入道の化物が音もなくすうつと立つてゐたりするものです。

「うわあ——」と思はず聲を出した泥棒は、夢中でお堂を飛び出してしまひました。さうして此處を逃けるのでした。

靈廟本堂の見廻りに来た和尚さんは、お厨子の扉が開いてゐるのでびつくりしました。調べて見ると錠前がこはれてゐるだけで別段何にも失くなつたものもないやうです。

「こんな貧乏寺に泥棒のはひるわけはないし……はてな？」とぐつすり寝こんで何にも知らなかつた和尚さんは、不思議さうに首を傾けました。

「然し錠前のこはれたのは困つたな。直すにもお金がありやしない。」とぶつ／＼云ひながらこはれた錠前をひねくつて居りました。實を云ふと、この錠前は錆びついたばかりでなく肝腎の鍵が何時の間にか、失くなつてゐたので、今では開けることも出来なくなつてゐたのでした。それが爲めにお厨子の扉も何十年と開けたことがなく、和尚さんでさへ、佛様の

其の晩、また本堂へ忍びこんだのは昨夜の泥棒でした。昨夜は怖氣がついてとんだ失敗をやつたが、今夜はうまくやらう。第一、昨夜のやうに冠などを盗んだところで、お金になるわけではない。今夜は思ひ切つて佛様ごと盗み出ささうすれば眼が光つたつて怖くもなんともない。

そこで宵の口から森の中をうろつきながら和尚さんの寢てしまふのを待つて居りました。その中に次第に夜が更けて、和尚さんの眠さうなお念佛も聞えなくなりましたから、時分はよしと、のこ／＼本堂へ上りこみしました。

お厨子の中の佛様は昨夜のやうに静かな顔をして立つて居ましたが、昨夜の失敗に懲りて今夜はわざと眼を見ないやうに注意してゐました。

泥棒はまづお厨子の中の佛様をどつこいしよと抱へ上げて二足三足歩いて見るとその重いこと、なあにこんな物と思つてもとても我慢が出来ません。三尺ばかり運ぶ中に息がきれて、額からは汗がだく／＼流れました。暫く休んでから、又どつこいしよと抱へ上げて二足ばかり歩くうちに、もう腕が痺れる程重くなつて來ました。



かうして、一足行つては下し、二足行つては休みして、それも運ぶ時間よりも休む時間の方が水い位にかゝつて、漸く本堂の下り口まで運んで来ると、もう東の方が白みかけて村では鶏が鳴いてゐました。お腹が減つて、へとへとになつた泥棒はすつかりへたばつてしまつて、肩で息をとてゐました。「チエツ」と舌打をして、

「莫迦にして居やがらあ、忌々しいつたらありやしない。この莫迦佛め。」と悪口しながら、佛様の頭をピシヤンと撲りつけました。

「然しこの儘にするのも癪だなあ、いつその事お堂の下まで搬ぎ出して、坊主を困らしてやらう。」

そこで又うんとこしよと抱へ上げて、本堂の段々をずるずる、するくとどろり落すやうにして、やうやく下まで抱き下しました。

夜はもうすつかり明け離れて、森の木の間には白々と霧が流れて居りました。町へ出て行く車の音が遠くの方から聞えて来ました。ふと気が付くと、朝霧の中をはつきりとは見えませんが、向ふの方から急ぎ足に近づいて来る人があります。

お詣りのないお草だのに、今朝はまた暗いうちから、何だらう？ お詣りの人か知ら、珍らしいことだぞ、と考へて近づいて見ると、やあ、と思はず聲を出して、危く尻餅をつくところでした。それもその筈です。今迄見たこともない佛様が段々の下に立つて居るのですもの。

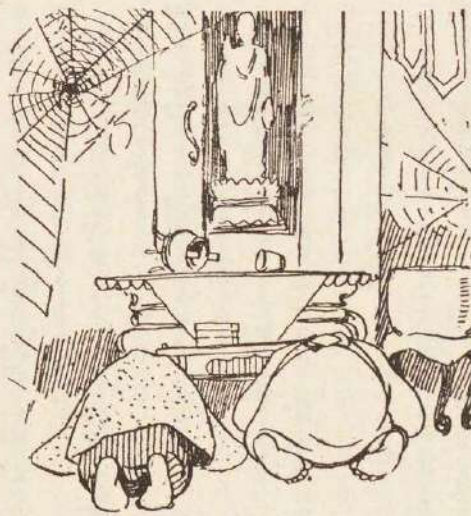
「和尚さん。和尚さん。大變だ〜」とまだ寝て居るところへ来て狼狽て呼び起しました。滅多に來たこともない村長さんに呼び起されて、和尚さんはびつくりして飛び起きました。「大變なことが出來ちやつたんだよ、まあ兎に角來て下さい。」

と村長さんは、まだ寢間着のままで、呆氣にとられてゐる和尚さんを本堂の方へ引つ張つて來ました。もう肝腎の自分の用事などはすつかり忘れてゐるのです。

「あれ、あれ、あれですよ。」  
 といつて遠くの方から指して見せました。指さしなどして詞が當りはしまいかと、内心では怖々しながら。

和尚さんも意外なことにびつくりしてしまひました。念の爲に一旦本堂のお厨子を覗いて見ると果して濃技の殻です。和尚さんはぶる〜震へ出して、「た、た、たしかにうちの佛

見付けられては面倒だと、泥棒は大まごつきにまご付いて縁の下へもぐり込み、その儘跡を暗ましてしまひました。こゝへ來た人といふのは、この村の村長さんでした。恰度



和尚さんに急用が出來たので起きぬけ、馳つけたのですが、お寺の境内にはひつて向ふを見ると、本堂の段々をとんとん〜と下りて來る人影があります。ふだんは晝間ですへ

様です。うちの佛様が一體まあ、ど、ど、どうしてまあ……！昨夜のこともあるのですから、これは唯事ではあるまいと思ふと、顔色は蒼ざめて口もろくに利けなくなりました。

漸くのことで少し落ち付いた村長さんは、さう大袈裟に手重似や身振り、ませながら和尚さんに話して聞かせました。

「何しろ、今朝はお前さんに急ぎの用事があるものだから、息せき切つて來て見るとね、何分霧が深くて判つきりとは見えませんが、本堂からとんくと下りて來る人があるぢやないか、珍らしいことだと思ひながら近づいて見ると、この佛様さ、お堂の段々をお下りになる時なんぞは遠者なものでね、上から下まで一息にとんくとんくと馳け下りてさ。さうさう、さう云へば何だか大變お急ぎのやうだつたよ。」

「へえ。」と云つたきり、和尚さんは眼をパチ〜させてゐました。

それから其の日の中に、この話がばつと村中に擴がつて行きました。森のお寺の佛様は活佛様だ、大層有難い佛様で願をかけたことは何でも聞き届けて下さるさうだ、などと云ふ噂さへ擴がるやうになりました。



「佛様の歩くところを村長さんが見たんだってね。」

と一人が云へば、

「なんの、見たどころかお話をしたのだ。」と、物知り顔を  
する人もあります。

「村長さんがお寺の前を通りかゝると、恰度佛様が山門を出  
て西の方へ行かうとする所さ。そこで、もしく佛様何處へ  
いらつしやいますと村長さんが聞くと、わしは天竺へ歸ると  
ころだ、と仰有つたさうだ。それは又何故ですかとお尋ねす  
ると、こんな貧乏寺に何十年もくすぶつて、もう飽きくし  
たと仰有つたさうだが、無理もないことさ。」

「へえ。」

「それで、村長さんが、お堂を普請もするしお厨子も立派に  
修繕致しますから、どうぞここにお留り下さいまし、とお願  
ひして、漸く天竺行はおやめになつたと云ふが、何しろ大し  
た佛だよ。」などと噂が噂を産んで、その評判は大變なものに  
なりました。

俄に參詣人が殖えて山門を出たりはひつたりする人が朝か  
ら晩までしつかりなしに續きました。しまひには歌舞が出る

と、賑を擡つて理慢して居りました。うまい仕事と云つても



やら、見世物がかゝるやら、お祭のやうな騒ぎで、近郷近在  
は云ふに及ばず、二十里も三十里も遠方からお詣りに来るや  
うになりました。お賽銭は忽ちの中に賽銭箱に溢れる程投げ  
こまれるので、一日の中に何度となく仕替へなければなりま  
んでした。

間もなく本堂の普請が出来上つて、見違へるやうに立派に  
なりました。お厨子も塗りがへて金銀珠玉を鑲め、佛様には  
新しく金箔を施して目も眩むばかりに磨き上げました。境内  
も手入れして綺麗になるし、鐘撞堂も新規に建て増すし、つい  
此間までの貧乏寺の面影などは何處を見てもなくなつてしま  
ひました。

この有様を、それとなく眺めて居た例の泥棒は、どうも不  
平でたまりません。變なことになるものだ。元來、佛  
様が自分で歩き出したわけではなく、己が骨折つて盗み出し  
たのが原因で種々な噂がはじまつたんだ。さうすれば結局お  
寺の繁昌は己のお蔭ぢやないか。と心の中では不平をこぼし  
てゐましたが、口に出して云へば、自分の悪事を白状するや  
うなものですから、其の中に何か又うまい仕事をしてやらう

崩壊これと云ふ教へもありません。佛様が盗み廣げて、それ  
が却てお寺の仕合になつたのがつまり業腹でならないのです  
から、この腹慮には矢張り佛様を今度こそうまく盗み出すよ  
り外に仕方がありません。恰度流行りだした佛様だ、外國へ  
持ち出して噂を擴めたら随分流行るだらう、お賽銭も上るだ  
らう、一舉兩得とはこの事だ、と理窟に合はないことを考へて  
機會の來るのを待つてゐました。お寺が立派になつて繁昌す  
るにつけ、戸締りはよくなるし、第一役僧だとか寺男だとか  
云ふものが、何時でも六七人は居るやうになつたので、うっ  
かり忍び込むことが出来なくなりました。

その中にたうとう好い機會にぶつかりました。或る日、朝  
から降りだした雨が日が暮れても止まず、夜が更けるに隨つ  
て益々酷しくなつて、それに風も加はつてまるで瀧のやうな  
土砂降になつて來ました。さあ占めたと喜んだのは泥棒です  
が今度は前に懲りてゐますから、一人では出かけません。仲  
間の中で一番力のある奴を誘つて、途中から、車に積んで逃  
げる用意までして、夜ももう十二時過ぎ、面も向けられない  
嵐の中を、二人連立つて出かけて行きました。





## 鞍馬寺の牛若

窪田空穂

源義経は、生れてたつた一歳になつたばかりの時に、平治の亂が起りました。日本での二軒の武家であつた平家と源氏とは、天皇と上皇との勅を受けて、京都で軍をしたのです。源氏の大将、源義朝は、平氏の大将の平清盛を相手に戦つて、朝から勝ちとはしたが、しまひになつて、平家の館のある六波羅に攻寄せさせた時に負けてしまひました。負けた義朝は、天皇に手向ひをした朝敵だといはれて、平家から、何所までも追つて何うでも殺してしまはうといふ扱ひを受けるやうになりました。義朝は關東へ逃げて來る途中、尾張の國で殺されてしまひました。長男の義平はたつた一人で清盛を殺して、親の仇を打たうとしたが、見つけれ

嚴重な戸締りもどうやら外しました。お厨子の錠前は抜切りました。今度は二人がかりですから雑作もなく佛様を抱へ出して廊下まで易々と持つて來ましたが、そこでふと目についたのは賽錢箱でした。力持の仲間の方がその賽錢箱を両手に抱へて一寸振つて見ると、大分はひつて居る音がします。二人は顔を見合せてニヤリと笑ひました。やがて用意の綱を取り出し、佛様を縛り上げて、仲間の背巾へしつかりと背負はせました。自分は賽錢箱をこれもしつかりと背巾にくり付けて、「うまくやつたなあ。」と得意になつて引き上げて行きました。山門の外は石段になつて居ました。その下に車が置いてあります。「もう一息だ。何しろ重くてやり切れない。」と佛様を背負つたのが後から云ひました。「足許に氣を付けろ、この石段は滑るぞ。」と賽錢箱を背負つたのが云ひました。眞暗な石段、瀧のやうな雨、おまけに吹き飛ばされさうな風の中を、重い佛様を背負つて居るのですから、ともすると危くよろけさうになります。それを、どっこいしよと踏みこたへた機勢に、背巾の佛様ががくりつと

の方へ傾いたから耐りません。たうとう一段踏み外して、前へのめつてしまひました。直ぐ前には賽錢箱を背負つたのが、よろ／＼と下りて行くのでしたが、其の賽錢箱に無我夢中で噛りついたのです。佛様と仲間と賽錢箱との重さが、不意に落ちかゝつて來たものですから踏み耐へることが出来ません。あつと云ふ間もなくのめりかけて二人折り重つて落ち行くのでした。かなり高い石段でした。一人は佛様に押しつぶされ一人は賽錢箱に頭を押し碎かれて、下まで落ち付いた時には二人共命がありませんでした。翌日は直ぐに新しい噂が近郷近在に擴まりました。それは森のお寺の佛様が泥棒を捕へたといふ噂です。「泥棒が賽錢箱を引摺つて逃けたとき、それを佛様が山門のところまで逐ひかけて捕へてしまつたが夜が明けるまで泥棒を押へつけておいでになつたつてね。有難い佛様ぢやないか。」などと云ふ者もありました。「あ、有難い。南無阿彌陀佛々々々々」とそれを聞いた年寄などは涙を流して嬉しがりました。お寺は空々繁昌するばかりでした。(をほり)



て京都の二條河原で斬られてしまひました。次男の朝長は、敵に殺される位なら自分が殺してやらうといつて、父の義朝に斬られてしまひました。三男の頼朝は捕へられて、やう／＼命だけを助けられて、伊豆の國へ流されてしまひました。それ程にしても平家はまだ源氏の者を許しません。この外にも残つてゐる者は、何んな小さい者でも男の子である限りは、みんな殺してしまはう、後々になつて、仇を討たうといつて覗ふやうなことがあると面倒だからといふのです。義朝の残つてゐる子供は、そのゐる家を捜し、家にゐなければ、逃げた先までも捜し立てられました。

義朝には、まだ三人の男の子が残つてゐました。それは今若、乙若、牛若です。母は常盤といつて、その頃、並ぶものゝない程美しい人でした。

『京都にゐては、平家の侍につかまへられてこの子供たちは殺されてしまふ。何所かへ逃げて隠れて命を助けたいものだ。』母の常盤は、三人の子供を見

に、大變に悲しがりました。

『子供がかはいさうだからといつて、このまゝでゐると、年寄つた母が殺されてしまふ。子供もかはいさうだが、親には代へられない。何よりも親に孝行をするのはよいことで、それをする、神佛もあはれんで下さるといふことだ。今自分が出て行つて、親の代りに殺されたならば、子供たちにも神佛のあはれみがかゝるだらう。』

さう思つて常盤は、平家の館である六波羅へ、三人の子供を連れて、泣きながら來ました。

清盛は常盤の母を許しました。そして、常盤が自分の妻になるならば、三人の子供を助けてやらうといひました。

常盤は、清盛の妻になることはいやだと思ひましたが、さういふと、源氏といふ立派な尊い血統を引いてゐる三人の子供が殺されてしまふことになるので、たうとうそれを承知しました。

牛若は、——後には平家を亡ぼした大將義経は、

てさう思ひました。『さうだ、大和の岡のあの家へ行かう。かういふ時には力にならうと云つてくれてゐるから。』

常盤は、牛若を懐に入れ、二人の子供を連れて供をする侍もなく、冬の寒い道を、遙々大和まで行つて、隠まつてくれと頼みました。その人は、約束にそむいて断りました。その事が分つたら、自分が平家から、何んなひどい目に逢はされるか知れないと思つて、こはくなつたからです。

常盤は、今は何所へも行くところがなくなりました。仕方なしに、その側の東大寺といふところに隠れて、心細い思ひをしてゐました。

平家では、常盤が何所かへ逃げてしまつたと知ると、代りに、常盤の母の關屋といふのを捕へて來てひどい目に逢はせました。さうすると、常盤が悲しがつて、自分の方から出て來るだらうと思つたからです。

常盤はそのことを噂に聞くと、平家で思つた通り

もう殺されてしまふばかりのところを、かういふわけで不思議にも助かつたのでした。

## 二

牛若は四歳の年まで、母の常盤の側にゐました。

だん／＼大きくなるに連れて、牛若は年よりました、何所か、大人のやうなところのある子になつて來ました。

『何うも油断のならない子だ。』と清盛は幼い牛若へ目を着けて云ひ出しました。『も／＼敵の子だ。一しよになぞゐると、末には何んなことになるかも知れない。』

それを聞くと常盤は、『今のうちに何所か、人目につかない所へやらないと何んな目に逢はされるか知れない。』と心の中で思ひまして、『東山科へやつたらば大丈夫だらう。』と心附きました。東山科といふのは京都からは遠くはないところで、そこには代々源氏のものになつてゐる、人目に立たない家があつた





のでした。

牛若はそのへやられました。そして四歳から七歳の春まで、清盛にも、誰にも忘れられて、何も思はなく育つて来ました。

三

牛若が七歳の春になると、母の常盤は、「この子のゆくゆくを何うしたらいいだらう。」と、今度はゆく／＼のことを案じ出しました。「本當に、何うすればいいのだらう。」と、考がつかなくて當惑してしまひました。

常盤の當惑したのは無理ありません。今は平家の世の中です。清盛は太政大臣といつて、位の低いにきまつてゐた武家としては、びつくりする程の立派な位になつてゐます。そしてその子供や親戚のも

牛若は法師になる事にきめられてしまひました。

「それには、鞍馬寺の東光房の阿闍梨にお願ひをしよう。」

母の常盤はつゞいてさう思ひました。鞍馬寺はその頃では、比叡山の延暦寺や三井の園城寺についての名高い寺でした。東光房の阿闍梨といふのは、その鞍馬寺の別當といつて第一の役を務めてゐる人です。そして義朝が生きてゐた時には、何時も佛への祈禱を頼んでゐた慈意な人でした。

常盤は東光房の阿闍梨へ、手紙をやりました。

「なくなりました義朝殿の末の子に牛若といふ者がございしますが、もしかすると御存じかとも思ひます。唯今は平家の世でございませぬ。女の手では此子を何うすることもできません。鞍馬寺へさしあげようと思ひます。何うぞ、荒い氣性を持つてをりましたらば、穩かになるやうに、又御經の少しなりとも讀めるやうにお仕込み下さいませ。」

東光房の阿闍梨からはすぐに返事が来ました。

のもみんな立派な位に進んで、日本の半分を自分たちのものとしてゐるやうな威勢です。源氏はあるかないか分らない程に衰へてしまつてゐるが、しかし牛若は、もとはといふと源氏の大将の義朝の子です。おちぶれたからといつて、侍にするより外にはない。侍といふと、今のところでは、平家の家來になるのであるが、何うあつても敵の平家の家來にするわけには行かない。その外で侍といふと、朝廷へお仕へ申すのであるが、これは朝廷の面倒な儀式に馴れたものでないとつとまらないことで、それも出來さうもないことでした。

母の常盤は、考へあぐんだ末に、

「思ひきつて法師（坊さん）にしよう。それだと、敵に殺されるやうなものないし、恥づかしい思ひをしなくて暮らしてゆかれる。もと／＼運の悪い子だ。法師になつて念佛をして、父親や兄たちの後世を願ひ、自分もこの次ぎの世には、いゝ者になれるやうにするがよい。」



「誰でも、法師になられるといふのは私どもには嬉しいことですが、なくなられた義朝殿の若君だと伺ひますと、一層嬉しい氣がします。」



さう云つてよこして、間もなく東山科へ迎への者をよこしました。

母から、法師になるやうにと云はれた時に、牛若はすぐに承知しました。母のいふやうにするより外には仕方がないと思つてゐたからです。それで、迎ひの者の来た時には、修行して、ゆく／＼は法師にならうと思つて住み馴れた家を出ました。

鞍馬寺は、京都から北へ當つて、三里ほど離れた鞍馬山の上にあります。七歳の牛若は、鴨川に沿つて、そちらこちらの山を眺めながらも、連れて行かれるまゝに行きました。

#### 四

鞍馬寺へ行つたからといつて、かうした子供はすぐに法師になるわけでは

ありません。一と通りの修行をして、相應な年頃になつて、初めて頭も剃り、袈裟も着るのが極りになつてゐました。牛若もやはり、家にゐた時と同じ風をして、稚兒と云はれて、たゞ學問をするだけでした。

牛若は、一心に、勉強のできるだけは勉強して學問しました。晝間は一日ちう、師匠の前におて學問をして、夜になつても、起きてゐられるだけは起きてゐて學問をつづけました。時々、佛にあげた御灯が消えてしまつて、夜が明けてゆくまでも起きてゐるやうなことがありました。

東光房の阿闍梨は、第一に感心しました。

「これほどの稚兒は、延暦寺や園城寺にもあるとは思はれない。」

さういふと、量智坊の阿闍梨、覺日坊の律師などといふ鞍馬寺の重立つた法師たちも、同じやうに感心して、

「この調子で、二十歳ぐらゐまでも學問をすると、

この鞍馬寺の實となりませう。」といひました。

全く牛若は、學問の性もよく、心持も立派で、それに顔かたちまでも綺麗で、何一つ足りないところもない、並べる者もないやうな稚兒でした。

母の常盤も、それを聞くと嬉しがりました。そして鞍馬寺へ手紙をよこしました。

「牛若が學問の性がよいにしても、絶えず家に歸るやうでは、心にも弛みができ、學問も怠るやうになりませう。これからは、若し母が戀しいやうでしたら、此方から出掛けて行つて逢ふやうにいたしませう。家へはお歸し下さいますな。」

と、いひました。

寺でもその通りにしました。牛若は寺の規則を守つて、多勢の法師に褒められながら、七歳から十五歳になるまで、學問を續けてゐました。

そして間もなくいゝ法師になるだらうと、みんなから思はれてゐました。(つゞく)





まんまんまるい 花ざかり

風は吹けども 花散らず  
 小鳥とべども 花散らぬ

大きな大きな さくらの木  
 まんまんまるい 花ざかり

櫻

若山牧水



あつちから見ても こつちから見ても

大きな大きな さくらの木  
 まんまんまるい 花ざかり





# かまと姫

中島 孤島

ある所に三人の娘がありました。上の娘はふぢ、中の娘はあやめ、下の娘はすみれといひました。ふぢとあやめは今のお母さんの本當の子ですが、すみれだけはお母さんが違つてゐました。それは、すみれのお母さんが、病氣になつて死んだあとへ、今のお母さんは、ふぢとあやめを連れて後妻に來たのだからです。今のお母さんといふのは、大變に高慢な、意地悪な人でしたから、二人の娘もお母さんに似て、意地の悪い、我儘な娘でしたが、繼娘のすみれは、死んだお母さんに似て、本當にすなはな、やさしい娘でした。その上、すみ

れはまだ幼いけれども、二人の姉さんたちから見ると、ずつと容貌もいゝので、お母さんは自分の娘が繼娘にまけるかと思ふと悔しくつてたまりませんでした。そんなことからこの意地悪の繼母はだんだんと繼子のすみれを憎むやうになつて、しまひには衣服を剃いでほろ／＼の上衣を溶せて、朝から晩まで臺所で女中のやうに追ひ使ひました。水を汲ませたり、火を焚かせたり、洗濯をさせたりするくらゐはまだいいのですが、姉さんたちまでが、よつてたかつて、いろ／＼な難題を出して、始終この娘を苛めるのでした。時にはわざと豆を灰の中へぶちまけて、一ツ／＼拾はせたりなんかしました。そして姉さんたちはいつもきれいな衣服を着て、立派なお座敷で遊んでばかりゐるのに、この娘ばかりは一日働いた上に、夜になつても温かい寢床へは寝かされないので、かまどの前へ灰まみれになつてまるまつてゐました。ですから口の悪い姉さんたちは、この娘に「かまと姫」といふ綽名をつけました。

## 第一場 茶の間

(二番娘のあやめは、茶の間のまんなかへれこんで、何か讀んでゐると、そのそばには姉のふぢが坐つて、職務がなんかしてゐま



す。臺所の口には、ぼろ／＼の衣服を着たすみれが、小さくなつて雑巾をさしてゐます。長火鉢の前で、じろ／＼と三人の様子を見くらべてゐたお母さんは、あやめに向つて言ひました。  
母「あやめや、お前、なにをさう熱心に讀んでおいでだ。お前がさうしてゐる姿は、何ともいへないほど恰好がいよよ。  
あやめ「あら、いやだわ! (とお母さんの方を見て、につこり笑つて) このご本には、ある王子と美しい王女のお話が書いてあるのよ。

母「まア、それは面白さうね、讀んでしまつたら、お母さんにもお話をして頂戴(といつてお母さんは姉の方へ目を向けて) ふぢさんの編んでゐるものは、何になるんだえ?  
ふぢ「あたしはこの間買つていた、いた人形に帽子を編んでやらうと思つてゐるんですの。だが却々うまく出来ないのよ。

母「お前さんは器用だから、何でも出来るんだね、本當に感心だよ。(といひながらちろりとすみれの方を見て) おや、すみれ、お前は何をしてゐるの? そんな雑巾なんぞさすひまがあつたら、早く臺所を片付けておしまひなさい!



すみれ「でも、お母さま、もうすることがないのでございませぬもの。」

母「することがないって？ うまいことを言つてるよ。――

お風呂はもう沸いてるのかえ？

すみれ「ええ、もうとうに沸いてるます。」

ふぢ「あたしの今夜着て行くものは、みんな揃つてゐて？」

すみれ「ええ、揃へて置きました。」

あやめ「あたしのは新しくこしらへた方を

出しといたかえ？

すみれ「ええ、出しておきました。」

母「そんならも



うそろ／＼支度におか／＼りなさい！ お化粧がなかく／＼暇がかるからね。

あやめ「(急に跳上つて) お、嬉しい！ さア、姉さん、早くしませうよ。」

ふぢ「あゝ！ (といつて何かうつとりと見つめながら) あたしはまアどんなにきれいかと思ふと、胸がどき／＼するわ！

母「これ、すみれ、ほんやりしてゐないで、早く行つて、お風呂の加減を見ておいでなさい！」

すみれ「はい！ (といつて立上つたが、關のところまで立停つて) お母さま！

母「え、何ですつて？ (とすみれの方を睨んで) お前は無駄口ばかりたゝいて、困つちまふ！

すみれ「あたしも一しよに行つちやいけないでせうか？

母「え？ (と驚いたやうな聲を出して) お前も行きたいんだつて？ まア！ (と冷笑つて) お前を王様の御殿へなんぞ連れてつたら、とんだ恥ツかきだよ。」

ふぢ「まア、何を着て行くつもりなの？ 雑巾でも着て行くといふわ！

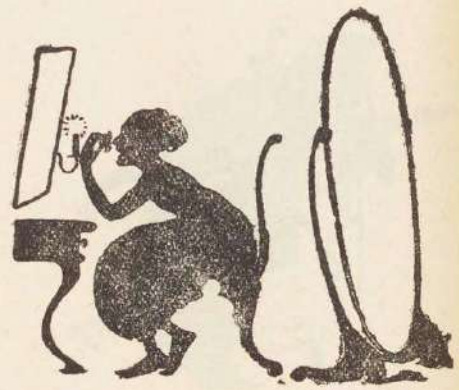
あやめ「お前さんは臺所に入る

ればいゝんだわ――かまど

姫なんでもの！

母「すみれの方を睨んで) さア、早くしないのかえ？

本當に鈍物だよ！



(すみれはだまつて臺所の方へ出て行きます。三人はそのあとを見送つて、目を見合せて笑ふのでした。)(幕)

第二場 臺所

(すみれはみんながおめかしをして王様の夜會へ出て行つたあとで、ひとりつきり臺所の壁の前に坐つて、何か考へてひとりごと

を言つてゐます。)

すみれ「あゝ、もう寝ようかしら！ みんなはもう王様の御殿へ行つて、踊つたりなんかしてゐるのに、あたしばかり本當につまらないわ！ だが、王様の御殿はどんなに立派だらう？ あたしも一遍でいゝから、行つて見たい！ (と

いつたが、急に死んだお母さんのことを思ひ出して) あゝ、お母さま、あたしの本當のお母さまがゐらしたつたら、きつと一しよに連れてつて下すつたらうに！ (といつて悲しまうに、眼のうちに涙をためて、空の方を見つめてゐるが) あゝお母さま！ あなたはなぜ死んだんです？ 他の人にはみんなお母さまがあるのに、あたしにばかりお母さまがないなんてあんまりだわ！

(といつて、すみれは壁の前へ泣き伏してしまひました。その時、壁のうしろから頭髪も髭も雪のやうに白い老翁がでて來ました、そしてすみれの泣き伏してゐる頭のところまで來て、老翁は手に持つた杖で、トン／＼と床を叩きました。)

老翁「これ、すみれや、かまど姫や！ 何を泣いてゐる？

(すみれは驚いて顔をあげました。そして老翁の姿を見て目をま



るくしてゐますと、老翁はにこ／＼笑ひながら、  
老翁「すみれや、わしを知つてゐるかな？」

すみれ「いゝえ！（と首をふつて、驚いたやうな聲をします。）

老翁「へに／＼笑ひながら」わしはお前の守護神だ。お前の望

なら、何でもかなへてやるから、言つて見なさい！

すみれ「あたし行きたいんです……行きたいんです。」

老翁「あゝ、お

前は王様の夜

會へ行きたい

のだらう、

ね？」

すみれ「えゝ、

ですが衣服も

ないし、杵も

なくつて行か

れないんです

もの。

老翁「それなら



わしが行かれるやうにしてあげよう。

すみれ「まあ（といつて嬉しうに老翁の顔を見て）本當？」

老翁「本當とも！（といつてすみれの顔を見てにこ／＼笑ひなが

ら）それちや一寸の間その戸棚の隙へ入つて、眼をつぶ

つておいで。そして、わしがお呪ひをする間に、三遍廻つ

て出て来なさい。

すみれ「はい（とすなほにいつたが、ひとりごとのやうに）まあ本

當かしら？ 胸がどき／＼するわ！

（といつて、胸を抑へながら、すみれが戸棚の隙へ入つてゆくと

老翁は杖の握りについた鳩の頭を自分の方へ向けて、呪文を唱へ

ます。）

「鳩、鳩、飛べよ。

西の方へバタ／＼、

東の方へバタ／＼、

彼方で鳴いて、

此方で鳴いて、

上を下へ、

老翁（にこ／＼笑ひながら娘の姿を見て）すみれや、それから

王宮へ行くには馬車がなくはいけないが、まあ一寸この

窓から外を覗いてごらん。何か馬車になりさうなものがあ

るかも知れないから。

（すみれは窓のとこへ行つて外をのぞきます）

すみれ「あら、策の中から鼠が出たり入つたりしてゐるわ、

親鼠が二匹に懸鼠が三匹ゐるよ。

老翁「よし／＼、わしが今お呪ひをする間、お前は戸外を見

てゐて、策と鼠がどうなつたか話しておくれ。

（かういつて、娘が窓の外を眺めてゐる間に、老翁は鳩の杖を立

て、前と同じ呪文を唱へます。）

鳩、鳩、飛べよ。

西の方へバタ／＼、

東の方へバタ／＼、

すみれ「老翁さん有がたう（と嬉しうにお禮を言つたが）ま

ア、まるでお姫様みたやうだわ！



中を舐へ、

ぐるりと廻つ

て、

暗い方を明る

く、

襦袢をかへし

て、

綿の方をだア

せ。」

（といふうち

に、かまど娘は

さつきまでのぼろ／＼の衣服とは違つて、金や銀の光が目くら

みさうな錦の衣服を着て、戸棚のうしろから出て来ます。そして

じろ／＼と自分の愛つた姿を見まはしながら、老翁の前へ来て立

ちました。）

（といふうちに、娘は驚いたやうな聲をして、叫び出しました。

すみれ「あら、老翁さん、早くごらんなさいよ！ 策が立派



な馬車になつてよー!

老翁「うむ、それでよろしく。」

(と點頭しながら、老翁は呪文の後を續けます。)

彼方で囁いて、  
此方で囁いて、



上を下へ、  
中を外へ、

(といふと、窓の外を見てもた娘はまた驚いたやうな聲で叫びました。)  
すみれ「あらあら! 親鼠が大きなお馬になつてよー!  
老翁「うむ、そ

れでよろしく。

(と點頭しながら、老翁はかまぼく呪文の後を續けます。)  
ぐるりと廻つて、

暗い方を明るくせい!

すみれ「あら、老翁さん、鼠が人になつて、馬車を曳き出しましたよ!

老翁「どうぢや、これなら王宮へ行かれるかな?

すみれ「え、行けますとも、老翁さん、本當に有がたう!

(といつて娘はもう戸外へ跳出さうにするのを、老翁は呼留めて、)

老翁「すみれや、一寸お待ち! 行く前に一つ約束がある。どんなことがあつても、夜中すぎまで王宮にゐてはいけない。十二時の時計が鳴ると、馬車も、衣服も、すっかり元の通りになつてしまふから。いいかね。さア屹度その前に歸るといふ約束をしておいで!

すみれ「はい、分りました。屹度十二時の鳴る前に歸つて来

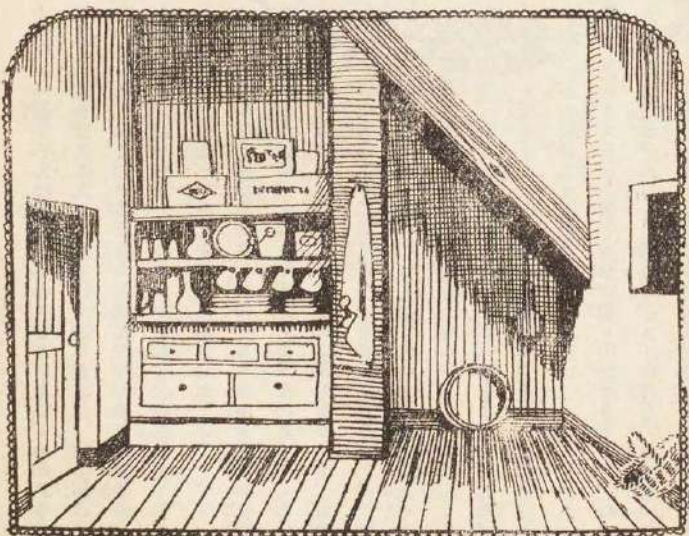


ます!  
老翁「ぢやア行ついで!

(といひながら、懐を探つて、可愛らしい本品の香を出して) あ、かまど姫や、この香をはいておいで! そしてこの香で踊るんだすよ!

(かまど姫は可愛らしい本品の香を兩足へはいて、跳ぶやうな足つきで、屏のところへ行つたが、一寸振かへつて、老翁の方を見て言ひました。)

すみれ「老翁さん、行つてまゐります。  
(まう言つて、いそぐと戸外へ出て行く娘の姿を、老翁は先表りにこゝろして見送つておました。 (幕) (つづく)



(「かまど姫」第二場舞臺面)



# 澄子さんがした話

前田 晁



なら、澄子さんは猫と話してるといふことのない子でしたから、燕のやうにおしやべりをしてるな時は、楽しげな小さな駒鳥のやうに歌つてました。そしてその聲は驚よりもいい聲でした。

澄子さんが中でも一番好きで話した話は、それは全く本當の話でした。それを澄子さんはいつでもかういふ風に話しました。

「ミイや、お前知ってる、わたし達か先にはこの小さなおうちに住んでるなかつたつてこと。わたし達は去年まではずっと大きなおうちに住んでたんだわ。綺麗なお庭もあつたわぶらんこともあつたし、兎も飼つてたし、ジョンといふ大きな犬もあつたし、カロつていふ小さな犬もあつたわ。そしてわたしの子供部屋へは、近所の子供達がしょつちう遊びに来て、おままごをしたり、かくれんぼをしたりしたわ。それからおかあさんは、よく音楽會へ行つて歌つたわ。尤も、その時にはいつでもおうちでいくども、歌つて見たりしたの。それをわたしは、お座敷に坐つて聞いてたわ。そしておかあさんがお出かけになる時は、いつでも綺麗な着物を着て、そ

澄子さんは庭の下の小さなおうちに、おかあさんとおばあさんと三人で住んでました。家の前にははてしない海が廣々と横がつて、のどかな春の日に波頭をちら／＼と光らせながら、のたり／＼とまっ白な美しい砂灘を打つてました。

しかし澄子さんは、家のうしろの小さな狭い花園の方が好きでした。中でも、丁度そのまん中ごろの崖の根元の所にあつた大きな石に腰をおろして、可愛い小猫のミイにお話をしてやるのが好きでした。ただその石の上の方には、高い崖の中途邊から長々と變つた棘の多い茨の端が、垂れさがつてましたので、決して寄りかゝつたりなんかしませんでした。澄子さんはミイを膝に抱いて、そしていつまでも靜かに話しました。

「ミイや、お前、お話を聞くのが好きでせう、ね。」澄子さんはかう言つて、ミイの冷たい鼻に頬すりをしてました。が、もしミイが好きでなくとも澄子さんは多分話さずにはゐるなかつたでせう。なぜ

れは、美しくかつたわ……」

と、この邊まで話して来ると、いつでもミイはちよつかいを出して、澄子さんのおさげの先きにじやればはじめました。すると澄子さんはお話を止して、ミイを膝からおろして、そして一緒に花園の中を駆けまはります。が、しばらくさうして、汗ばんで来たりくたびれたりすると、澄子さんはまたもやミイを抱いて、元の石の所へ行つて、そしてさつきの話を切れた所からまた續けて行きました。

「そしてね、ミイや、おとうさんはお船に乗つて外國へいらしたの。そしておかあさんのお金は銀行に預けておいたの。するとその銀行がつぶれたの。でも、それがどうしてつぶれたのかわたしには分らないの。だつてね、その直ぐあとでわたしが其處を通つた時には、ちやんとしてるたんだもの。窓のガラスだつてこはれてなんかなくなつたんだもの。でも、それから二三日してから、わたし達がおばあさんの所へ行つた時に、おばあさんがおかあさんにかう仰つたわ。だからわたし、銀行はあぶないつて言つてゐたんだよ。いつ潰れるか知れないもの。やつぱり自分のお金は自分でしまつておか



なければ……」つて。

「なんでもまさの話ではね、……まさつておばあさんこの女中なの。おばあさんは、その頃はわたし達とは別つこに隠居してゐただわ。昔のおうちにはね、御門の所に大きな櫻



お手紙が来たの。おとうさんはもうおうちに歸つて来なはつて。おとうさんも溺れて死んだんだつて。おばあさんの箱を盗んだ悪者達と同じやうに。ただおとうさんは、遠いく海に向うでお船に乗つてゐただつて。

「その知らせを聞くとおかあさんはがっかりして、ひどい御病氣になつたの。そしてやつと癒つた時にはもう音楽會なんかへ出ようともしなかつたの。わたし達がこのちつほけなおうちに移つて来たのはそれから間もなくだつたわ。此處には長い間、だれも住んでゐなかつたのよ。これでおしまひ。——おや、おや、ミイや、お前つてばずらいわねえ。すつかり寢込んでちやつてゐるんだもの。」

實際、ミイはいつの間にかさも氣持よささうに眠つてしまつてゐました。が、それは兎に角、澄子さんがおかあさんやおばあさんと一緒にこの崖の下の小きな小屋に住むやうになつたのは澄子さんがミイに話した通りの譯からでした。

ですから、一家はひどく貧乏でした。それは澄子さんが、ミイを淋しい小徑で——どうしてそんな所にあるのか不思議なほどの、人家からも遠く離れた淋しい小徑で見つけて拾ひ

の木があつてよ。今頃はきつと綺麗に花が咲いてゐるわ。いつか連れて行つて見せてあげやう。ねえ、ミイや。……そのまさの話ではね、おばあさんはお金やお金目のものはみんな大きな箱に入れて、お納戸の戸棚の中に入れておくんだけつて。おうちに歸つてからわたしがおかあさんに、まさがさう言つてゐたつてお話ししたらね、おかあさんは眉をひそめて、「困るねまさは。そんなおしやべりをして」と仰つたわ。「それは、ほんとに困つたことだつたの。まさがあんまりおしやべりしたものだから人が知つたのでしょ。ある晩、誰かがその箱を盗んで、持つて行つてしまつて、それきり返つて来なかつたの。ただその晩、二人の見た事もない人が浪にさらはれて、丁度あの崖のあのはなの所で」と、澄子さんは指さしながらミイの眼さうな鼻を左の方へ向けました。濡れて死んでしまつたの。それで、みんなはその二人がきつと泥棒だつたんだと言ふんだけど、でもねミイや、箱は何處にもなかつたのよ。

「それで、おばあさんもわたし達のおうちに一緒にゐることになつたの。すると間もなくだつたわ、何處か遠くの方から

あけた時に、おかあさんが頭をふつて——とてもおうちに、小貓を飼ふやうなそんな餘裕はありませんよ」と、さう言つたほどに貧乏でした。

けれど澄子さんが是非飼ひたいと願つたのと、一つはおかあさん自身もその小貓を見てゐるうちに可哀さうになつて来たのとで、たうとう連れて歸つたのでした。

ミイは間もなくみんなに慣れて、夜になると、小さなおうちの天井裏から鼠を捕つて来たりしました。それを見るとおかあさんもおばあさんも、ミイを飼つたのをいゝ事だつたと喜び合ひましたが、澄子さんは心のやさしい子でしたから、食べられてしまふ鼠のことをいつでも大層氣の毒に思ひました。で、ミイが花園の隅などに長い間ちいつと坐つて、石のそばの、崖の穴を見守つてゐたりするのを見ると、澄子さんはいつも直ぐにそのそばへ行つて、そつと其の頭を撫でながら言ひました。

「お止しよ、ミイや。……だつて、あんなどこのおねずはおうちまで来やしませんからね。」

けれど、ミイは何か別の事を考へてでもゐるやうに、やは



り其のままちつと坐つてゐました。

所が、ある朝ミイの姿が何處にも見えませんでした。小屋ぢうは限なく捜しましたがありませんでした。前の砂濱の方にもありませんでした。いつもはミイの事などあまり問題にもしなかつたおばあさんまでも一緒になつて捜しましたが、何處へ行つたかかいくれ行方が知れませんでした。

所が、六遍目におかあさんが夏なつの小さな花園の隅々から木といふ木の根方まで一々のぞきまはつてゐた時でしたふと澄子さんが叫びをあけました。

「此處よ、此處よ、おかあさん、この石のそばよ。ほら、此處の崖の穴んとこが砂がこんなに崩れてゐてよ。きつとミイがはいつたのだわ。そして出られなくなつたのだわ。ほら、にや



おんとないたやうよ。」  
おかあさんも来て調べて見ました。  
「ほんたうにさうらしいね。」と、おかあさんは言つて、木のきれでそこに溜つたごみをかきのけはじめました。と、穴は石のうしろから奥の方へ深くほかんと明いてゐるやうに見えました。

「おや、變だこと、これは。」と、おかあさんは叫びました。「何だか洞穴でもありさうに見える。」

そして其處からそつと手の中へ入れて見ました。と忽ち、ミイが中から其の手にじやれつきました。

「ほんたうに變だこと」とおかあさんは今はもうミイの事など全くそつち除けにしまつて、「どうしたといふのだらう。本當に洞穴

であるのか知らず」

さも不思議さうにかう言ひながら、垂れさがつてゐる次の先きを、引つかかれぬやうにと氣をつけてわきへ寄せると、腕に力を籠めて、石を少し動かして見ました。と、穴はまた大きくなりました。おかあさんはいよいよ不思議に思つて、腕一ぱいに力を入つて、やつと石をわきへのけて見ました。

「あら、まあ。」と、途端に澄子さんが、思はず驚きの聲をあけたのも尤もでした。其處には實際洞穴があつて、大きな石で其の入口を塞いでゐたのでした。

「ね、おかあさん、これならおまごつたつて出来ませうわ。」澄子さんは中をのぞいて見ながらはしやいだ聲を出してまゝかう言ひました。ミイの事など澄子さんもいつか忘れてしまつたのでした。所がミイはまたミイで、今はもう鼠ねずみのことも、自分が洞穴の中に閉ぢ込められてゐたことも忘れてしまつて、花園の中を獨りで樂しげに遊びまはつてゐました。

澄子さんはおかあさんの後について洞穴の中へはひつて見ました。と、今度はおかあさんが遽かに振り返つて、けたたましく叫び出しました。



「澄子、澄子、おばあさまをお呼び、早く、早く。」といふのは蜘蛛の巣などが張つた、ごみの一ぱいな、薄暗いこの小さな洞穴の中に何かあつたからだともなさんは思ひますか？ お分りになりませんか？ え？ それなら、其の



晩小猫に話した澄子さんの話を皆さんも聴かなければなりません。

「お前知ってるの、ねミイや、何をお前がしたかつてこと？え？ お前は、おばあさんの箱を見つけたのよ、——あのお金や何かがつさはひつてゐる。だからね、わたし達はかう貧乏しなくつてもいいのよ。だからね、お前ももうおねすなんか捕らなくつてもいいのよ。いくらでもお前の好きなおいしい物をあげるわ。あの悪者達はきつと洞穴の中に箱を隠しておいて、後で取りに来ようとしたんだわ。だけど、死んでしまったのでそれが出来なかつたのだけ、屹度。」

ところで、不幸なことが滅多に一つほつつりと来ないやうに、いい事もまたしばしばつらなつて来るものです。その次ぎの日には澄子さんのおとうさんが思ひがけなく歸つて来ました。

さうです、海から歸つて来たのです。

おとうさんは溺れたのではなかつたのでした。難船したのは事實でしたが、おとうさんは幸ひに助かつたのでした。ただその事を詳しく知らせて寄越した手紙が届かなかつたので

した。

で一家は、俄かになんといふ喜びに、充たされたことではう。

ただおかあさんの美しい聲だけは元通りになりませんでした。が、おかあさんは、そんな事はちつとも構はないと言つてました。

なぜなら、今はもう澄子さんがどんな學問でもすることが出来るやうになりましたので、今におかあさんをも、外の人達をも、その楽しい歌聲で幸福にするであらうと思つて居りましたから。

「そしてね、おかあさん。」

と、澄子さんは言ひました。

「わたし洞の中でおままごとをしてもいゝでせう、ミイやと一緒に？」

「えゝ、えゝ、ようござんすとも。」とおかあさんは言つて

澄子さんもさうでした。(をばり)

雀のおし

謡曲 やべり (推薦)

佐々木高明

雀のおしやべり

こまつたね

だんまり案山子は

つんぼかね

それとも あきれて

ゐるのかね

雀のおしやべり

こまつたね

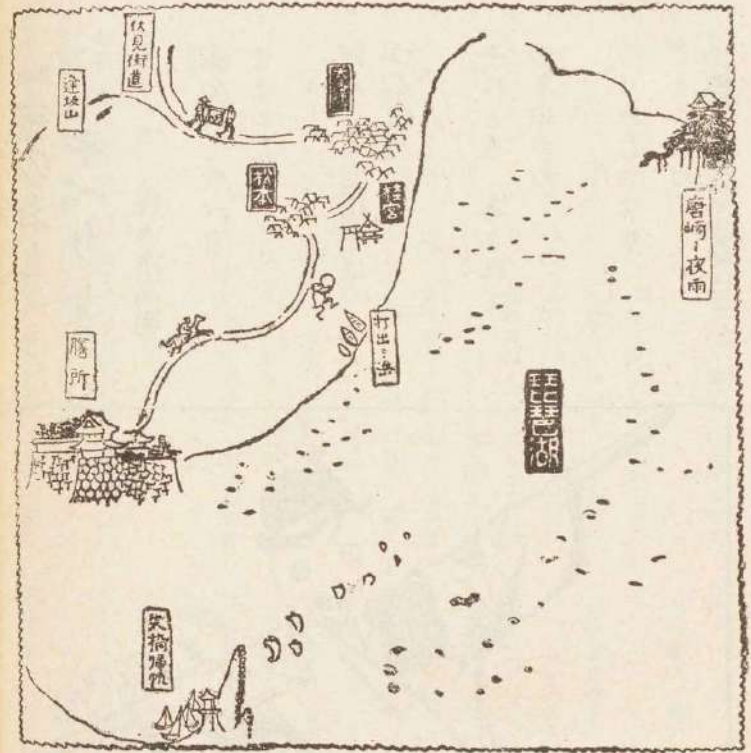
(住所 東京麻布市兵衛町二ノ二七)





説書 蹴鞠の神

藤澤衛彦



昔々、近江國の殿様が、琵琶湖に、お舟遊びの時、突然不思議の暴風で、平和の湖が大荒れに荒れたし、殿様の船は木の葉のやうに沖合遙かに流されて、逆巻く怒濤にあはや沈没の憂目を見ようとした事がありました。

殿様は、はやく死を覚悟されましたが、「せめて船だけでも助けたい。誰ぞ助ける者はなにか、助けおはせられた者を姫の嫁とせう。」とまで仰せられました。誰かあつて助ける者はなく、皆そこら中にながみついて、自分の身勝手へも動かす事が出来ず、ただ悲しうにして、萬が一の助け船でも出ないかと願う方を見てゐるばかりでした。

その時、何處からともなく船が飛んで来て、蹴鞠の中からみつきました。見ると、殿様の船は湖の上遙かに曳かれて、皆が驚いて、驚き問もあらず、船ぐるみとどん手繰り寄せ

られて行き、間もなく打出の湖に横つてゐる一般の船に結びつけられ、そのまま松本村の濱邊に引かれました。折から、その邊には、決死の御家臣共が船頭たちと力を合せて、助け船の用意最中でしたので、殿様の船は無事に着陸する事が出来ました。

何せ、姫ばかりでなく、一同つゝがなく歸館といふ喜びに、殿様はことごとく御感謝で「かの船から蹴鞠を投げたは誰れか、早く、わが殿合から、一番勝れた馬を一頭出して、飾りの鞍を置き、それに被飾の時服一領を添へて、われらが恩人を迎ひに遣はせ。」といふ仰せでございました。すると、これを聞かれました御家老様は、何がなにか、思はずぶつと噴飯してしまひましたので、この意を御覽になつた殿様は大層なお腹立てで、「主君の前で無禮な事動をする奴、その儘には容赦が出来ぬ。もし噴飯した理由が明瞭にならないなら、相當の罰に當せなければならぬぞ。」と、お疲れの中から怒鳴られましたので、御家老は、非常な驚きと共に、全く自分のあるまじき粗勿を後悔しまして、「殿！御徳所がらもわきまへざる臣が粗

忽の事などうか御話し下さいませう。しかし、其笑ふに至りました理由だけは申し上げませんでは、一層臣が心に済みません。より、一通り御聞き下されたうございます。實は、その殿の長くも馬を下されてお迎へ遊ばさうとなさる者は、あの人間ではないのでございませう。その言ひわけに殿様は不審がられ「ほう、あの助け船の主は人でない？ 何神様でもあつたと申すか。」殿の御船を助けましたのは童猿様でございます。何ッ、猿？。はい、確かに猿でございます。よし、たとへ猿に殺せ、命の恩はある。兎に角われの命令通りいたせ。」といふので御家來は早速出迎への準備をととのへて小猿を尋ねて美しい錦の服を着せ、駿馬に乗せて御館に連れて参りました。

遙かにこれを見ました殿様のお姫様は驚きました。其猿といふのは、未だ父上が此國へお出でになられない前、山城國に住居の時分、桂宮邊からよく遊びに来た事のある猿で、戯れにお姫様が蹴鞠のお相手なされた猿で

したので、お姫様はびっくりしましたが、何時か其猿が持つて来た蹴鞠を取上げた事と思ひ出されて、急いで、御居間からそれを取つて来られ、丁度小猿が馬から下りて、御空關に降り込んで来ます所を見ればからひ、いきなり鞠り蹴りつけました。

小猿は怒ら本性をあらはして、一週其を罵かへしましたが、姫が再び蹴られますと、小猿は今度はその鞠を持つて逃げ出しました。御家來方は、全く突然の出来事なので、暫くあつげに取られて見てをりましたが、馬の名人の御家來が、急ぎその跡を追ひかけました。

然し、小猿は鞠のやうに速く山城國桂宮まで来た時、とある社廟の中に逃げ込んでしまひました。見れば、それは、余て後鳥羽上皇様がお祈りなれたといふ蹴鞠の神の社であつたのです。祭壇に例の蹴鞠が、りましたので、御家來は取つて御りました。

お姫様は、其後、此鞠を持つて蹴鞠の名家に傳入されましたが、桂宮の蹴鞠の神河原元のはじめ、勅によつて、近江國松本岡山に遷座になりました。今、大津市松本町の平野神社といふのがそれでございます。(なはり)



◆童謡

野口雨情選

みそさざい

東京田中良泉

藪の中から  
チツチツチツ  
垣根の外から  
チツチツチツ  
小さいからだで  
チツチツチツ

夜風

福島會相眞琴

夜風が吹くぞへ  
寒いぞへ  
みな木がガサ／＼  
動くぞへ  
雨戸をゴト／＼  
叩くぞへ

銀杏の木

東京稻垣ひろし

すめの遊場  
集のお家  
お宮の銀杏は  
のつほ銀杏

棕鳥

大分市川舒

バキ／＼する音  
可愛い音  
榎の木にとまつた棕鳥が  
榎の實をつゝいて  
たべる音

雨

東京上島時之助

雨が降る降る雨が降る  
畑に森に野に海に  
わたしの傘に  
あの船に  
雨が降る降る雨が降る



悪い易者

宮島資夫

昔支那のある街に、千公といふ人が居ました。大變氣立ての勇しい人で、それに困つてゐる者があればどうにかして扶けてやるといふ、俠氣のある人でした。おまけに力があつて、大きな重たい壺を一時に二つも差し上げて、ぐる／＼舞々舞ふことさへ出来るくらゐ武術にもよく達した人でありました。

或る時、この千公の家に来た僕が解氣になりました。いろ／＼と藥を飲ませたり、手を盡して介抱してやりましたが、なか／＼癒りませんでした。千公は優しい人だものですから大變心配して、何うにかして早くなほしてやりたいと、毎日そればかり考へてをりました。

それである日そんな事を思ひながら町を歩いてゐますと、大變よく當るといふ卜者に逢ひました。人の話で聞くとその易者は、人の壽命の事をよく當てるしまた場合によつては、死ぬ命も取り止めてくれるといふ事でした。

千公も自分の家の僕の命はどうなのかと心配してゐた時ですから、その易者に占つて貰ふ氣になりました。易者の前に進んで行くと、まだ千公が、一言も口を利かない間に、

「あゝ、あなたは、お宅の僕さんの病氣の事を聞きにお出でなすつたのですね。」と、易者は千公を一目見るとすぐに云ひました。千公は自分がまだ何にも云はないうちにすぐ當てられたのに驚きながら、

「えゝ、さうです。實はそれであなたに見て頂きに来たのですが」と答へますと、易者は、

「それならば御心配には及びません。その僕さんの病氣はすぐに癒ります。けれども私の見た所では、あなたの身體に近い中に悪い事がありさうです。」と、云ひましたので、千公は、



雪道

愛媛 阿部 弘

白い雪道痕だらけ  
大きい靴あと大人だらう  
小さい可愛は子供だらう  
梅鉢模様は小犬だろ

戀しい母さま

仙臺 櫻田はるを

森の小鳥よ  
お家は戀しいか  
母さまは戀しいか  
戀しいよ  
母さまが戀しいのか

人形

高知 浪越 汀花

ひとりぼつちは淋しかろ  
かはい人形の  
めんめから

小鳥

北海道 脇山 汀子

熱い涙がこぼれてる  
私のもとは人でした  
魔法の魔法にかけられて  
私は小鳥にされました  
お親戀し 人戀し

インキの口

常陸 小坪 奈保志

赤いインキの纏の口  
手帳の上に落したら  
ぐるり廻つて輪を描いた  
赤い小さな輪を  
描いた

こまげた

埼玉 鈴木 章子

赤いはなをの

「それでは、私の身の上を見て下さい。」と、頼みました。易者はしばらく算木や筆竹をひねつてゐましたが、急に顔色を變へて、

「これは大變だ、あなたは三日の後に死ぬと云ふ卦が出ました。」と云ひました。さすがの千公もそれを聞くと驚いて、しばらく黙つて居りました。すると易者は

形を改めて、

「しかし御心配なさるには及びません。私が代つてあなたの災難を覆つて上げます。がそれには色々準備もしなければなりませんから、百圓だけお出しなさい」と云ふのでした。

けれども千公は元來氣丈な人でしたから、

「僅かな金で行ふやうな術で、どうする事が出来るものか、と思ひましたので、

「あゝさうですか、三日の後に死ぬと決つてゐるのなら、それも仕方ありません。無理に取り止めて頂く事もありますまい。」と云つて、そこを立ち去らうとしますと、

「僅かな金を惜んで、悔むやうな事のないやうにしないといけませんよ。」と、易者は何度も何度も繰り返して云ひました。しかし千公はさつさと家へ歸つて、その事を知つた人達に話しますと、昔なほ、



「そんな剛情を張つて間違ひがあるといけないから、早くもう一度行つてお頼みなさい。」と云ひましたが、千公はどうしてもそれを肯き入れませんでした。

その中にわづかの日はすぐに經つて三日目になりました。千公はその日一日自分の部屋にキチンとして暮して居りましたが、晝間の中は何事もありませんでした。



こまけたが  
おえんの外でひとりぼち  
寒い一夜を可哀想に  
雪の降るのになきあかす

### お 鐘

新潟 岩崎 樹三

母様母様日がくれて  
鳥もねぐらへ歸ります  
遠くのお田で 鳴る鐘は  
何故 どなたが  
つづのつづ

### 停車場

宮城 小室 達郎

赤い灯 青い灯  
ランプの灯  
田舎の停車場  
ランプの灯

### 跛の雀

山口 新庄 嘉章

木小屋の屋根の 跛の雀  
夕焼 小焼  
母さんどこだ  
母さん河原の篠敷だ

### ね こ

大阪 池田 加久子

青いおめが ぎんざらり  
大いおめが ぎんざらり  
暗い玄關で  
光つてた

### 大寒小寒

廣島 牧野 真砂子

大寒いな小寒いな  
枯れ木の小鳥は  
啼いてゐる  
村の子供はどなつてる

た。夜になつても宵の中は何事もなく、靜かに夜が更けて行きました。干公は十二時過ぎ頃まで、扉を閉して、部屋の中に燈火を煌々とつけて、傍に劍を携へてゐましたが、一向に死ぬやうな様子もないので、いざ寝ようと思つて、支度をし

てゐますと、急に窓の所から、かさ／＼と云ふ音が聞えて來ました。「はて、何物だらう。」と、燈火をか、けて見ると、窓の上から小さな人形位の大きな人間が、杖を持つて忍び込んで來るのであります。さうして、漸く窓の間から潜り込んで、ひらりと土間の上に飛び下りると、俄かにそれが、人間位の大きさとつたのであります。干公は之れを見るが早いから、

「さては妖怪！」と、心に思つて、劍を取つて抜き打ちに斬りつけました。すると作の妖怪はひらりと身をかはしたので劍が當りませんでした。それと同時にまたその速いな、小さな人間に踏んでしまつて、急いで窓の間から逃げようとして、隙間を探しはじめました。

干公はその隙を覗つて再び斬りつけると、今度は見事に、腰の邊から胴斬りとなつて、地上にはざりと落ちました。そこですぐに燭を持つて來て、よく／＼その小さな人間を見ると、紙で造つた人形が、腰から切られて落ちてゐました。其處で干公は、

「これは油断をしてはいけない。」と、用心しながらちつと待つてゐますと、しばらくして、今度はまた恐ろしい顔をした、鬼のやうな物が、窓を打ち破つて飛び

込んで來ました。待ち受けてゐた干公は、鬼が窓からひらりと飛び下りたばかりのところを、いきなり斬りつけて、また胴斬りにしましたが、別々となつた手や足をいつまでもびく／＼動かししてゐるので、生き返つては大變だと、續け打ちに斬りつけました。

すると劍が當るたびに、ほくつ、ほくつ、と云ふやうな音がするのです。不思議な事があるものだと思つて、また燭を持つて來てよく見ると、どうでせう。今度は土人形がめちやく／＼に碎けて散つてゐるのです。

干公はいよく不思議に思つて、今度は窓の下に立つて、ちつと表てを覗んで待つてゐました。しばらくすると、今度は外の方から牛の喘ぐやうな聲が聞えて來て、窓際をから／＼揺り初めました。それが大變な力らしく、室の中はまるで地震が起つたやうで、壁は波のやうに揺れて、壊れさうになつて來るのです。干公は室の中に入ら、四邊が倒れてつぶされては大變だし、どうせ同じ事なら外へ出て闘つてやらうと決心して、急に扉を開いて飛び出しました。

すると今度は部屋の外に、身の丈が簀につかへさうな大きな鬼が立つてゐました。丁度月のない暗い晩でしたが、顔は煤のやうに黒くつて、眼は黄色く秋々として光つてゐる、何とも云へないほど物凄い、裸の鬼でした。さうして手に弓を携へ、腰に矢を挟んでゐましたが、干公がいま表てに出て來たのを見ると、いきなり弓に矢をつがへて兵と切つて放しました。然し干公はいきなりそれも劍で



地藏さん

東京 後藤 あらき

石の地藏さん  
よだれかけかけた  
首にもよんきり  
かけかた上手

婆やと二人

朝鮮 清水 佐登美

母さんお里へ去んでから  
淋しい夜は  
幾夜でせう  
婆やと二人で門口に  
お月さん見る夜が  
羨らでせう

お日様

神戸 鈴江 八十八

夕やけ小やけ

空が焼け  
お日様お家も皆な焼け

豊年

岩手 渡邊 恒彦

たすきをかけた人達が  
ゴリゴリ、ゴリと稲こぎだ  
俵に一杯つめこんで  
藏ん中をころがした

角屋敷

東京 和田 ミツ

向横町の角屋敷  
屋敷で伺つてる犬ころが  
いつでも私にはえかがる

お日さま

長野 有賀 博

春のお日さまやわらかだ  
みじりの夢と  
仲よしだ

拂ふと、鬼はすぐに第二の矢を射かけましたが、今度は拂ふ暇がないので、飛び退きますと、矢は壁に當つて、びり／＼と唸りました。

すると鬼は怒つて刀を抜いて風のやうに振り廻して切つてかゝりましたが、その中に二つになれと切り込んで来た刀を、またも千公がかはしたので、刀は流れて庭石に當りました。すると庭の石は真二つに切れてしまひました。千公はその隙に鬼の股ぐらに飛び込んで、裸に一太刀切りつけると、かちんと云ふ音がしましたが、鬼は益々怒つて、雷のやうな聲をあげて吼りながら、身を翻へしてまたしても切りつけて来たのを、千公が巧みによけたので、裾が切られたので助かりました。此時千公は丁度鬼の脇の下に入つて、力一杯脇腹に突き立てたので、またかちんと云ふ大きな音がして、鬼はそこに仆れてしまつて、のたうち廻つて居りました。

そこで千公は幾太刀も幾太刀も切りつけましたが、その度にかちん／＼と云ふまるで拍子木でも叩くやうな音がして、鬼の身体はばら／＼になつてしまひました。千公はほつと息をついてまた燭をつて来てよく／＼見ますと、今度のは大きな木の人形で、それは物凄く顔をした鬼でありました。然もなほ不思議な事には、その切口に血がにじんでゐた事でした。

千公はそれからもまだ用心して、明方になるのを待つてゐましたが、化物はそれつきりもう出て来ませんでした。さうして此の化物は、きつとあの易者が、三

日の後に死ぬと云つた自分の言葉を本當にさせる爲めに奇超して、自分を殺させようとしたのに違ひないと考へたものですから、翌日になつて千公は、お友達に昨夜の事を話して、多勢の人を誘つて、易者の所へ行つてみました。

すると易者は千公が来るのをちつと見てゐましたが、千公が側近に近づいて行くと、ふいに煙のやうに消えてなくなつて、どこへ行つたか判らなくなつてしまひました。ところが、この連れの中にある物識の人がまるで千公の家へ歸つて来

たから、  
「今日易者の姿が消えたのは、あれは醫形の術と云つて、本人はあすこにゐるのだが、たゞ人の眼に解らないだけなのだ。けれども獸の血をかけると術が破れるから、すぐに姿を現はすものだ。」  
と、話して聞かせました。

そこで千公はまたその翌日獸の血を瓶に入れて、すつかり用意して出かけました。さうして易者の前に行くと、その姿はまた昨日のやうにふいに消えてしまひましたが、

「そんな事をしてもだめだ」と、易者のゐた所にその血をそゞくと、忽ちに易者の姿が現はれ出ました。

千公はすぐに易者をつかまへてお上の役人に渡しました。悪い易者は後で大變な重い處刑に會つたと云ふ事でありませう。(をばり)



# 梅若丸物語

(つづき)



七〇

## 齋藤佐次郎

雪に埋れた夜明けの天津の里で梅若丸がしょんぼり立つてゐた時、そこを通りかゝつたのは、人買ひの信夫の藤太といふ男でした。

この藤太といふ男は、毎年奥州から可愛い子供をさらつて来て、それを京都へつれて行つて賣るのを商賣にしてゐました。

その日も、藤太は京都へ行つて子供を賣つて来たので、また國もとの奥州へ歸らうと思つて天津の里を通りかゝります

るらつしやるのです。道にでもお迷ひになりましたか。」と、きゝました。

「私は北白河へ歸らうと思つてこゝまで来たのですが、道に迷つてしまいました。歸る道を教へて下さいませ。」

さういつて梅若丸がたのむと、藤太は悪者だけにすぐと、うまい事を考へつきました。それは、藤太の住む奥州にも白河といふところがあるので、もし途中で誰かに見とがめられても、この子が白河へ歸りたいといふから伴れて行くのだといへば、それまでのことだと思ひましたから、

「おゝ左様でございますか。それは丁度よい都合です。實は私も白河の者で、今が歸り道ですから御一しよに参りませう。さアお出でなさいませ。」

藤太はさういつて梅若丸の手をとりました。

梅若丸は思ひがけない人にあつたと思つて、喜んで藤太につれられて行きましたが、もう間もなく懐しいお母様にもあへるのだと思ふと胸がをどるやうに思ひました。

梅若丸は藤太につれられてそれから半里も歩いたでせうか。ところが、ちつとも京都の町が見えて来ません。何處を

と、道端の雪の中にきれいなお稚兒姿の少年が一人しょんぼり立つてゐるのを見ました。こんな朝はやくに伴の人もつれないで、たつた一人であるのはきつと比叡山あたりの稚兒がお師匠さんに叱られて山を逃げて来たのだらうと思ひました。が、それを見ると藤太はすぐ悪い心をおこして、

「さうだ！ だまして一と儲けてやらう。京都では近くないから、奥州へつれて行かう。」と、考へました。

そこで藤太は、梅若丸の立つてゐるところへ行つて、さも親切さうに優しい聲をつくつて、

「まあ、お可哀さうに、あなたはどうしてこんな處に一人で眺めても見たこともない山や川ばかりです。あんまり不思議ですから、

「をぢさま、道が違ひはしませんか。この道を行つても白河へは出られるのでせうか。」と、心配さうにききました。

すると、藤太はさつき親切な様子とは打つて變つて、

「あゝ出られるともね、安心してゐな、必ず白河へ行けるのだから。」と、荒々しくいひました。

梅若丸はびつくりしました。急に怖くなつて来ました。藤太のおそろしい姿から察すると、きつと自分だまされてゐるのだと思ひましたから、

「をぢさま、これはたしかに道が違ひます。私は一人で白河へ歸ります。」と涙聲でいつて駈出さうとしました。

藤太はあわて、

「これ！ 何處へ逃げるのだ。逃がさせはしないぞ。」と叫んで、逃げようとすると梅若丸の両手をキユツ！と抑へつけました。それと同時にふところから手拭を出して、梅若丸の口を結いでしまいました。もういくら叫ばうたつて誰にも聞えはしません。藤太は梅若丸に深い笠をかぶせてしまつて、引











つて土手上の道端に埋められて、梅若丸のねがひの通りにその塚の上には柳の樹が植ゑられました。

それから一年たちました。

三

隅田川にはまた春が来て、水の面には鶺鴒が眠むさうに浮んでゐました。梅若丸を埋めた道ばたの塚の上にも草が生えてそこに立つてゐる柳も青々と芽をふきました。

その日は丁度梅若丸が死んでから一年目で三月十五日にあたりましたので、近所の村に住んでゐる人達が去年のあはれな少年のことを思出して、臨終の時に介抱したお爺さんをはじめ大勢の男女が集つて、大念佛といつて塚のところでお念佛を唱へてくれることになりました。

その時、丁度忠圓阿闍梨といつて出羽の國の羽黒山といふところに永年ゐた聖いお坊さんが、近處のお寺へ来て暮してゐたので村の人達は「あのお坊さんにお經を讀んでいたゞいたら、さぞ功德があるに違ひない。」と思つたので、そのことを頼みに行きました。

忠圓阿闍梨は、さういふ可哀さうな少年のためなら是非お

「船頭さん、向ふ岸で大勢人が集つてお念佛を唱へてゐるが、あれは何ですか。」と、ききました。

「あれですか。あれは大念佛といつて、向ふ岸の村の人が集つて、供養をしてゐるのです。」

「誰の供養をしてゐるのですか。」

「さア、それについて可哀さうな話があるのです。何でも、去年の三月十五日で丁度今日に當りますが、都の方から人買ひの男が、可愛い男の子をつれて通りかゝつたが、なれない旅のつかれであつたか、ひどい病氣になつて一と足も歩くことが出来なくなつてこの河岸で倒れたのです。ところがなさを知らない者もあればあるもので、人買ひの男はその子をものまゝ捨て、何處かへ行つてしまつたのです。やがて村の人が介抱した時には、もう遅くてそのまゝたうとう死んでしまひました。本當に可哀さうな話ではありませんか。あなた方も向ふ岸へついたら、お念佛を唱へておやりなさい。いゝ功德になりますよ。」

お頭がかういつて話した時、みんなは大變感動したやうでしたが、その時、一心に聞いてゐた例の氣狂ひのやうな女が

念佛を唱へて供養してやりませうといはれたので、村の人達は喜びました。そこで、早速みんなが集つて梅若丸の塚をかこんで輪になつて鉦鼓をたゞきながらお念佛を唱へました。その真中には忠圓阿闍梨が塚の上に坐つて、鉦をたゞいて音頭をとつてゐました。

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛々々々々々々」

年寄りや若い者や男や女の聲のまじつたお念佛の聲は遠くの方まで響きました。

丁度その時でした。川向ふの岸から一艘の渡し船が出ました。その船にはお武士や商人やお百姓やいろ／＼の人達が乗つてゐましたが、その中に一人の女の人が隅の方に小さくなつて淋しさに乗つてゐました。その人は三十あまりに見えますが、土地の人ではなく、美しい姿形から考へると都のひとに違ひないと思はれましたが、可哀さうに髪を振り亂して瘦せて蒼ざめた顔をしてゐるのを見ると、正氣の人ではなく、氣でも狂つてゐる人のやうでした。

女の人は川を見ながら考へ込んでゐます。

船が川の真中ごろに來た時、一人の商人が、

ふいに聲をたて、泣出しました。傍にゐた人が、「どうなされた。」といつて聞いても女はたゞ夢中で泣いてゐます。

間もなく船が向岸についたので、船の人達はみんな立上つて行つてしまひましたが、ただ一人氣狂ひの女だけはまた夢中で泣いてゐて、動かうともしません。船頭は困つて、

「船がついたのにどうして降りないのですか。さア／＼早く岸へ上つて下さい。今の子供の話がそんなに可哀さうでしたか。」といつて、せき立てました。

その時、氣狂ひのやうな女はやうやく顔をあけて、

「船頭さん、今のお話はいつのことでした。」と、ききました。

「それはさつきも話した通り、去年の今日のことです。」

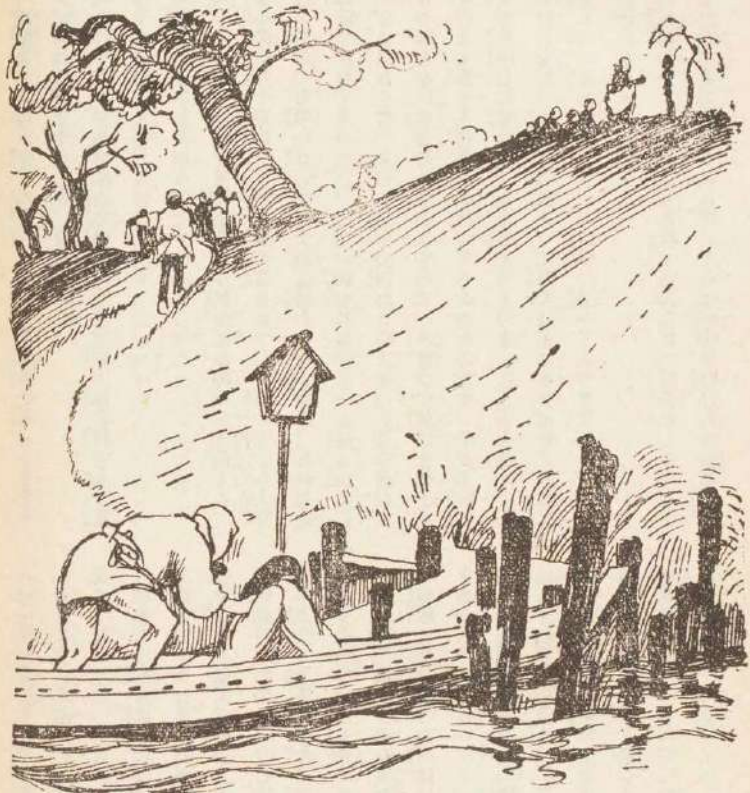
「さうして、その子の年ごろはいくつ位でしたか。」

「何でも十二三位だつたと聞いてゐます。」

「その子の名は何と申しましたか。」

「さア、何といつたつげな。さう／＼、梅若丸とかいつてゐました。」





船頭がさういつた時、氣狂ひのやうな女はわアツと聲を立て、泣倒れました。この氣狂ひのやうな女といふのは梅若丸のお母様の花御前であつたのです。

花御前は梅若丸が月林寺を逃出したまゝ、行方がわからなくなつてしまつたので、大勢の人をやつて、比叡山の谷間やそのあたりの村里まで残らず探し廻つたのですが、たうとう見出すことが出来ませんでした。ところが、しばらくたつて、梅若丸が大津の里で人買ひにさらはれて東國の方へ行つたといふことを聞込んだので、花御前はたうとう氣狂ひのやうになつてしまつたのです。それから間もなく北白河の家をぬけだし、たつた一人で、ふら／＼と梅若

丸の行方をたづねながら東國の方へ向つて隅田川まで來たのです。

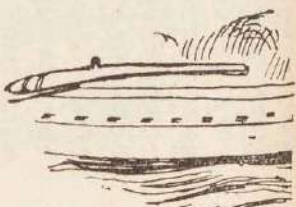
花御前が泣きながら自分はその人買ひにさらはれた子供の母親であると話した時、船頭はびつくりして、氣の毒さうにいひました。

「今となつてはいくら歎いても甲斐がありませんから、あなたもそこへ行つてお念佛を唱へてゐらっしゃい。お母さんが唱へるお念佛だつたらどれ程佛が喜ぶかわかりません」そこで船頭は、花御前をいたはりながら大念佛をやつてゐる處へつれて行きました。

梅若丸の母親がはる／＼たづねて來たのを知つた時、村の人達はどんなに驚いたでせう。花御前の可哀さうな姿を見て泣いてゐる人もありました。

「さア／＼、こゝに鉦鼓があるから、これを鳴してお念佛を唱へてあげなさい。われ／＼が百萬遍となへるよりも母親が一度唱へた方が功德が多い。」さういつて花御前の手に鉦鼓を渡したのは、例の親切なお爺さんでした。花御前は家の青草の上に坐つて、泣きながら、

「南無……阿彌……陀佛……」と唱へました。それを三度まで唱へた時、「おや！ 塚の中でお念佛の聲がします。」と花



御前がいつたので、みんなは不思議に思つて耳をすましますと、なる程たしかに南無阿彌陀佛と唱へてゐる細い聲がしてゐます。

「お、たしかに唱へてゐる、唱へてゐる。」

と、皆なが不思議がつて叫びますと、忠國阿闍梨が、

「あ、これで死者も成佛したので一年振に母親にあつて、母親の口からお念佛を唱へて貰ふ事が出来たのもう思ひ残すことがなく、安心して佛になることが出来たのです。」さういつて阿闍梨は「南無阿彌陀佛」と三度唱へられました。

花御前は村人が歸つてしまつた後も、塚のところから離れないで、その晩は夜半までお念佛をとなへて居りましたが、その翌日は忠國阿闍梨のところへ行つて尼さんになつて、梅若丸の後世をともらひたいとねがひました。そこで阿闍梨から妙龜尼といふ名をもらつて、たうとう尼さんになりましたが、其後間もなく池に身を投げて死んで了つたといふことです。もう生きてゐる望もなくなつたのでありませう。(終)





### 孝ちゃんのお祈り

石井香夢

それは恰度、孝ちゃんが七ツの秋ごろでした。

そのお母さんといふ人は生れつき弱い方でもなかつたのですが、この孝ちゃんを生み落してから後は、兎角からだがすぐれないので、いつも青い顔をして家にばかりひっこんでゐました。

それでも孝ちゃんひとりには、どんなに加減のわるい時でも笑ひ顔を見せて、お小言一ツいふでもなく、明けても

一人、静がつて飛ぶ赤蜻蛉を捉まへようと、草叢の上をあららこちらと走りまはつてゐるのでした。それを、眼んだ左の眼で見つけると、

「孝ちゃん、赤とんぼを捕ると、母さんのやうにお眼がわるくなりますよ。」と、かう慌て加減に止めたのですが、かしい孝ちゃんはすぐ感づいてそれから後は飛んでゐる蜻蛉を見てもさもおそろしさうにうなだれて、悲しげに肩のあたりを曇らせるほどでありました。

それだけに、またお母さんも知らせるのではなかつたに、氣に病んで、次第に左の眼もおほろに茫と見えなくなつて、今にも双方の眼が潰れてしまひさうになつたのです。孝ちゃんももうゐても立つてもゐられません。どうかして片眼だけでも残したい一心で、ふと思ひついたのがお薬師さまにお祈りをするのでした。

暮れても立派に成人するのが待遠しいのでした。そんな風に、まるで鉛をしゃぶるやうに、可愛いがつて下さることが、こどもながらも小さい胸にしみこんできて、お母さんに心配をかけてはならないと、考へるやうになりました。

それに、孝ちゃんがまだ赤ん坊の時分に、お父さんはもうあの世へ行つてしまつて、今ではお母さんと二人きり、寂しい暮しを立ててゐました。そこで、學校へ行つても、妙に氣遣れがして、家に戻つても戸外へは出ないでいつもお母さんのお傍に坐つてお練習を聴んでゐたのです。近所のこどもが集つて、わいわい騒いで遊んでゐる聲を聴くと流石にひとりほつちなのが悲しくなりました。が、そんな時にも眼を細くしてこくく嬉しさうに笑つてゐるお母さんの顔を見ると、俄に氣を取直し、わざと大きな聲を張り上げて、習



この薬師様のお寺は、隣村へゆく路にある大きな山の麓にありました。そこまでは、ちよつと小一里もあつて、毎日お祈りに通ふには、とても子供の足では堪りません。しかしお母さん想ひの孝ちゃんは、どんなことがあつても學校のかへりには、かかさず毎日毎日お祈りに行つてゐました。そして、一日も速く全快するやうにと、可愛い手を合せて、小さい御堂の前に頼つ

つた唱歌を唄ひ出すのでした。

ひいやり、冷たい秋風が立ち初めたころ、孝ちゃんにとつて想ひもかけない、おそろしい不幸なことが降つて涌きました。それはお母さんが永い病氣のせいでもあるのか、右の眼が急に見えなくなつて、それがまた左の眼にも傳染りさうな醫極になつてきたのです。はじめ、お母さんはよけいな心配をさせまいと思つて、孝ちゃんにはわざと秘してゐたのですけれど。――

ある夕方、お母さんはちと氣分がいいので、夕餉のお仕度にかかつてゐましたが、ふとお砂嚙やお醬油の残り少なになつてゐるのに心づいて、孝ちゃんにお使ひを頼まうと思つて捜しましたが見つかりません。

これは變だとはおもひながら、だるい身體を柱や壁にすがつて、やつとのことゝ戸外に出て見ると、黄金色の夕日を一杯身にあびて、孝ちゃんはたつたのでしたが、どういふものかちつとも佛様はお聞き人れになりませんでした。

今日こそはと、三七、廿一日の満願に當る夕方、孝ちゃんは學校が退けると、すぐに路を急いでお寺に参りました。さうして地面に頭をすりつけて、「どうぞ、佛さま、私の命にかへてお願ひします。お母さんの眼をはやくもとに癒して下さい。」

と、かう涙に聲をくもらせて、一心不乱におなじことを繰かへし／＼祈つてゐました。

すると、その耳もとで、孝ちゃんの名を呼ぶ者があるではありませんか。はッと思つて、顔を上げて見ると、あたりは夜中のやうにまつ暗で、何一つ見當るものもないのです。はてな――と不思議がつて、しきりに胸を撫でながら、慌てる心を落つかせるやうにしてゐる時に、また名を呼ぶ聲がするの



で、こんどは頭から冷水をかぶせられたやうに驚いて、がばと立ち上りますと、眼の先へ、一人の見馴れない老人が立つてゐました。

「吃驚することは無い、わしはこの寺の佛だ。お前の孝心に感じたので、今お母さんの眼を癒す法を教へてあげよう。」

と仰有いました。孝ちゃんはやんは、嬉しさのあまりにほんやりとして、木彫の面をかぶつたやうな佛様の顔にうつとり見惚れてゐるのです。佛様は静かな口調で

「うつかりして聴き損つてはいけません。二度とは云はないからよくお聴き」と、仰有つて、穴の開いた一厘錢をだれにも知らさないやうに、往來へ投けておいたら、それから三七廿一日の間に眼が開くとお告げになりました。



た。そして孝ちゃんが、何か云はうとする、忽ち白い煙が騰々と起つて、掻き消すやうになくなつてしまつたのです。

その時、孝ちゃんはふと正氣に戻つて、あたりを見廻しました。やつぱり

温つほい雑草が思ふさま伸びしけたさびしい荒寺の境内でしたから、ほつと一息ついて、あゝ嬉しいと悦び勇んで、一倍の元氣で歸つて行きました。そのうちに日が暮れて来て、自分の家の小さな燈火が見え出した時、孝ちゃん

やんはびたりと立止りました。それはさつきお樂師さまから教へられたことを思ひ出して、ここならよい、だれも見てゐるものがないからと考へついたからでした。早速ふところを探ると、お賽錢の残りの一厘錢が手に觸つたので、それを見ないやうに横を向いて、あたりをちつと窺つて、そつと地面に落しました。

その、チャリン—といふ音を聽くと、もう驅け出して、まるで怖い獸物に蹴けられたやうに、後をふりかへるでもなく、そのまま家の中へかけこみました。さうしてお母さんの顔を一目見ると、もう眼が開いたもののやうに悦んで、「お母さん—」と云ふなり、その膝へしがみついて、思ふ存分に嬉し泣きました。

お母さんの眼は、孝ちゃんの孝心でもとのやうに二ツとも開いたといふこととであります。(なほり)



### 夢の國 霜田史光

氣がついて見るともう朝で、久子はいつもの通り寢床の中に眼が覺めてゐました。然し、不思議なことに手に妙な形の眼鏡を持つてゐたこととです。

「おや、今のは、ではたゞの夢なのか知ら。」と久子は思つても見ましたけれど、何んだかいつも見る夢とはまるつきり違つてゐるやうです。それはあまりにはつきりとよく覺えてゐるのですから、間違なく手に握られてゐるのですから、どうしても本當に夢の國へ遊びに行つたかと思へません。

久子は朝飯のときも黙つてゐました。それは後でそつとこの眼鏡でお父さんやお母さんを覗いて見よつと思つてゐたからです。

「それよりも先に、庫屋の小父さんと、トミちゃんを覗いて見ようかしら。」と久子は考へました。するともうそれが一



番面白いやうに思はれましたので、早速お隣へ行きました。するとトミちゃんも急いで家の中から出て来て、

「久子さん、夢の國へ行かれて？」と聞きました。久子は「ええ。でも本當だつたか嘘だつたかよくわからないの」と、まだ少しは疑つてゐるらしく云ひました。トミちゃんは直ぐ久子の持つてゐた眼鏡を見つけて、それはどうしたのかと訊ねました。久子は夢の國のことをすっかり話しました。

殊に赤い舟のことや、鏡の室のことや、光の室のことなどを話した時は、トミちゃんは大層面白がり、そして又羨ましがりました。

「ね、トミちゃん、この眼鏡であなたのお父さんを覗いて見ませう。」久子がかう云ひますと、トミちゃんは小踊りして喜んで云ひました。

「それがいいわ、そして、お母さんも、それからお隣の小父さんも。」

やがて二人はトミちゃんのお父さんのある部屋へ、そつと忍んで行きました。そして久子は、障子の破れた隙間から、その眼鏡で覗いて見ました。すると、久子は本當に驚きまし



ものねえ。」トミちゃんは久子の云ふ通りに思ひました。

二人は早速久子の家へゆきました。その時お父さんは實驗室室へ這入つて、赤い水や青い水を硝子の管へ入れて見てゐました。久子は例の不思議な大きな眼鏡を出してお父さんを覗いて見ました。すると、久子は思はずあつ！と云つて驚いてしまひました。だつて、お父さんの顔は遠くの方にある人のやうに、小さくく映つてゐてよく見ないと、何處にゐるか判らない位でした。

た。俵屋の小父さんは、部屋一杯の大きさに見えるのです。そして如何にも福々しさうに笑つてゐます。久子は自分の好きな小父さんのことですから、大きく映つたので嬉しくなりました。けれども久子は、覗いて見る迄は大抵小さく映るだらうと思つてゐたのです。何故といふに、俵屋の小父さんは學問もなければ身分も悪く、そしてさう働巧さうでもなかつたからです。

トミちゃんは、その眼鏡を久子から借りて見て、大層喜びました。

「私のお父さんは偉い人なんだわ。」とトミちゃんは得意さうに云ひました。かうなると久子は早く家へ歸つて、自分のお父さんを覗いて見たくなりました。俵屋の小父さんでさへ、あの位に大きく映るのだから、家のお父さんなどは、どんなに大きく映るだらうと思ひました。

「家のお父さんならもつ／＼大きく映つて、きつと顔だけ位しか見えないわ。」

久子はトミちゃんに向つて少し威張つて見せました。

「さうかも知れないわ、だつてあなたのお父さんは博士です

「まあ……。」と久子は急に言葉が出なくなりました。トミちゃんはすぐ久子から眼鏡を借りて見ましたが、矢つ張り、「まあ……。」と云つて驚いてしまひました。二人はあんまり意外なので豆罐砲に打たれた鳩のやうに、眼をキョト／＼してゐます。すると博士のお父さんは近よつて来て、

「お前達は何をそんなにほんやりしてゐるのだ。」と申しました。久子はもうあまりの悲しさにほろ／＼涙を出しながら、やつと、夢の國のことからお土産に貰つた眼鏡のこと、それから俵屋の小父さんを覗いて見たら、大きく映つたことなどを、涙でシャツクリ／＼しながら云ひました。

すると久子のお父さんは大層怒つて、

「馬鹿！ そんなものは皆んな嘘だ。お前は何かの魔法にかかつたのだ。」と云つて久子の手から、不思議な眼鏡を取り上げてしまひました。そして博士のお父さんは久子達をその眼鏡で覗いて見て、

「ちつとも不思議な眼鏡でも何んでもありアしない。大きくも小さくも映らないではないか。」と云つて、その眼鏡を火のドン／＼燃えてゐるストーヴの中へ投げ込んで了ひました。



すると室中が眞赤になつたと思ふと、それも消えてしまつて、眼鏡はたうとう燃えてなくなつてしまひました。

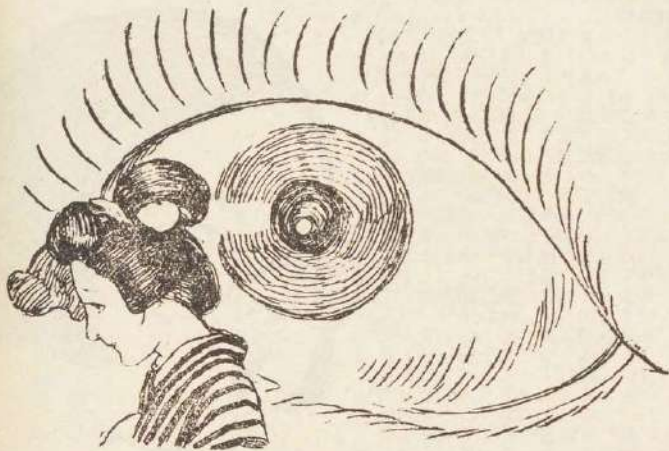
その後久子は夢の國のことや、眼鏡のことを話し出すとお父さんに叱られました。

久子にはどうしてお父さんが叱るのだからその理由は解りませんでした。が、獨りではよく思ひ出しました。

久子はだん／＼大きくなりました。そして夢の國のことも、不思議な眼鏡のことも、自然と思ひ出すこともなくなりました。

久子はすつかり大人となつてお母さまになりました。或日、自分の子供の可愛らしい眼を見ましたら、ふつと遠い／＼昔のことを思ひ出しました。

その時久子はあの夢の國の湖が、何んとなく眼の形に似てゐたことを思ひ出しました。あのまつ毛が黒い竹の林で、白眼のところは湖で、瞳が島で、そしてわたしはあそこを赤い舟に乗つて黄金の帆をあけて走つて行つた……と思ひ出してゐると、お母さまになつてゐた久子は、樂しかつたあの時のことが思ひ出されて、何んとなく大人になつたことがつまらないやうな氣がしました。(なほり)



世界名作童話物語

### 家なき子(つぐき)

#### 三宅房子

#### 初舞臺

親方のピタリスお爺さんは、私をお金で買ひましたが、決して悪い人ではありませんで

した。彼はその事が好きに解りました。山道を歩いてゐた時、ピタリスお爺さんは私にかういひました。

「私にはお前の心持がよくわかる。泣きたいだけ泣くがよい。だけれど、お前が私のところへ来たのはよい事だとは思はないかい。その譯は、お前には、本當の父さんや母さんがないのだ。だから、あの養親の母さんがいくらお前に親切にしてくれたつて、あの人の御亭主がお前を家に置かないといへばそれまでの事だ。それにあの御亭主も、も／＼から悪い人ではないのだから、片輪になつたので、お前を家に置いては第一自分達が食べていけないと思つたのだらうよ。それにいつて、これから先きお前が是非とも心に覺えて置かなければならないことが一つある。それは、世の中は丁度戦争のやうなもので、誰だつて自分の思ひ通りに行かないものだといふ事だよ。」

お爺さんがかういつて話してくれた時、私は成る程と思ひました。しかし、それにして

私の一等好きだつたお爺さんとうとう二度とこの世では逢へないかと思ふと、悲しくつて堪りませんでした。

ピタリスお爺さんは、もう一度私にいひました。「私が今いつたことをしつかりと考へて御置よ。お前は私と一しよにぬれば決して不仕合せなことはない。孤兒院なんぞへやられるよりか、どんなに仕合せだか解らないよ。だからお前は決して逃出さうなんて考へてはいけない。もしそんな事をしてごらん、あの通り廣い野原だから、私の犬がすぐとお前をつかまへてしまふ。さういつてお爺さんは目の前の廣々とした荒野を指さしました。しかし、私にはもう逃出さうなんて考へはありませんでした。逃げたところで何處へも行くところがありません。お爺さんはお猿のジョーリーカトルを肩にのせて、せつせと歩いて行きました。犬たちはその後からついて行きます。お爺さんも犬も、少しも疲れた様子が見えませんが、



「お前が草臥れたのは木の靴をばいてあるせいでよ。ちぎりにユツセルといふ町へつくからさうしたら革の靴を買ってやらうね。」

「お爺さんばかりいつて私に元氣をつけてくれました。私は草の靴がほしかったのです。村長さんの息子も旗籠屋の息子も革の靴を持つてゐて、日曜といふとお寺へ来て石の廊下を這るやうに駆け廻つてゐたのです。私はそれを見るたびに、どんなにほしかったでせう。」

「ユツセルの町まではまだ遠いんでせうか。」  
「はつは、たうとう本音を出したね。靴がほしいのかね。よし／＼約束をするよ。大きな釘を底に打つたのを買つてやるつてね。それから序にピロッドのズボンとチョッキと帽子も買つてあげるよ。だからもう三里歩いてくれるだらうね。」

「お爺さんは笑ひながらいひました。私はもう得意でたまりませんでした。草のつてゐる背蓋から一塊のマンを出して、それを四つに千切つたのです。お爺さんはその一と切れを私にくれました。さうして自分もその内の一と切れを食べて、あとはお爺さんと小ひちやく切つて分けてやつてゐました。」

私は草臥れ切つてゐました。足は木靴ですれたのでちく／＼痛みます。着物はぐつちよりですから冷くつて／＼身體がふるへて、夜中になつても眠れません。

「歯をがた／＼いばせてゐるね。お前寒いのかい。」と、お爺さんがききました。「え、少し。」すると、お爺さんは背蓋をあげました。「私は着物もたんとはないが、こゝに乾いたシヤツとチョッキがあるから、それを着て草の中でお寝。ちぎりに暖かになるよ。」



靴をばくといふことだけでも大した事なのに底に釘が打つてあるのを買つてくれるといふのです。私はもう悲しいことも忘れてしまひました。釘を打つた靴にピロッドのズボンにチョッキに帽子、まア母さんが私を見たらどんなに喜ぶでせう。どんなに得意になるでせう。けれども、まだ三里歩かなければならぬ。いなんてどうしたらいいでせう。

その時、霧々と晴れてゐた雲がいつの間にか曇つてしまつて、雨がしよ／＼／＼落ちて来ました。お爺さんは羊の皮ですつぽり身をつんでゐるので、雨も浸りませんでした。お爺のジョーリーカールもその中に逃げ込んだので平氣でしたが、私と犬たちは何にもかぶるものがないので、骨まで雨がとほつてしまひました。犬はそれでも時々拳を振り落してゐましたが、私にはそれが出来ません。下着までぐつちよりになつて、骨まで冷くなつてしまつたやうに思ひました。

「少しでも早くこの先の村へ行つて休むことにしよう」とお爺さんはいひました。お爺さんは自分のシヤツとチョッキを私に貸してくれたのです。私はそれを着ました。けれども置きには暖くなりませんから、林草の中でごろ／＼しながら苦しんでゐました。私はこれから先きも、始終かうして暮さなければならぬと思ひました。

それならぬのかと思ふと、悲しくなつてしく／＼泣き出しました。その時です、私の顔にあたまかい息がかまつたやうに思つたので手を伸して見ると、そ

それから漸くにして村へ着きましたが、そこには宿屋が一軒ありません。乞食のやうなお爺さんが、子供とおまけに三匹の犬までつれて、われ鼠の様になつてゐるのです。普通の家では泊めてくれる譯がありません。「家は宿屋ぢやないよ。」

さういつて何處の家でも戸をたて、しまひました。私達は村中の家を一軒々々たのんで歩きましたが、どこでも隔られてしまひました。これからユツセルの町まではまだ二里もあるのです。謀略な上に、雨は冷く身體にします。その時、私は村の母さんの家をどんなに戀しく思つたでせう。

ところが幸なことに、一軒の百姓家で、納屋でもいゝなら泊めてやらうといつてくれました。しかし、寝るだけは寒くてやるが、灯は決してつけてはいけなと、いひ渡されました。

私は雨風をふせぐ家根だけが出来たので夕飯の支度にかゝりました。夕飯といつても御馳走はありません。お爺さんは客中に容食は白犬のカビの、葉いぢでした。カビはつと藪の上を音のしないやうに歩いて来て、私のところへやつて来たのです。カビは私のすぐ傍の林草の上にごろりと寝になりしました。そして、静かに私の手をなめはじめたのです。私はうれしくつて増々喜んでました。私は半分起き上つて、犬の首を兩腕にかまへて、その冷い鼻にキスしました。カビは少し鼻がつまつたやうな聲を立てましたが、ちぎりに前足を私の手にあづけて、おとなしく寝ました。

私は草臥れも恐しみも忘れてしまひました。自分ばもう一人ではないのだと思ひました。私にはお友達が出来たのです。

その翌日は朝早く出發しました。昨日の雨はすつかりはれて、空が青々と輝いてゐました。林の中では小鳥が心地よささうに囀つてゐます。カビは道を歩きながら時々立止つて私の顔を見れば二三度づつ續けざまに吠えます。それは私に「元氣を出せ、しつかり／＼」



といつてあるやうに聞かれました。

「やがて、古いエッセルの町に着いたので、私はそこら歩きまわると見廻しました。私はこれまで自分が育つた村から外へは一歩も出たことがなかったもので、町を見たのは初めてでしたが、しかし、私に一番よく目についたのは町の古い塔でも建物でもなく、それは靴屋の見世でした。」

ふいにお爺さんが、市場の後になつてある一軒の見世へ入つて行きました。その見世の外には古い織物だの、金モールの練のついた服だの、錆びた鍔だのがつるしてありましたが、古物商であるといふことがわかりました。お爺さんはこの見世でこれまでの木靴とくらべると、十倍も重たいやうな革の靴を買つてくれたのです。私はうれしくつて腰り上りました。

そればかりか、お爺さんは水色のピロッドの上着と、毛織のズボンと毛氈の帽子まで買つてくれました。お爺さんは約束したやうの品物をすつかり買つてくれたのです。

それからお爺さんは靴の店へ家來になつて来たばかりなのにお話ごしらへをいひつけられるのだ。丁度そこに芝居につかふテーブルがあるから、すぐと實地のお稽古にかゝらう。」芝居用のテーブルの上にはお皿とコップとナイフが一本と白いテーブル掛けが一枚置いてありました。どういふ風にしてそれを並べるのか私にはさつぱり解らないので、テーブルによりかゝつたまゝボカンと口をあいてゐますと、お爺さんがアハ、と笑出しました。

「あゝ、うまい、本物だ。どうしてどうして素晴らしい出来だ。」

笑ひながらお爺さんがいひました。

「僕はどうしていゝのかわかりません。」

「それだから、そんなに巧く行つただよ。わかると、却つてわざとらしくつて駄目だ。

何でもいゝから、どうやつていゝかわからな

いで困つてゐる時の心持を忘れないやうに

おし。さうすればきつと上出来に行くから。」

かういつてお爺さんは、私に注意をしまし

た。この「ジョーリータールさんの家來」と

町の中の一軒の宿屋に着いたので、私はすぐきれいな着物と着換へました。本當のこと

ないふと、自分ながらなかくきれいになつ

たと思ひました。私の親友のカビもさう思つ

たと思ひ、満足さうに私を見てゐました。

「さア、支度が出来たらいゝ、仕事にかゝ

らう。明日はこの町に市が立つ日だからお

前は切舞臺をつとめるのだよ。」とお爺さん

がいひました。

初舞臺つてどんなことをするのでせう。私

は心配になりましたから、お爺さんにきいて

見ると、それは三匹の犬とそれから猿を相手

に芝居をするのだと教へてくれました。

「でも、僕どうして芝居をするのか知りませ

ん。私はおどろいていひました。

「それだから私が教へようといふのだよ。教

へられなければわかる筈がない。こゝにある犬

や猿たちも一生けんめいに勉強したから覚え

たのだよ。お前もこれからいゝ芝居の役

を覚えるために勉強しなければ駄目だ。兎に

角お稽古にかゝらう。」

いふ芝居は大芝居ではないので、二十分がな

がくばつと過ぎませんから、お爺さんは幾度も

幾度も繰返してお稽古をさせました。

私はお爺さんが辛抱強いのに驚きました。

「これまで村で悪人が動物に仕込んでゐるの

見たのは幾度もありますが、いつもひどく叱

つたり打つたりしますが、このお爺さんは

一度だつて怒つたり叱つたりしません。

「お前は本當に利巧な注意深い子だ。何でも

素直に自分がしなければならぬ仕事を一生

懸命にしなければならぬよ。このことを一

生忘れずに覚えておいてよ。」とお爺さんが

私にいひました。

「お爺さん、あなたはどうして大や猿や私に

對してあんなに我慢づよいのですか。」

私は勇氣を出してきました。私はそのこ

とがきまつたのです。お爺さんはにつこ

りと笑ひました。

「お前は百姓達が生物を亂暴にあつかつて、

いふことをきかないと棒でなぐつたりしてゐ

るところばかり見て来たのだらう。けれども

さういつた後でお爺さんは又いひました。

「これから私達のやる仕事といふのは「ジョー

リータールさんの家來」といふので、それ

はかういふ筋だ。ジョーリータールさんはこ

れまで一人の家來をつかつてゐたが、その家

來の名はカビといつて大變によく仕へてゐた

が今度主人から暇をとる事になつたので、代

りの家來を見つける約束をしたのだ。ところが

その後に來る家來といふのが、犬ではなく

て子供なのだ。ルミといふ名の子供なんだ。」

「さア、それやア僕の名と同じだな。」

「それに違ひないよ。その家來がお前なんだ

「でも、お爺には家來なんかいでせう。」

「そこがお芝居なんだよ。お前は田舎から飛

出して來たばかりなので、お前の御主人にな

る人はお前を阿呆だと思つてしまふのだ。」

「僕そんな役いやす。」

「ナニ、人が笑ひまへすればいゝんだよ。そ

それは大變な御勤ひなんだよ。なぐつては駄

目だ。やさしくしてやると、大抵よく行く。

だから私は動物に對してはやさしくしてやる

のだ。無難と打つて彼等はおどろくするばか

りで、智慧も鈍つてしまふ。他人を教へるこ

とは自分教へることだとよく人がいふが、

それは全く本當だよ。私が動物達に教へるの

は、つまり私が動物たちから教へて貰ふこ

とになるのだ。」

私はお爺さんの話にすつかり感心してしま

ひました。しかし、明日はいゝ、自分が大

ぜいの人の前に立つて芝居をするかと思ふと

胸がどきどきしました。

三

翌日になりました。私は芝居をする筈の市

場のところまで行列なつて行つたのです

お爺さんが眞先き立つて行きました。お爺

さんは首を直すやうに立つて、胸につき出して、面

白さうに笛を吹きながら手と足で拍子をとつ

て歩いて行きます。後からカビが行きます。

その脊中にはお爺のジョーリータールがイザ



リスの大將の軍服を着て、鳥の羽をつけた兜をかぶつて乗つてゐます。セルビノとドルスの二匹の犬は丁度いゝ加減に間を置いてその後から行きます。私は行列の一ばんの最後で

この行列は人目によくつきましましたが、しかし、何よりも人の注意をひいたのはお爺さんの吹く笛の音でした。みんなその聲を聞いて家の中から駆け出して来ました。私達が廣場についた時には、もう眞黒な人ばかりでした。番組の第一番は犬の藝當でした。しかし、私はその時、犬がどんな藝當をしたのかさっぱり知りませんでした。

私は心配で／＼たまらなくなつて、自分の役のおまらひをすることにばかり氣をとられてゐたからです。一番目の藝當が終わると、カビは筒の間にナリキのお盆をくはへてお春様達の間を廻つて歩きました。さうして、お春様達の中にお金を入れない者があると、その人のポケットへ二本の煎豆をかけて、三度リン／＼と吠



高きうに吠つて、鼻に汗粒を顔にたばせたくれることになりました。大將は朝飯の交度の出来てゐるテーブルを指して、私に坐れと合図をしました。

私は小さなテーブルに腰をかけた。テーブルの上にはいろいろの食器が置いてあつて、ナプキンも置いてあります。このナプキンを私はどうしていいかわからないでゐると家來のカビが手まねでいろいろと教へてくれます。

そこで、私がわかつた積りでナプキンで鼻をかんでしまふのです。大將は腹をか／＼と笑ひました。カビは私の馬鹿さ加減にあきれて、ひよいと一つテングア返して打ちます。

私はやりそくなつた事がわかつたので、いろいろ考へた末、今度はそのナプキンを巻いて首飾りにしました。大將はもつと笑ひました。カビはまたひよいと一つテングア返して打ちました。

たうとう大將は我慢が出来なくなりました

えて、顔くた／＼ののです。見てゐる人はうれしがつて鬨の聲をあげました。

流石のけちん坊もだまつてゐられなくなつて、銅貨を一枚お盆の中へ投込みます。お爺さんはその間は一言も口をきかないで、たゞカビのお盆を見送りながら面白さうにパイオリンを弾いてゐます。

やがて、カビはお盆を一ぱいお盆に入れて歸つて来ます。こゝで意々お芝居が始まることになりました。お爺さんは先づ一と酒りの口上を述べました。それが終ると、勇しい戦争の曲を弾きました。

すると、大將の軍服を着たお爺のジョーリーがの／＼出て行きます。この大將は、印度の戦争で度々手柄をたためたので出世して、カビといふ犬の家來までつかつて大變な資澤をしてゐるのです。

ジョーリーと大將は家來の來るのを待つ間、お爺さんをか／＼とあつち／＼と大將のナプキンを扱ふことの上手なこと。いかにも上品に、ナプキンを服のボタンに穴へ押し込んで、それから膝の上にひろげました。

それからパンを千切つて、お酒のみました。その巧さつたらありません。そして、いよいよ食事が終ると楊枝を持つて来いといひつけました。

大將服のお爺が大きな齒をむき出して、楊枝をせつせと使つてゐるのを見た時、割れるばかりの大喝采が起りました。芝居はこゝでおしまひとなりました。

「何て馬鹿な家來だらう。しかし、何て賢い猿だらう。」お爺たちはさういひながら歸つて行きました。お爺さんば私が喜劇役者になつたといつてほめてくれました。私は得意でたまりませんでした。(つゞく)

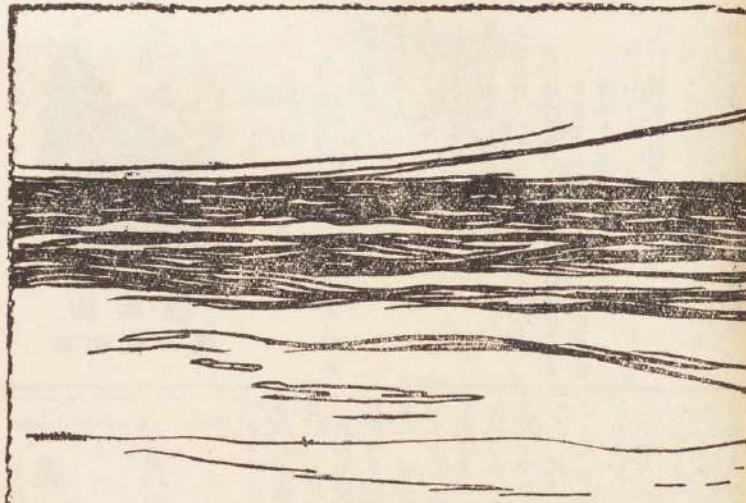
歩き廻つてゐます。しかし、なか／＼來ないので、人間が煩雜を起す時のやうに目玉をくり／＼させて、唇をかんだり、ちだんだを踏んだりしてぢれてゐます。

三度目にぢれた時に私がカビにつられて出るこゝになつてゐるので、私は舞臺へ出て行きました。カビは私を大將にひき合せました。

すると、大將は私を見て、何だこれがわざわざつれて來た家來なのかとがっかりした様子をして、両手をあげました。それからさも不機嫌さうに肩をそびやかして私の周圍を廻つて歩きました。その時のお爺の様子如何にもをかしいので、みんなどつと吹き出してしまひました。

私が阿呆だといふことが見物人によくわかりました。お爺のすることは何もかも賢いのでした。いゝ／＼と私を試験して見ますが、あんまり馬鹿なのでジョーリーと大將はたうとう可





外國でこの世を去つた  
お父さんやお母さんが  
人のいふあの幽霊船に乗つて  
いつかきつと歸つて来る様な  
気がしてならないのです



いつものやうに  
孤しい岸邊に立つて  
海の青さに見惚れてをります

## 赤い帆の船

多田 不二

鱗のやうな金波銀波は  
見涯もつかず  
遠い遠い空まで光り輝いてゐます  
子供の眼には  
あの真蒼い水の上はるかに  
赤い帆の小船が  
こつちへ走つてくる様に見えるのです





幼年詩  
若山牧水選

雪の日(賞)

長野縣上伊那郡  
東春近校尋三 藤原あやめ

雪の中を  
だれか一人  
さびしく行く  
よろけては行く  
雪がしやうじのすきから  
ふつこむ。

雪の中を歩く人、それを障子のすきまから見てゐる人、さびしい雪の日の心持がよく出てゐます。(牧水)

雪の中の木(賞)

山梨縣小淵澤  
小學校尋六 進藤いよの

おまへは雪がふりかかつてつめたいら

きものをかせいか  
かせてもよいが  
えだばかりできれないら  
群、なんといふ簡單でそして心持の深い歌  
でせう。(牧水)

今朝のほこり(賞)

名古屋市白  
壁校尋三 吉本 辨 治

今朝は暖いお天気が  
がらすしやうじを越えて  
僕のべんきやうばを  
ほかく、お日様が照した  
ほこりがうよ／＼見えて来た  
群、ほんたうの景色をよく正直にうたひま  
した。(牧水)

チャボ

東京東中野桃岡  
第二小學校尋三 長尾 その子

チャボが  
たまごを  
うみました  
からだか  
小さい  
たまごも

綴方

編輯 郷 選

馬の足がをれた(賞)

長野縣川  
邊校尋六 竹 内 登

「どーん」と大きな音がしたので下駄  
をはいて庭に出て見た。一臺の自動車  
が砂ほこりにつまれてよく見えぬ。私  
は自動車の傍へ飛んで行つて見た。自動  
車の後ろには騎兵さんが馬の傍に立つて  
ゐる。馬の後足は折れて、ふらく／＼にな  
つてゐた。騎兵さんは馬のくらをおろし  
て畑のすみにおいた。馬を電車道へ連れ  
ていつた。馬の足からは血がとめどなく  
出た。幸ひに其の日は電車がとらなな  
つた。馬はたいそういたがつて「ひん  
ひん」とないてゐる。すこしたつた。目  
がねをかけた騎兵さんといま一人騎兵さ  
んが後ろから来た。私たちが見てゐる傍  
へくると馬から降りた。そして馬を電柱  
へしばりつけておいて、後足の折れた馬  
を見てゐたが、すこしたつと傍にあつた

わらんぎよからわらをぬいてはひろけ  
て、其の上へ足の折れた馬をおいた。私  
が傍で、見てゐると、目がねをかけた騎  
兵さんが「この馬をおさへてゐてくれや」と  
いつて私にかはでこしらへた手づなを  
よこした。まつくろい馬であつた。私が  
手づなをおさめてゐると馬があるき出し  
た。私が「シツ／＼」といつたが馬公平  
氣だ。すると新道の人が「さ、さ」を五六本  
おしよつて来てくれたらう／＼かなくなつ  
た。新道の人に手づなをおさめさせてお  
いて、私もさ／＼をとつて来てくれた。目  
がねをかけた騎兵さんが私のもつてゐる  
「さ、さ」とつて足をおつた馬にくれた。  
すこしたつと産川の方から自轉車にのつ  
て来た人(その人は乳屋の人で、牛のお  
醫者さまだ)が馬にほつたいをしてやつ  
た。産川の方から馬に乗つた一人の將校  
が砂をけたて、やつて来た。道にゐた人  
はさつと左右にわかれた。將校は馬から  
おりて来て足を折つた馬を見てゐたが、  
騎兵さんに「現場はどこだ」と聞いた。  
騎兵さんは將校といつしよにさつき馬の  
足を折つた所へいつた。すこしの間話を

自由燕(子雉の製例)(賞)

水戸市上市南三の丸

海老澤 秀 夫



してゐたがまた歸へつて来た。騎兵さん  
はいくども「あゝ」と悲しさうにため  
いきをついた。馬はみつ角の内屋へ賣ら  
れた。すこしたつと内屋の人が二人きて  
馬をつれていつた。騎兵さんは馬に乗つ  
て一匹の馬を連れて先へ出かけた。  
目がねをかけた騎兵さんは後から行つ  
た。先へ出かけた騎兵さんは新らしく出  
きた家の前へ行くと、私たちの方をむい  
て「もつ／＼まにのるのはよく／＼いやに  
なつた。」と言つて行つた。

可愛いさうに

あつた時(賞)

愛媛縣越智郡  
富田校尋五 日 淺 文 代

此の間冬休みになつて、始めの日のこ  
とでした。皆ながこはんをすますと姉さ  
んが私に「こまにこはんをやれ」と言つ  
て裏口の戸をあけて家へ入れてやりまし  
た。けれども私はそれを知らなかつたの  
でやりませんでした。

するとこまは庭へ来て、私を見て居ま  
したがそろ／＼おもてへ出て行かうとし  
ました。私はふと氣が附いてこはんをや  
らうと思つて「こま／＼」と言つて呼び



小さい。

トウフヤ

東京東中野モモ  
ジノ小ガク等一  
長尾港太郎

イツモ十ジゴロニ

トウフヤガ

トウフトウフト

ウリニクル

リボン

東京府東中  
野一六七五  
長尾アキコ  
(六歳)

デンシヤノナカデ

リボンヲオトシタ

デンシヤノナカガ

コンデキタ。

評、あなたがた御兄弟の歌のうまいのは  
まったくかんしんします、みんな上手  
だ。(牧水)

さむしい

山梨縣小淵澤  
小學校尋六  
伊藤文子

山に來たら  
さむい風がふいてゐた

花も咲いてはゐないし  
たゞさむしい木が  
二三本風に吹かれて  
ゆれてゐた

重い車

群馬縣足利伊  
勢町福地方  
福地茂吉

ゴロゴロ どつこい

ゴロゴロ どつこい

クルクル まわる

車は重い

山坂登る木こりの爺さん

つけた重荷は

杉 三本

登りきつたら

煙草一ぷく お吸い

みそさゞえ

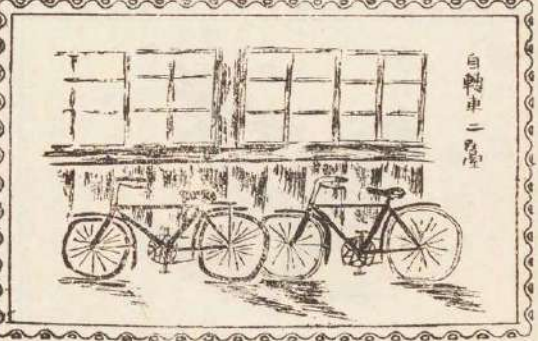
福島縣安達郡二  
本松第一校尋五  
佐藤ハツ

杉垣のみそさゞえ

キチキチキチ

はらがへつたかえみそさゞえ

キチキチキチ



自由畫「自転車」(賞)  
福井縣大飯郡高濱校高二

一 潮三郎

ましたが、犬のことですから聞えなかつたのか其のまゝ表へ出て行きました。少しするとお母さんが「あれ殺されん」と

「犬をかふとおれがつかうはい」と言つてためいきをつきながら笑ひもしないで歸りました。私もそんなに言ふとよけいになさしくて、おつかけて行かうかと思ふ程でした。仕方なしにうちへ歸りまわかれたり誰かなかのよい友達にでもわかれたやうな気がして、さむしくて、なりました。

弟を學校から送つて

和歌山縣日高郡  
切目村校尋六  
芝 八重子



賞「人」(賞)

賞「人」(賞)  
東京代橋校三尋  
久三保がべんたうを  
田食べ終つた時  
公はまだ一年生  
の歸る時分  
した。大勢の

言ふ呼び聲がしました。私は又、喜田村のたはちさんが殺すまねをしたのかと思ひながら、ごはんのしまつをして居りました。けれどもあまりさわがしいので表へ出て見ると、お母さんは、顔色を青くして、  
「こまは殺されたぞ」と言ひました。私はびつくりして「あゝ」と言つたばかり、聲が出ませんでした。やまがた尾のをばさんち色をまつさをにしていたのはなをはきれ、かたしはどこへとんだのがなくしてこけこけ「こまが殺されるぞん」と言つて走つて來ました。けれども、もう其の時はこまはまるかごの中へは入つてかついで行かれました。私はうちへ歸つてよくよく考へて見ると、かはいさうで、おつかけて行つてしがいをもらつて來うと思ふ程にかはいさうになりました。目からは涙の様な涙がころけ出ました。仕方なしに私は裏へ出て居るとねえさんが来て、「おしい事をした」と言つてないで居ました。私は裏の道の所へ行つて後を見て居ました。するとおばさんは、かたあし下駄をはいて「あゝあ



今日はおうちの餅つきだ  
音を聞いたかみそきえ  
キチキチキチ

くじ

茨城縣鹿野郡 横瀬 秋男  
大寶校尋四  
きのふかしやのおばさんに  
だまされくじをひかされた

学校に行くとき

福島縣安達郡 菅野 トキ  
下第一校尋六  
あゝあれは友達  
私も一しよに  
行きませう

汽車

名古屋市曙橋 猪飼 かね  
小学校尋三  
裏のえんさきから  
見える汽車は  
もうするぶん  
行つたのね

どじょうの子

長野縣上伊那郡 飯島 竹子  
東華近校尋三

小川にのぼる

どじょうの子  
さびしい小川に  
一人でのぼる

玉算

茨城縣鹿野郡 相澤 勲 吾  
若柳校尋六

ばらばら

玉算

面白い  
できないけれど

面白い

犬

静岡縣富士 佐藤 源 吾  
郡大宮校

犬がないて

とんで来た

耳をつかんだら

わんとないた

尻尾つかんだら

又ないた

笹藪

大阪府西成郡今 苅玉 政 之  
富郷四校尋五



(賞) 妹の私 自由  
操 田 武 五尋校學小金東縣栗千

男の人や女の人はめい／＼自分の子をお  
ぶつてもう帰る者もあり、おぶつて居る  
者もあつて、廊下一ぱいです。お母さん  
はとう／＼来ませんでした。

角力

友達を見ながら一人で歸らなければな  
らない弟の心はどんなでせう。私は直  
ぐ一年生の教室へ行きました。弟はま  
せん。私は一人歸つたのだらうかと思ふ  
と、向かはいさうで、かさかさ、す降つ  
て来る雨の坂を夢中に下りた。いくら行  
つても走つても弟は見えませんが。とうと  
うあの風の強い橋の上まで来ました。や

うじとよびだしとがないとすまうになら  
んの」かう云ふと末陰君が、「そらさうや  
とも」と、もつともらしい顔をして答へ

た。それで僕が「僕がぎよちになつて末  
陰君がよびだしにしてはどうだらう」と  
いふと末陰君は頭をゆがめてかんがへて  
ゐたが、氣がついたと見えて、「さんせい  
さんせい」といつた。

自由選、やどかり(賞)  
福井縣大飯郡高濱小学校高二  
西 本 義 秀



「やあ」といつたが米村君が「まつた」とい  
ふ。今度はと思つて木の枝をひくと、寺  
本君はするどい目をみはつて「やあ」とい  
つた。米村君「やあ」といつた。どちら  
もまげぬきで相手のくびをつかみあひを  
始めた。それでも米村君は右の足で向う  
の左の足をかけた。これにはよほどつよ  
い寺本君もへいこうして、ひよろひよろ  
とひよろつて土俵の外へ出た。其の時  
私は右の手をあげて「米村君勝ち」といつ  
た。眞赤な顔をした寺本君はしりをかゝ  
へて木にこしをかけて居た。米村君が



遊戯 小敷  
小敷の中で  
小供が二人  
なくした種を  
さがして

### 夕暮

大分縣大分郡 油布ひで子  
狭間小学校

夕暮の佐賀縣道を  
荷馬車が歸る  
幾だいもく  
ゴロゴロと  
音立て、  
かすかに聞こえる  
唄うたふ聲にも  
何んとなく  
淋しい夕暮

### がらす戸

長野縣上伊那郡 酒井睦江  
東春近校尋三

がらす戸をすかして  
向ふを見たら  
山にどさく  
白い雪。

### けむい

千葉縣東金 佐川まつ  
小學校尋五

けむいのがわたしの目に  
ちよいとわいたら  
大い涙が一つほろりと  
おゆの中におつこつて  
ばちんとはねた

### 枕木

名古屋市呼続 水野芳子  
小學校尋三

枕木が一行にならんでる  
先生、十二本目のが  
話をしてゐるよ

### あんま

千葉縣東金小 今井利  
學校高一女

あんまさんつゑをたよりに  
たゞ一人  
ピーヒョロ／＼笛ふいて  
さびしい町を通つたら  
お月様が呼びとめて  
いくらでもむなと  
きましました

つたといふので一とうの旗をやつた。末  
陰君はどもつて「よよねむらくんつづ  
つよいの」とつづきなうにいつて居た。

### 猫が居なくなつた

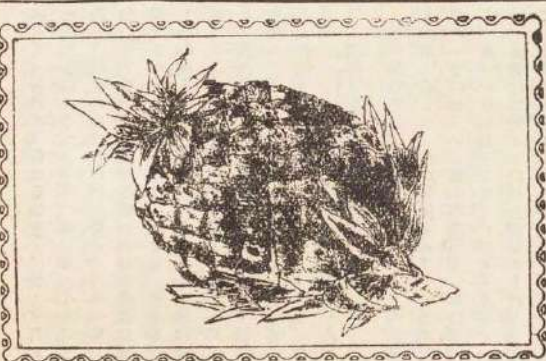
山梨縣北巨摩郡 加久保 保  
小淵深校尋六

朝おきて見るといつも「やんにやん」といつてごはんをたべたがつてすりついでくるちいがこない。「ちいこーちいこー」と呼んだがこない。お母さんに「ちいほどこへいつたづら」といつてきくと「今にかへつてくらどつかのおくらにでもはいつてゐるづらよ」といつたので、あんしんして學校へは来たが一日ちいことばかり思つてゐました。學校からかへつてお母さんに「ちいがかへつたかい」といつてきいたら「まだかへらねえは」といつたきりさしきの方へいつてしまひました。そして其の晩もかへつて来ませんでした。次の朝になつてもかへつて来ませんでしたので、朝はんをたべながら、父「どうしただらう、へえかへつて来さうなものだに、どつかで死んででもいやあしねへか」といふと、母さうへなあ、いくんちも

かへつてこねえから死んでもゐるだかもしらん父、いい猫だつたに死んちやおしいものだ母、まだけさは早いからみんなめつて見さあ」といつてごはんをすましました。お母さんがくらやをめぐけてお父さんがしごと部屋のかいをめぐけて私は家のまわりをさがすことになりました。私は「ばんさきに下の家へ行きませんか」「三日まへまではよく来たがこねえだは見えねえよう」「ほうかい」今度はたみ子さんの家へ行きましたがやつぱり「こねえ」といひました。又西の家では「せんうちにはよく来たがこねえだこねえよう」とおばさんがいひました。おつちやんは「あんないい猫だかされたかがつれていきやしねへか」といひました。私はがつかりして家へかへつて「どこにもいねへよ」といふと、おつかあさんが「こつちにもいねえだよ、きつと死んでしまつたづら」といひました。それから急に家中がさむしくなりました。

### ばい木くばり

福井縣大飯郡高 中川 秀子  
福小學校高二  
「そんなほそいのは目方に入らんもつ  
自由書、おんらい」賞  
臺灣臺北市第二公學校尋五  
王 華 拱



と太いのを大きな聲でしやべりながら、ばい木の目方を掛けはじめた。今落ちる杉野さん足にあたるあぶない」と杉野さんに注意する。杉野さんはうろ／＼しながら避けられる。又私ははかりをはなして「さあ上等、上等」と云ひながら網の中のばい木を一本一本引きぬいた。そばにあるひろい板の上へドスン／＼と投げた。ばい木は砂をのこしては方々へ飛ぶ。それが出来るとしぼり役の人がモッコに入れてはくばつて行く。私等のちらばしたのをよくまとめては、かついで行く。こんどは、次のに取りかゝる、細いのが太いのをませ合せて網に入れる。あんまり乾いたのばかり入ると、あとに悪いのがのこるから、悪いのもませで」と云ひながら入れる。「こゝにも一組」と云ふと、次のくばりやくはそれを一生懸命モッコに入れる。人つてしまふと太い竹をさして二人つづでかついで行く。次の人の歸つてこゝろに早よ／＼とせき立てながら大急ぎでかけた。だんだん早くなつて行く。





通信

お父さんや、お母さんや  
兄さんや、姉さんに

山本 鼎

△小學生諸君の畫も近來眼になつてよくつて来た。無精でない、氣力のある先生達があちこち起つて、これまでのやうな貧相なお手本よりも何千萬倍——それは比較にならない程の良い畫のお手本が他に、手近に、到る處にある事を惜つて、小學生諸君を其方へ導き出したからです。

△どうが學校の先生ばかりでなく、お父さんにもお母さんにも、兄さんにも姉さんにも早く此事を知つてもらひたいものです。

△子供を愛する人は子供の自然な利溲、その創造力を愛さればならぬ筈です。その創造力の順正な生長を希はればならぬ筈です。それならば、子供を包むに最も優美な環境を

以てすべきです。彼れらを導くに最も切たかな教材を以てすべきです。描く事によつて子供等は疑ひのうちに何を學ぶのであるかを知つて下さい。本具の智慧の何物が其處に生長するのであるかを知つて下さい。その學びとその生長とが、吾々の社會にどんな功利を致すかを知つて下さい。——よく御考へになれば當然悟らるゝ事ですが、それに就て私に質問して下さいならば、いつでも私ばよろこんでお答へするでう。

本月の選拔畫に就て

△西本義秀君の「やどかり」なかりしつかりと出来て居ます。君が毎號見せてくれる風俗畫は一方にやういふ寫生を怠らない事によつて、良い進歩を見るでせう。たゞ不足をいへば、此畫は部分々々に丸味をあらはして居ても全體の丸味を見ずに居るのがいけません。△海老澤秀夫君「銅製の雉子」もなかりしつかりした技術です。物の姿勢がたるみなくつかまれて居ます。君は勉強甲斐のありさうな人です。

△久保田公平君の「人」悪くばありませんが少し委と形を(細か)い處を見る事ではない)落着いて見て描くべしです。

△武田謙三さんの「私の妹」面白い。併ししるの痛はなんです。王華侯君の「おんかい」の寫生は大へんよく出来て居ます。唯やはり全體としての丸味を見てほしかったですね。影日なたを濃淡に見てそれを見えたやうに描くのです。かういふ丸味の美しさをもつた果物は、丸味が表現されたがいでせう。

△一瀬三郎君の「自轉車二臺」はなかに、良い。唯、羽目板の片ぼかしの際どりは適當でない上にひつっこい感じがしますよ。毛筆は結構大いにお使ひなさい。(二月一日)

久振りに綴方を選んで

選者

▽今月から久振りにまた私が選をする事になりました。丁度一年振りですが、その頃とくらべると集つた數の多いのに先づ驚きます。一通り目を通すだけでも大變です。いゝ作も澤山ありました。以前も優れた作は澤山ありましたが、下手な作品が多かつたのに、此の頃では全體がみんな上手になつてゐる事が大變なものしく思はれました。

▽今月集つた作について感じた事を少し述べますと、先づ賞に入った竹内君の「馬の足が折れた」が一ばん目をひきました。足の骨を

折つた騎兵の馬が肉屋さんに賣られてしまふまで書いたのだが、竹内君は賢くつて頭のいゝ人と思えて、ムヤミと誤をこぼして可笑さうだうなんで書かないで、その時の有様を少しの筆致もなく上手にかいてゐます。誤をこぼさない處が女の心と違ふところだらうが、かういふ書方がステキにいい。

▽富山小學校の日淺文代さんの作は二つともいいものでした。殊に賞になつた「可哀さうな時」の方が感じ方が強いだけ優れてゐました。愛してゐるものと別れた時の悲しみがよく出てゐます。ふんどうのやうな涙がこぼれ出た」のあたりたまたまなくいいです。

▽芝八重子さんの「弟を學校から送つて」も氣持のよく出た作だ。弟が雨の中を一人で行くのを見て可哀さうに思ふあたり、殊によく氣持が出てゐる。

▽米村治二君の「角力」は滑稽な味のある文で、なかに面白く讀みました。

▽加久保君の「猫がなくなつた」もすぐれた文だ。あななくなつたので猫が餘計可愛く思はれて来た氣持、それから一々尋ねて歩いて、どこでもないと言はれてがつかりして歸つて来た時の氣持と、それからおしまひに「急に家の中が淋しくなつて来た」とい

新しく出た本

◆童話作法問答(野口雨情先生著) 童話が一日と盛んになつて來ましたが、童話とは一體何であるか、どうすれば新しい良き童話が作れるかと云ふことに迷つてゐる方が澤山あります。この本は、さう云ふ方々のために、丁寧に親切に誰にも判り易く書いてあります。今まで童話とはどんなものだからか知らないうちでもこの本を讀めば、すつかり童話が判つて直ぐ作れるやうになります。その上すべて問答體になつてありますから、小學校の先生方の教材にもなりますし、お母さまやお姉さま方がお子さんや妹さん達の質問にも直ぐ答へが出来るやうに、一々實例をあげて明瞭に書いてあります。もう直ぐ第五版が出版されるのを見てもこの本の價値が判りてせう。四六判二百八十頁、定價一圓五錢八錢、東京神田南神保町尙文堂書店發行)

◆自由畫教育(山本鼎先生著) 日本で一番始めに自由畫を唱へたのは山本先生であります。そして、山本先生の選で日本で初めて自由畫を募集した雜誌は「金の船」です。本書は山本先生が自由畫についての話を集めたものです。昨今藝術と教育の一致が方々で唱へられて來た折柄、どこの小學校でも是非參考に讀むべき本です。尙、金の船」にも選した自由畫も、澤山の口繪の中にはいてあります。内容と云ひ装幀と云ひほんたうに優れた本です。(四六判、原色版十八葉、富麗銅版十葉、本文三百十九頁、定價三圓五十錢、

東京神田南神保町アリス發行) ◆黄金の河(保富徳源氏著) 本書は有名な英國の哲學者ジョン・ラスキンが一生一代にたつた一つ書いて残した童話と、露西亞で一番面白い民話をリチャード・カールソンが英文で書いたものと二つを譯されたのです。二つとも大人にも子供にもよく判つて、本書に面白い本であります。小學校のお話の會などに點す材料には此の上もいゝ適當な童話であります。(伊藤彌太氏裝幀口繪、四六判二百六十五頁、定價一圓三十錢、東京牛込津久戸町瑞華書院發行)

◆星の子ども(小林園子、千賀子、章子童話集) ほんたうに星の子供のやうな園子さん、千賀子さん、章子さんの小さい姉妹三人の童話を集めた美事な本です。三人の姉妹がそれなりに書いた自由畫の表紙に、自由畫の口繪に、自由畫の挿繪もついてあります。裏のまの郷土(大阪)の言葉で書かれた邊が殊に優れてをります。尙、奥野、北原、西村三氏の序文や跋もついています。(四六判二百四十四頁、定價一圓八十錢、東京麹町飯田町天祐社發行)

◆童話掲載外佳作 △母と別れて(櫻田はる) △お地蔵さん(長谷川富雄) △金屋銀屋(今井正) △白兎の話(角川信) △温室の姫君(久保一馬) △小山羊(幸原元吉) △たへちゃん(飯田龍子) △白と赤(高桑豊) △二人の子熊(福島省三) △マヤの行方(松岡光子) △狐の馬(今田重吉) △罪を犯した鼠の話(吉本茂樹) △子供達の恩返し(後藤廣三) △



ふ一句で、夫から後の淋しさが申分なく出た。  
 ▽中川秀子さんの「ばく木くばり」では物のこまかい見方に感心した。荒井いく子さんの「病氣になつた時」では検温器も知らない田舎の少女が病氣になつた時の事が、不器用にいつぱりなく書かれてゐる。しかし、かういふ不器用は決して悪くない。この外永田八重子さんの「子の生れた朝」高橋治門さんの「お使ひ」村井初枝さんの「昨日の事」などそれぞれいふ處がありました。(齋藤佐次郎)

### 童話の選後に

野口雨情

▽皆さんの原稿の書き方が、らんばうで困ることを前號でチヨイと申しましたから、こんどは違ふだらうと楽しみにしてゐましたが、矢つ張り駄目でした。  
 ▽さつと皆さんは、私の書いた「童話の選後」に「をお読みになりませんか。たとひお読みになつても自分のことが書いてない、づうづと讀んだらうで頭の中へいれませんか。  
 ▽皆さんの投稿は、どんなに汚なく苦茶々々に書いたものでも、私は丁寧に一行々々と讀んで見ます。そしてその中にたとひ一行々々と重疊していても言葉の使ひ方なり、いふ思ひ

つきなりがあると、ほんたうに嬉しくなつて来ます。が、いくら讀んでも駄目なのばかりです。が、つかりして下さり。  
 ▽一と月毎に、童話が盛んになつて來るので一と月毎に投稿の数もふえて來ます。普通の月でも皆さんの投稿を一行づつ讀むのに二日間かゝります。  
 ▽二日かゝつて讀む童話の中から、いつも二十篇以上三十篇以下しか誌上へは掲載が出来ないのです。掲載外佳作として皆さんの名前と題とを發表してゐるのは、當然誌上へ掲載してよい分だけなのであります。  
 ▽この外に、ほんたうの没書になる分は、いくらあるか、一々數へては見ませんが、毎號五百篇は缺けまいと思はれます。  
 ▽それほど澤山な投稿の数なので、投稿規定には用紙は皆さんの自由に任せてはありますが、成るべくは原稿用紙へなり牛紙へなり書いてよこしていただき度く思ふのです。そして、原稿紙でも牛紙でも、皆一段に書いて、二段だの三段だのに重ねて書かないやうにして下さい。重ねて幾段にも書いてあると讀むに困ります。どこからどこへ讀むのか解らなくて大變に困ります。また「皆さんへ申したとおり」ともありますが、あとで次號の投稿

を見てからに致しませう。  
 募集童話の選後に  
 齋藤佐次郎

### 記者より

▽今月の選に集つた童話には傑作がありませんでした。それで今月一と月だけ止むなく推薦をお休みにしました。  
 ▽しかし、特色ある作風のものば四五ありました。例へば櫻田はるを氏の「母と別れて」、久保一馬氏の「温室の姫君」、今井 正氏の「金

▽皆さん、今年も、もう直ぐ櫻の花が咲きますね。寒い、寒いと引つ返しがうでた皆さん方も、これからまた運動會や遠足やと郊外の遊びが多くなりますぞう。  
 ▽皆さんは「金の船」に講演部の設けられたことは御承知でせう。「金の船」は皆さん方の童話や童謡を雑誌の上でばかり讀んでいただけでは、ほんたうのお読みが薄いやう

## 金の船

「金の船」の誌友には、いろいろの特長があります。まず、月々非常な勢で増加して参りました。誌友規則書は編輯所宛にお申込み下さい。すればお送りいたします。奮つて御入會下さい。

星屋星「土橋方氏の「よい子供」角川信氏の「可愛い白鬼のお話」など。  
 ▽中でも「母と別れて」は特色ある作には違ひありませんが、子供に安価な涙を強ひるさひがあるのが遺憾でした。もし書方があると考へます。土橋さんの作はこの間の作程感激がないので、速者なことだけが目につきました。一體に今月の作には力のこもつたものがありませんでした。(二月十日)

な氣が致しますので、皆さん方が澤山お集りの會のあるとき、一週間なり二週間なり前にお申込み下さると、講演部の先生がお出掛けになつて、童話でも童謡でも、皆さんの方聞きたいと思ふお話を致されるのです。  
 ▽本誌の創刊以来編輯のためには大へんに努力なされた山本作次氏はお家の御都合で一と先づ編輯を辭せられ歸國されました。  
 ▽「金の船」の合本は毎月讀者の皆さんから驚く程澤山のお申込みを受けますので、ぢきに品切れになります。何しろ一冊の大きな童話

- の太木(大原風政) △親の寶物(新野新一郎)
- ▼童話掲載外佳作 △なく島(熊本 齋藤寛) △野郎(齋藤 橋本久夫) △山の鳥と龍の島(米澤 遠藤ひさし) △小さな芽(東京小野田露村) △年より狐(福岡 熊谷星裡) △はぐれた馬(愛媛 坂井貞三) △僕のおうち(大阪 榎重善義) △街の灯(東京 佐藤博)
- △だんまり虫(横濱 河口政明) △つばめ(東京 鹿山榮次郎) △鳥の行列(函館 西森文雄)
- △きこり(大阪 尾崎實次郎) △小島よ(秋田 福田ミチ) △天女の小母さん(東京 石井加奈女) △寒い風(廣島 山崎麗詩郎) △けが(京都 片山博) △木の葉(栃木 安田篤郎) △細いお月さま(滋賀 藤川敬) △ホート(愛知 宮地常一) △栗(大阪 村上夕村) △夕方(山梨 土橋方) △狸の踊(京都 富田孤村) △難準(秋田 花田彌一郎) △流れ星(岐阜 松野準) △野火(香森 山田あい灯)
- ▼幼年詩掲載外佳作 △空氣銃(長松秀夫) △ぼろし(阪野政子) △蟻(水野芳子) △お月とお星(岡田稻子) △やいちゃん(栗野さく) △かへる(栗野英雄) △こじき(栗野武政) △やま(赤坂秀子) △風(渡邊佐太郎) △雪だるま(持田三郎) △つばらひ(武井新市) △一けんや(上竹基滋) △山茶花(秋山三五) △雨(遠藤明夫) △ふろのな(望月武夫) △つばめ(渡井昇) △目(關口松子) △くじ(横濱秋男) △ほし(柴田三) △やめ(鹿兒島みちる) △星二つ(井上幸子) △鐵砲ぶち(倉持健一) △れすの(寺田モロリ) △大箱(栗十九) △風(土屋ゆきえ) △マリカ(三上
- きみ) △あかたんぼ(鈴木初子) △あまひ(成瀬利郎) △銀杏の葉(山中賢三) △くらくらい(米除肇) △あなを(岡野篤太郎) △樺の木(長谷川春) △北風(川野正太郎) △とり(キヨナガ) △火しう(山崎隆一郎) △鳩(鈴木仙三) △夜(由比壽子) △小田(上) △上(菅生五六) △アフリントナ(小田暉) △時計(菅生五六) △子) △あれ(うづ) △酒井雪彦 △キエツロイ(高橋久蔵) △ボスト(澤澤秀雄)
- ▼綴方掲載外佳作 △おが(ぼつた) △福井 胡間六郎 △犬の子(愛媛 岡田ミヅエ) △おに(ごつ) △茨城 栗野三三 △幼い見(秋田 高橋彦治) △お使ひ(長野 高橋治門) △ぢやんけん(と) △千葉 村井初枝) △先生の眼鏡をこぼした時(北海道 能登尚平) △火事の夢(鳥取 乾武夫) △近所の犬(鹿兒島 久保一郎) △とけ行く心(埼玉 持田しげの) △日曜日(或る畫(京都 河野市太郎) △雀打(神奈川 關口榮一) △電車を持つ間(大阪 大塚義博) △一つのみかん(群馬 眞庭海) △夢で海底に遊んだこと(岐阜 堀場政司) △芝居見物に行く道(福井 山口美和) △ゆふへ(秋田 紺野野) △はいしやで(福井 佐野キヨ) △二匹のひよこ(滋賀 藤谷重之) △はく(東京 松岡新) △悲しかったこと(茨城 栗野シヅ) △好きな先生の話(茨城 多田の果) △冬の夜(杉野と) △面白かつた 夢の(愛媛 阿部早子) △友達の別れ(秋田 深井イマ) △小犬物語(神戶 高橋久蔵)
- ▼自由畫掲載外佳作 △學生(東京 久保田公平) △人物(千葉 市東千代子) △あ



と賞品集が、ごく安い値段で買へるのですから歓迎される願です。今度は全部取揃へて深山こしらへましたから至急御申込み下さい。▽岡本錦一先生のお伽童展覧會が今年の末に開かれる筈です。それまでに澤山の美しい繪をかき上げたいといつて、切りに意氣込んで居られます。

### ◆金の船 講演部が

#### 一ヶ月間にした仕事

▼東京市外千駄ヶ谷の東京市民教會で牧師の田中彌助先生の主催で金の船講演部が出張してお話の會を開きました。大きな立派な會場でしたが、一ぱいの満員でおそく来た方は入れませんでした。沖野先生は聖書の中のモルタガイの子供の頃の面白いお話、それから「慈深者と天狗」といふ長いお話、それから、判れ返るばかりの大喝采でした。それが、野口先生の童話の朗吟が二度ありましたが、これがまた皆さんに喜ばれて大喝采でした。その日は岡本先生も斎藤先生も見えませんでした。

の皆さんを喜ばせました。大観望な會でした。▼茨城県久慈町の久慈濱病院に五來孝順さんからは是非沖野先生に来て講演をしてもらひたいとお願ひがあつたので、二月十五、十六の二日にわたつてお出かけになりました。主催者の五來さんは毎年久慈町の小学校で學藝會が開かれる時、生徒さん奨励のために優等生に賞品をあげてゐたのですが、優等生には毎年たいてい同じ人がなるので困つてゐたのです。それで今年から考へをかへて、生徒さん全部を喜ばせたいと思つて金の船の講演部にも来てもらふことになつたのださうです。沖野先生もこの譯を聞いて喜んでお出かけになりました。そして、二日にわたつて面白い面白いお話をして生徒さん達を喜ばせました。▼二月廿一日には山梨縣南巨摩郡増穂村尋常高等小学校から、是非沖野先生に来てお話をしてもらひたいと、同校の大久保先生がわざわざお上京になりました。そこで沖野先生は廿日に大久保先生の道案内で飯田町驛を出発しました。増穂村小学校は身延山の途中にある生徒千三百名、なか／＼大きな學校です。沖野先生は二十一日、全校の生徒の前にて面白い／＼童話を講演なさいました。東京の先生のお話(面白い)といつて、生徒さん達ほど喜びました。▼三月五日は東京市外角筈のレパノン教會でお會が開かれました。「金の船講演部」の沖野先生と野口先生とが例の如くお出かけになりましたので報告です。

## 『金の船』講演部の發展

「金の船」が童話講演部を設けたことを誌上で發表しましたところ、各方面から驚くほどの歓迎をうけて續々とお申込みがありました。しかし、日がかち合つたりして一々お引受けすることが出来ないうえ、それが、それでも別項記載の通り僅か一月の間に東京で三回、地方で二回、都合五回の講演に出張いたしました。そして、今も尙續々各地から電報や書面をもつて御依頼がありますので、日の割當てに困つて居るやうな有様です。

ところが、先日來關西の各地と朝鮮及滿洲の各地からも是非にといつて講演を頼んでお出でになりました。大變熱心な御希望でありますので、私共はこの際一大飛躍をするつもりで、三月十二日に沖野先生が關西に向つて童話講演の旅に出かけられることになりました。つゞいて五月一日には朝鮮及滿洲の各地へ向つて出發される豫定になつてをります。この外に尙、沖野先生の御都合のつき次第東京及地方の講演にも參るつもりになつてをります。新しい時代の童話の宣傳が、かやうにして「金の船」の力によつてます。普及して行きますことは、まことに喜びにたへません。

### ◆童話講演部新設◆

「金の船」講演部は童話の部だけを置きましたが、童話の方も是非設けてくれといふ御希望が切りと參りますので、野口先生にお願ひして童話の方を擔任していただくことになりました。これからは童話でも童話でも御希望にしたがつて講演に出張いたします。

び(大阪 武中彌太) △栗の皮むき(藤井 西本義一) △村(新潟 江口菊枝) △家(福島 越中謙吉) △その家(長野 土屋信太郎) △私の家のまへ(栃木 鮎瀧健一) △兵隊さん(静岡 菊池孝作) △火鉢と魚(愛知 岡本秀一郎) △イシキミ(山梨 細田倫) △野(之) △ひこうき(東京 川崎春義) △まる木(京) △黒岩(廣島 牧野忠) △さみしい夜(長野 柳澤とし子) △稲荷堂(東京 矢野輝基) △大掃除(熊本 田方義時) △ソラツ(山口 田中芳男) △春(岡山 村田晋三) △巡査(神奈川 澤村敏郎) △なごま(鳥根 伊藤泰夫)

◆金の船誌友◆名古屋 彌富小学校 ○愛媛 櫻井小学校 ○長野 太田小学校 兒童文庫 ○岩手 小田島正君 ○栃木 菊地良吉君 ○兵庫 西崎岸江君 ○京都 田附智恵子君 ○東京 佐々木高明君 ○京都 井上桐子君 ○東京 山崎次郎君 ○東京 中島眞治君 ○岡山 片山富貴子君 ○長野 田村説人君 ○山梨 土橋都子君 ○廣島 山本茂七君 ○京都 橋本友子君 ○熊本 宮崎九郎君 ○北海道 中村太郎君 ○東京 川尻英次君 ○岩手 及川金一郎君 ○北海道 川端キキ君 ○群馬 村松ニキ君 ○奈良 中室保子君 ○栃木 安田善衛君 ○大分 酒井好文君 ○東京 本阿彌君子君 ○函館 大室重雄君 ○岩手 長坂小学校 ○北海道 鳴明文庫 ○東京 草野松彦君 ○東京 小山喜美代君 ○横濱 若尾輪子君(以下次號)

左の通り、本誌講演部が出張することに確定してをりますから、當日は市内の讀者の方々に、是非お出でをねがひたいとございます。

○四月十五日午後五時半より  
麻布區仙臺坂上 安藤記念教會に於て

△童話 沖野岩三郎先生  
△童話 野口雨情先生

「金の船」講演部規定

▼「金の船」は新時代の童話と童話を普及するために講演部を設けました。  
▼講師は、童話は沖野岩三郎先生、童話は野口雨情先生が擔任されます。童話なり童話なり、御希望に應じて講師が主張いたします。但し、他に講師のある場合はお断りいたします。  
▼講演は先生方のお仕事の都合上、なるべく毎月十五日から二十五日までの間に制限いたします。

▼講演をお望みの方は、東京市外田端三五一「金の船」編輯所へ宛てお申込み下さい。  
▼講師に對しては、市内ならば車代、市外ならば往復旅費、宿泊を要する時は其の宿泊料等を依頼者から御支拂下さい。







# 懸賞創作募集

自由

少年少女の創作  
 山本 鼎先生選  
 若山 牧水先生選  
 編輯部選

【意注】

懸賞は何でもかまいません。諸君の日々見たり、感じたりすることから、諸君の好きなものを諸君の好きなふうになし、詩なり、文なり、してかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は学校や学年(または住所と年齢)とおとさないようにしてください。用紙は自由書はなるだけ書用紙に、幼年詩や短歌はなるだけ原稿用紙(または牛紙)にかいてください。よく出来た方には「金の船」特製の賞品を差上げます。次號が切は三月廿八日(その以後は次號へ廻る)發表は五月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地「金の船」編輯所。

童童

一般讀者の創作  
 齋藤 佐次郎 先生選  
 野口 雨情 先生選

【意注】

童話は二十字詰二百行以内、童謡は二十行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして入選の場合は金の船賞を呈します。締切發表宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。



## 美しき「金の船」の合本

春は來たれり。諸君の机上に、書架の上に、總クロース金文字入の美しき「金の船」の合本を飾られよ。童話に、童謡に、曲譜に、繪畫に、限りなく諸君の清興は湧かむ。

- 第一輯 第一巻初號より第二巻五號まで 七冊合本 定價一圓八十五錢
- 第二輯 第二巻六號より第三巻十二號まで 七冊合本 定價二圓十五錢
- 第三輯 第三巻一號より第三巻六號まで 六冊合本 定價一圓九十錢
- 第四輯 第三巻七號より第三巻十二號まで 六冊合本 定價一圓九十錢

(同時に三輯以上御注文の方へは割引を致します。御注文は、總町九段下(キンプソフ)社又は東京市外田端三五十一「金の船」編輯所へ宛て願ひます)

一一一

定價 壹冊拾錢 送料壹錢  
 三ヶ月分三冊(送料共)九拾錢  
 半年分六冊(送料共)壹圓六拾錢  
 壹年分十二冊(送料共)叁圓六拾錢  
 但し新年號四月號九月號は特別號で廿五錢です。御注文の際は特別號の號だけ必ず一冊五錢づつ加へてお拂込み下さい。  
 振替口座東京〇五七貳拾  
 送) 御注文は必ず前金で御拂込み下さい。金 送金は振替が一番便利で御座います。の 切手代用は(壹錢切手)一割増しです。注) 第何巻第何號よりと書いてください。意) 住所姓名ははつきり書いてください。  
 廣告料は御覽會次第お答へ致します

大正十一年三月六日印刷納本(毎月一回) 大正十一年四月一日發行(日發行)  
 編輯人 齋藤 佐次郎  
 發行人 山本 鼎  
 印刷人 大田 隆光  
 印刷所 キンプソフ社  
 東京市外田端三百五十一番地  
 電話九段二七五二番  
 東京市麴町區飯田町六丁目廿五番地  
 電話小石川五三八七  
 (本號に限り金參拾五錢)



# シヨカナ

お嬢ちゃんのお友達

六冊半々分  
送料共壹圓五分

三月號

定價一冊廿五錢  
送料五厘

家庭に無くてならぬ  
繪雜誌

それから女の子が一度「ナカヨシ」を見ると、他の雑誌では承知しない譯は、繪とおはなしとが純な子供の心持にしっくりあつてゐるからだとか、或学校の先生が申されましたが、確かにこの點は我社の誇りとする處で御座います。

美しい繪とお伽話で  
一杯の幼女繪雜誌

上中流の家庭で何故我社發行の「ナカヨシ」がもてはやされるかと云ふ事を調査して見ました。其結果は繪が上品で美しく、書いてある事が一字一句の末に到る迄兒童の教育上周到な注意を拂つてあるからだと云ふ事でした。

奇麗な奇麗な手工附録

東京麹町飯町一丁目二五番地  
キノン社 發行  
電話九二七二番

お待兼の少女ロマーヌス號

# 少女界

少女ロマーヌス八重櫻匂ふ夕……美智子  
少女ロマーヌス愛は輝く……畑中紅花  
少女ロマーヌス悲しみなき國へ……山田邦子  
少女繪花吹雪する宵……まさの  
物語り星がまたく……最上愛雄  
少女詩S公爵夫人の首飾……長瀬秀磨  
小説美しく懐しき少女詩——運命の花——おもひで——  
春のこころ——

懸賞少女ロマーヌス發表

口繪と寫真版——英國皇太子殿下——博覽會——散る花——

繪畫ロマーヌス櫻さく家……花園ゆう子  
少女ロマーヌスフットライトを見つめて……横山壽篤  
物語かぐや姫……原義孝  
少女ロマーヌス東の港より西の街へ……横山美智子  
對話春のうれひ……夕月  
小説ロマーヌスマごころ……谷光之助

ゆびわ……  
なかによし……  
兄上を思ふ……  
三人のうちしる……  
すぎゆくもの……  
春風の主よ……  
忘れ得ぬ人へ……  
棧橋に立つ少女……  
試験の終るまで……  
不思議なお禮……  
滑稽繪ばなし……  
木常紺三郎より……  
綴方、通信……  
少女の歌へ……  
心より心へ……  
少女の印象……

發行所  
キノン社  
東京麹町飯町六番地

見本送星  
少女界引替券  
一錢六券



淋しい便り



# 將にシズー來る

## 諸君の爲代理部の開設

□好評噴々たる



定價表  
CBA  
號號號  
その他五十四圓まで  
二十九圓五十八圓  
三十三圓

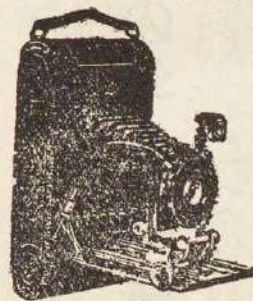
□賞讃の的となれる



定價表  
參貳壹  
號號號  
その他七十五圓まで  
二十九圓五十八圓  
三十三圓

價值其他の御希望を明細記入の上  
御注文になれば責任を以て必ず諸  
君の満足の出来る品を撰擇します

□ラメカのき向人素□



定價表  
十二圓  
十八圓  
廿二圓  
廿六圓  
三十二圓  
三十三圓  
五十三圓  
七十五圓

御問合せは必ず往復葉書か返信料添の事。  
御注文は住所を分りよくくわしく書く事。  
代金は總て前金の事、剩餘の節は返金す。  
拂込みは成るべく振替口座に拂込むこと。

電話九段貳千七百五十貳番  
振替口座東京〇五七貳番

型録入用の方は貳錢切手二枚要す



伊吹子も明次も、待草臥れて寝てしまひましたが、おツ母さんの式江は、薄暗いランプの下で、縫物をしながら、沖へ行つた人の歸りを今か〜と待つてゐました。

夜はだん〜と更けて行きました。

最う時計は一時を打ち二時を打ちました。けれども人の話聲も寢音も聞えて來ませんので、式江は心配で堪らないやうな顔色をして、静かに起き上りました。そして東の窓の所へ行つて、音を立でないやうに、静かに障子を開けて濱の方を見ますと、丁度海の彼方から高くさし昇つた片破月が、並木の松の枝に懸つて、海の面を薄白く照してゐました。

「海は静だから、難船したとも思へない。屹度急病でも起つて、岩の上で苦しんで居なさるに違ひない。早く居所を見つけて下されば宜いが……」

式江は口の中であう咬きました。そして暫く海の方を見詰めて居ましたが、岸を洗ふ波の音が、ざあゝ、ざあゝ、と微かに聞えるばかりで、作爺さんの聲も、熊田先生の聲も聞えませんでした。

静に障子を閉めて、火鉢の前に戻つて來た式江は、鐵瓶の蓋の茶の實を、指尖で弄りながら、悲しさうに嘆息を吐きました。お湯は内證話を囁くやうに鐵瓶の中で沸いてゐました。

「あ、歸つて來た！」

と言つて式江は入口の方を見ました。

けれどもそれは人の寢音ではなく、隣りの斑犬が杉垣の下を潜つて、庭を畑の方へ走り過ぎたのでありました。

時計は三時を打ちました。其の音に眼を覺した伊吹子は、むっくりと起き上



つて、

「お母アさん、もうお父さまは歸つたの？」と言ひました。

「否エ、まだお歸りにならないのよ。」

「熊田先生や、作爺さんは？」

「まだなの、けれども最う三時だから、やがてお歸りになるでせう。」

「然う、遅いのネ。お父さまが歸つたら、直ぐ起きて頂戴よ。」伊吹子は無邪氣に、又た寢床の中にもぐり込んで、すや／＼と寢入つてしまひました。

式江は一睡もしないで五時過まで待ちました。すると畑の向ふから、人の話聲が聞えて來たので、周章で、表戸を引開けますと、杉垣の外を此方へ歩いて來るのは、作爺さんと熊田先生と、若い時也さんだけでした。

「何所にも、舟は見えませんでしたか。」

式江の聲は顔へてゐました。

「岬を廻つて、あの邊をすツかり調べたが、何所にも商造さんの舟は見付からなんだ。どうしたものぢやらう？」作爺さんは心配さうに言ひました。

「多分太地沖へ行つたんでせう、心配は要りませんよ。今日中には歸つて來ますサ。」時也も慰め顔にさう言ひました。

「奥様、さう御心配なさらないでゐらッしやい。今日私は串本浦まで行かねばならない用事がありますから、勝浦の水上警察へ行つて、此の熊野浦の沿岸をすツと調べて貰ふやうにお願ひ致しますから。」

熊田先生も氣の毒さうに、式江の顔を見ながら慰めました。

「それは宜い、さうして警察から調べて貰へば直ぐに判る。では先生、宜しくお頼み申しますよ。」



作爺さんは、吾が事のやうに、頭を下げて頼みました。

三人は一時間ばかり話して、朝御飯を食べて歸りました。伊吹子も明次も起きて来て、大人同志の話を黙つて心配さうに聞いておりましたが、おッ母さんの式江が、裏の勝手口でお茶碗を洗つてゐる間に、窃と脱け出して、濱の方へ走つて行きました。

濱にはまだ一人の漁夫も来てゐませんでした。伊吹子と明次は砂丘の上に登つて海の方を眺めました。沖にも渚にも、牛若丸の繪のある美しい舟は影も形も見えませんでした。

「どうしたんだらう？ お父さまは？」

明次は足もとに生えてゐる蔓草の葉を蹴りながら言ひました。

「ねえ、お辨當も何にも持たないで、お腹が空いちやふワ。」

「でも、太地の港へ行つたのかも知れないよ。」

「太地で鯨を捕るのでも観てるんぢやなからうか。」

「ねえ、諾威人が大砲で鯨を射つのを観てるのかも知れんワ。」

「僕、此間熊田先生に太地へ伴れて行つて貰つた時、ノルエー人を見たよ。」

「若い人？ 年より？」

「若い人ぢやつた。日曜學校へ来るスミスさんより餘程若かつた。犬を伴れてゐたよ、大きな犬を。」

「隣りの斑より大きかつた？」

「うーん、すつと／＼大きかつた。僕はネ、その犬に、(來い、來い來い)ツて呼んだけど、知らん顔してゐたよ。熊田先生が英語で(カム、カム、カムヒアー)ツて呼んだけど矢張り知らん顔して横向いてゐたよ。」



「諸威の犬だもの、日本語も英語も知らんのは當り前だワヨ。」

「うん、本當に……それからノルエー人がヒユル〜バツバツ……て呼んだら、その犬は直ぐ尾を掉つて走つて行つたよ。」

「ヒユル〜バツバツつて、それが諸威の、来い〜なの？」

「うん、さうだ、屹度さうだ。」明次は笑ひながら言ひました。

「では、明ちゃん、お父さまのお舟を、ヒユル〜バツバツで呼んでみませう。」

「さうだ、大きな聲で……」

二人は沖の方へ對つて、ありつたけの大きな聲で、

「お父さまのお舟、ヒユル〜バツバ……」

「牛若丸の紅い〜青い〜お舟、ヒユル〜バツバ……」と呼びました。

二人が面白半分に、大きな聲で何度も何度も呼んでゐますと、右手の方の王

子權現の小さい社の蔭から、

「おい〜明坊、何を呼んでゐるんだい？」と言ひながら出て来たのは、時々商造の家へ遊びに来る漁夫の忠七爺さんでした。

「忠七爺さん、うちのお父さまはネ、まだ歸つて来ないのよ。」

伊吹子は爺さんの方を見ながら言ひました。

「あア、商造さんのあの美しい舟か。あの舟なら、俺は昨日の日暮れに、太地の岬のこちらで見た。商造さんは元氣で舟を漕いでゐたよ。」

「さう？ お父さまは何か言つて？」伊吹子は嬉しそうに訊きました。

「おうーいッて、俺が呼んだら、商造さんも、おうーいッて返事をしたよ。」

忠七爺さんは、それだけ言つて、濱に引上げてある舟の中から遊色した網を取出して、それを補ひ初めました。



伊吹子と明次は家へ走つて歸つて、忠七爺さんから聞いた話を、おッ母さんの式江に告げました。

『さうかい、それでは屹度太地の叔母さんの所へでも行つてゐるに違ひない。まあそれで安心した。』

式江は伊吹子を學校へ出して置いて、明次を伴つて熊田先生の所へ行つてみました。けれども最う熊田先生は、三十分も前に出かけて行つた後でしたから、歸り途に作爺さんの所へ寄つて其のお話をして置きました。

伊吹子が學校から歸つて來ない前に、明次は一人で、何度も濱の所へ行つてみました。けれども牛若丸のお舟は姿を見せませんでした。

伊吹子が學校の門を出た時、畑の間の小道を早足に歩いてゐる巡査さんを見ました。

伊吹子は、若しやお父さまの事で、巡査さんが家へ行くのではないか知らずと思つたので、大急ぎで走つて歸りました。

歸つてみると明次は、おッ母さんと話してゐる巡査さんの傍に立つて、巡査さんのサアベルを眺めてゐました。

『水上警察では、電話をかけて、申本浦まで、ずっと調べたさうですが、そんな舟は來てゐないといふ事です。だから、今度は伊勢の方へ電話をかけて調べて貰ふやうにしたらば宜しいでせう。併し昨日今日の天気ですから、難船の心配もなければ、遠くへ吹流されたといふ氣遣ひもありません。多分伊勢の方へでも見物旁へ行つたのちやアありませんか。何とか、そんなお話でもなすつた事はありませんか。』巡査さんは、式江の顔をジロ／＼と眺めながら申しました。



「否、そんな事は些とも……」

「お金をもつて行つたやうな形跡はありませんでせうか。」

「否、私は今朝、悉皆調べてみましたが、お金はみんなお家に置いてございます。」

「然うですか。」と言つて一寸考へ込んでゐた巡査さんは、「失禮ですが、近頃、あなた方は何か口論でもした事はありませんか。」

「否、あの人は、私が此所へ來ましてから十年の間、唯の一度も私を叱つた事はありません。」

「然うですか、不思議ですネ。」

巡査さんは暫く考へてゐたが、商造の年齢や人相を聞いて、それを手帖へ書つけて歸りました。

最う日が、とツぶりと権現山の後に落ちた頃、熊田先生は自轉車を飛ばして走つて來て、

「今水上警察へ電話をかけて見ますと、今朝の四時頃に、そんな舟が潮の岬の方へ漕いで行くのを見たものがあつたといふ事でした。まあそれで私も舟が毀れたのでも、御病氣だつたのでも無いといふ事を知つて安心致しました。多分田邊あたりへお出でになつたのでせうから、早速、田邊の警察へ御照會なされる事ですネ。」と言ひ置いて、直ぐ家へ急いで歸りました。

「お父さまは田邊へ行つたの？ どうして田邊へ行つたのでせう？」

伊吹子はおツ母さんの顔を覗き込みながら言ひました。

「田邊へ？ お父さまは蒲鉾を買ひに行つたんだよ。ね、お母アさん、屹度さうだよ。」



明次は笑ひながら言ひました。けれども式江は軽く頭を掉つたまゝ何とも言ひませんでした。

夕御飯がすんで、式江は熊田先生の所へ行つて、田邊の町の廻漕店をしてゐる榎木といふ人の所へ、

ヨシダ シヨウゾウ ツノチエ イツテナイカ フナツキバラ シラベテ  
クダサイ タノム ノツテイッタフネハ ウシワカマルノ エヲカイタ  
アタラシイ フネダス

と言ふ長い／＼電報を打ちました。

翌る朝六時頃に、榎木からの電報が届きましたので急いで披いてみると、

フネ ヒルスキ ツイタ ソシテ ユウカタ ドコカヘイッタ イサイ  
フミ

と書いてありました。それを讀んだ式江は顔を蒼くして俯向いてしまひました。

「何所へ行つたの？ え、お父さまは何所へ行つたの？」

二人は交る／＼おツ母さんに尋ねました。式次は明次の頭を撫でながら、

「お父さまは讃岐へ行つたのでせう、屹度さうでせう。」

と言つて、心配さうに俯向きました。

「讃岐ツて何所？ 遠い所？」

伊吹子は小さい聲で訊きました。明次は不思議さうに、

「アメリカより、遠いの？」と言つて、おツ母さんの顔を覗き込みました。丁

度其時、作爺さんが尋ねて来て、

「どうだい、商造さんの舟は、行先が解りましたかい？」

と言ひながら、縁側の所に立つて家の中を覗き込みました。





# 学校が始まります

学校のお用意は、もう出来ましたか、学校のお道具を始めとして、帽子、袴、靴、鞆、其他文房具等残らず

◆越三の月四◆

◆子	◆五	◆洋	◆寄
ル	月	人	裂
セ	ル	形	見
陳	陳	陳	切
列	列	列	反
(十六日より)	(十二日より)	(本月中)	物
			賣
			出
			し
			(一日より)

…は日休定…  
日五廿 日十

三越に取揃へて御座います

東京市 駿河町

**三越呉服店**

— 朝 日 報 —

「今、田邊の榎木さんから電報を戴きました。昨日の正午過ぎに田邊へ着いたらしいですが、直ぐ何所かへ出かけたやうです。イサイフミとありますから、明朝までには榎木さんの御手紙も着きませうが、一體何所へ出かけたんでせうネ？」式江は作爺さんの考へをも訊きたいやうに其の返事を待つてゐました。

「識股の金毘羅詣りでも思ひ立つたのぢやア無いかな、そんなら…。」作爺さんは首を傾げながら然う言ひました。

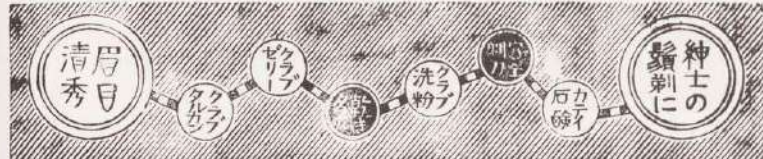
「えエ、私も不圖然う思ひましたので、今此の子達に、そんな事を言つた所でした。」式江は稍安心したやうに、淋しく笑ひました。けれども心の中では、「どうして、黙つて出かけたのだらう？」と思つてゐました。

「僕も伴れて行つて欲しかつたなア。」

と言ひながら明次は、おッ母さんの頸に兩の手を捲きつけました。



K2A-20



大正十一年六月十六日

大正十一年三月六日 創 始  
大正十一年四月一日 發行 第一回 (二日發行)

# クラーブ 煉菌磨

製法は科学的  
効力は徹底的  
信用は世界的



歯は強く  
美しく  
なる

口は清  
爽か  
くなる

(本誌ニ限り 定價 參拾五錢)

東京 キンノツノ社 發行